

山田郷内遺跡

—一般国道116号和島バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2007

新潟県長岡市教育委員会

山田郷内遺跡

—一般国道116号和島バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2007

新潟県長岡市教育委員会

例　　言

1. 本書は、新潟県長岡市鳥崎（和島地域）に所在する、山田郷内遺跡発掘調査報告書である。
2. 今回の調査は、一般国道 116 号和島バイパス建設に伴い、平成 2 年度に当時の和島村が建設省北陸地方建設局岡国道工事事務所から委託を受けて実施したものである。
3. 調査に要した経費は事業主体者の建設省北陸地方建設局岡国道工事事務所が負担した。
4. 遺構番号については、遺構種類を問わず通し番号を付した。
5. 出土遺物の注記は、「山田」とし、ほかにグリッド名・層位・遺構名等を記した。
6. グリッド枕の打設については、国土調査公共系座標を基準とし、㈱セントラル航業に委託して実施した。また、完掘後の遺構平面図については、第一・二面は和島村直営による水糸を使った造り方測量で作成した。第三面については、期間短縮のため㈱セントラル航業に委託し、昇降式高所撮影装置による空中写真測量と平板測量との併用で平面図を作成した。
7. 本書の執筆は、第 4 章 6 (1) は新潟県立歴史博物館の前嶋敏氏、第 6 章 3 は同館の藤森健太郎氏、駒澤大学の皆川義孝氏から玉稿を賜った。また、第 5 章は科学的分析・原稿を株式会社イビソク（研究員 竹原弘展氏）に委託した。その他は、田中（第 1 章～第 4 章 1・3）、丸山（第 4 章 2・4・5・7・8、第 6 章 1・2）が執筆し、全体の編集・遺物写真撮影・図版作成等は丸山が担当した。
8. 木簡・墨書き土器・墨書き石等文字資料の写真（図版 88-123～128・494）及び判読は、新潟県立歴史博物館の前嶋敏氏、浅井勝利氏に依頼し、ご教示を賜った。
9. 出土遺物（土器・陶磁器）の鑑定は、胎内市教育委員会 水澤幸一氏（中世）、見附市教育委員会 安藤正美氏（近世）に依頼し御教示を賜った。なお、担当者の理解不足により第 4 章の事実記載に誤りがある場合、その責は執筆担当者にある。
10. 調査・整理体制は、以下の通りである。

（平成 2 年度）発掘調査

調査主体	和島村教育委員会	教育長	水澤文夫
事務局	和島村教育委員会	事務局長	大矢猛雄
調査担当	和島村教育委員会	主事	田中 靖
調査員	新潟県文化行政課	文化財専門員	高橋保雄

（平成 16 年度・平成 17 年度第 1～3 四半期）遺物整理

整理主体	和島村教育委員会	教育長	羽鳥仁一
事務局	和島村教育委員会	事務局長	久住一雄
整理担当		主任	田中 靖

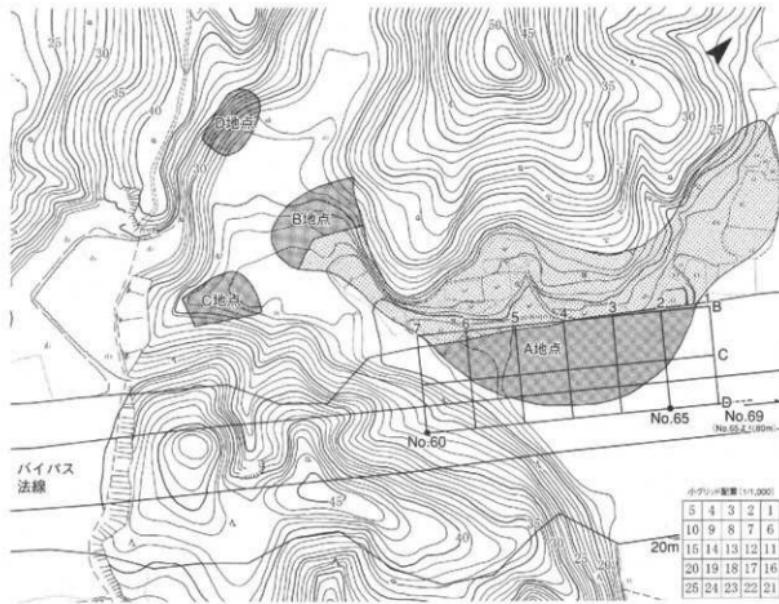
（平成 17 年度第 4 四半期、平成 18 年度）遺物整理・報告書作成

整理主体	長岡市教育委員会	教育長	笠輪春彦（平成 18 年 12 月 31 日退任）
		教育長	加藤孝博（平成 19 年 1 月 1 日就任）
事務局	科学博物館	館長	山屋茂人
整理担当	科学博物館	主任	丸山一昭
	科学博物館	主任	田中 靖

- 整理作業は、調査員を中心に下記のメンバーの協力を得た。
小田富美子・久住幸江・近藤保・関川たづ子・高橋智子・早川雅子・山口八千代（五十音順）
- 発掘調査で出土した遺物及び、測量図面、写真等の記録類は、長岡市教育委員会が保管している。
- 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏・機関から多大なご教示とご協力を賜った。ここに厚く御礼を申し上げる。
浅井勝利 甘粕 健 安藤正美 宇木 茂 春日真実 金子拓男 北村 亮
久我 勇 小林昌二 小林達雄 坂井秀弥 鈴木俊成 間 雅之 高橋 保
寺崎裕助 寺村光晴 田海義正 戸根与八郎 中島栄一 平川 南 藤巻正信
藤森健太郎 本間信昭 前嶋 敏 水澤幸一 皆川義孝 山本 肇（五十音順）

14. 【グリッドの設定】

グリッドの設定は、道路法線のセンター杭 2 点（日本測地系 座標値：No.60 点 X=174728.817 Y=25194.923、No.69 点 X=174673.017 Y=25172.869）を基準とし、20m×20m を 1 区画として設定した。このグリッドは、八幡林遺跡道路法線内調査区のそれに連続するものである[和島村教委 2005]。各グリッドの呼称は、東西方向をアラビア数字、南北方向をアルファベットの大文字で表し、1A・2A・3A… のように表現した。小グリッドについては、1 つのグリッドを 4m×4m で 25 分割し、北東隅が 1、南西隅が 25 となるように設定した（第 1 図）。



第 1 図 調査区とグリッド設定図 (1/2,000)

目 次

序 例言

第1章 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯	1
2 発掘調査および整理作業の経過	2
(1) 確認調査	2
(2) 本調査	2
(3) 整理作業	2

第2章 遺跡周辺の環境

1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3
(1) 弥生時代から古墳時代	3
(2) 古代	8
(3) 中世	9

第3章 発掘調査の概要

1 遺跡の概要	12
(1) 狹義の山田郷内遺跡	12
(2) 山田郷内A遺跡	12
(3) 山田郷内B遺跡	13
(4) 山田郷内C遺跡	13
2 基本層序	15
3 遺構各説	15
(1) 第1確認面(Ⅲ～Ⅲ'層上面)およびⅣ～Ⅴ層上位検出遺構	15
(2) 第2確認面(Ⅳ層上面)検出遺構	21
(3) 第3確認面(Ⅸ層上面)検出遺構	21

第4章 出土遺物

1 縄文時代の遺物	23
(1) 縄文土器	23
(2) 石器	23
2 弥生・古墳時代の遺物	23
(1) 土器	23
(2) 編年的位置付け	24
3 古代の遺物	25
(1) 須恵器	25
(2) 土師器	26

(3) 灰釉陶器	27
(4) 年代的位置付け	27
4 中・近世の遺物	27
(1) 陶磁器・土器の分類と概要	28
(2) 遺構出土の土器・陶磁器	30
(3) 遺構外出土の土器・陶磁器	32
5 金属製品	33
6 木製品	34
(1) 木簡	34
(2) 日常用品・呪術用具・その他	35
7 石製品	36
8 錫冶関連遺物	36

第5章 山田郷内遺跡出土鉄滓分析

1 はじめに	37
2 試料と方法	37
3 結果および考察	37
4 終わりに	38

第6章 まとめ

1 遺構について	45
2 遺物について	45
(1) 總文時代から古代	45
(2) 中世	46
3 「東司触桶」墨書き物について	48

要約	49
引用参考文献	50

挿図目次

- 第1図 調査区とグリッド設定図
 第2図 遺跡の位置
 第3図 弥生・古墳時代の遺跡
 第4図 古代の遺跡
 第5図 中世の遺跡
 第6図 山田郷内C遺跡検出木炭窯平・断面図
 第7図 中世陶磁器分類図
 第8図 山田郷内遺跡出土木簡駆文
 第9図 山田郷内遺跡出土土器・陶磁器の変遷

第2表 周辺的主要遺跡一覧表（古代）

第3表 周辺的主要遺跡一覧表（中世）

第4表 山田郷内C遺跡木炭窯觀察表

第5表 SB02柱穴觀察表

別表

- 別表1 遺構計測表
 別表2 原始・古代遺物觀察表
 別表3 中近世遺物觀察表
 別表4 土製品・金銀製品等觀察表
 別表5 木製品觀察表
 別表6 石製品觀察表
 別表7 羽口觀察表

表目次

- 第1表 周辺的主要遺跡一覧表（弥生時代・古墳時代）

図版目次

- | | |
|------------------------------|------------------|
| 図版 1 遺構全体図 1 | 図版 45 木製品 (4) |
| 図版 2 基本土層図 | 図版 46 木製品 (5) |
| 図版 3 遺構平面図 1 | 図版 47 木製品 (6) |
| 図版 4 遺構平面図 2 | 図版 48 石製品、鍛冶関連遺物 |
| 図版 5 遺構平面図 3 | 図版 49 航空写真 |
| 図版 6 遺構実測図 1 | 図版 50 完掘状況 |
| 図版 7 遺構実測図 2 | 図版 51 基本土層、作業風景 |
| 図版 8 遺構実測図 3 | 図版 52 遺構写真 (1) |
| 図版 9 遺構実測図 4 | 図版 53 遺構写真 (2) |
| 図版 10 遺構実測図 5 | 図版 54 遺構写真 (3) |
| 図版 11 遺構実測図 6 | 図版 55 遺構写真 (4) |
| 図版 12 遺構実測図 7 | 図版 56 遺構写真 (5) |
| 図版 13 遺構全体図 2 | 図版 57 遺構写真 (6) |
| 図版 14 遺構平面図 4 | 図版 58 遺構写真 (7) |
| 図版 15 遺構平面図 5 | 図版 59 遺構写真 (8) |
| 図版 16 遺構実測図 8 | 図版 60 遺構写真 (9) |
| 図版 17 木製品出土位置図 | 図版 61 遺物出土状況 |
| 図版 18 繩文時代の遺物、弥生・古墳時代の遺物 (1) | 図版 62 遺物写真 (1) |
| 図版 19 弥生・古墳時代の遺物 (2) | 図版 63 遺物写真 (2) |
| 図版 20 弥生・古墳時代の遺物 (3) | 図版 64 遺物写真 (3) |
| 図版 21 弥生・古墳時代の遺物 (4) | 図版 65 遺物写真 (4) |
| 図版 22 奈良・平安時代の遺物 (1) | 図版 66 遺物写真 (5) |
| 図版 23 奈良・平安時代の遺物 (2) | 図版 67 遺物写真 (6) |
| 図版 24 奈良・平安時代の遺物 (3) | 図版 68 遺物写真 (7) |
| 図版 25 奈良・平安時代の遺物 (4) | 図版 69 遺物写真 (8) |
| 図版 26 奈良・平安時代の遺物 (5) | 図版 70 遺物写真 (9) |
| 図版 27 奈良・平安時代の遺物 (6) | 図版 71 遺物写真 (10) |
| 図版 28 中世・近世の遺物 (1) | 図版 72 遺物写真 (11) |
| 図版 29 中世・近世の遺物 (2) | 図版 73 遺物写真 (12) |
| 図版 30 中世・近世の遺物 (3) | 図版 74 遺物写真 (13) |
| 図版 31 中世・近世の遺物 (4) | 図版 75 遺物写真 (14) |
| 図版 32 中世・近世の遺物 (5) | 図版 76 遺物写真 (15) |
| 図版 33 中世・近世の遺物 (6) | 図版 77 遺物写真 (16) |
| 図版 34 中世・近世の遺物 (7) | 図版 78 遺物写真 (17) |
| 図版 35 中世・近世の遺物 (8) | 図版 79 遺物写真 (18) |
| 図版 36 中世・近世の遺物 (9) | 図版 80 遺物写真 (19) |
| 図版 37 中世・近世の遺物 (10) | 図版 81 遺物写真 (20) |
| 図版 38 中世・近世の遺物 (11) | 図版 82 遺物写真 (21) |
| 図版 39 中世・近世の遺物 (12) | 図版 83 遺物写真 (22) |
| 図版 40 中世・近世の遺物 (13) | 図版 84 遺物写真 (23) |
| 図版 41 中世・近世の遺物 (14)、金属製品 | 図版 85 遺物写真 (24) |
| 図版 42 木製品 (1) | 図版 86 遺物写真 (25) |
| 図版 43 木製品 (2) | 図版 87 遺物写真 (26) |
| 図版 44 木製品 (3) | 図版 88 遺物写真 (27) |

第1章 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯

長岡市の北西部、和島地域を縱貫する一般国道116号は、柏崎市を起点に新潟市に至る、総延長78.4kmの幹線道路である。本道が通過する長岡市島崎は、道路幅員が狭く、近年の自動車交通量の増大に伴い、騒音・住宅の振動・交通事故等、交通環境の悪化が深刻な問題として浮上してきた。この問題を解決するために、「一般国道116号改築事業」の一部として計画されたのが、長岡市両高から寺泊宿に至る、総延長6,260mの和島バイパスである。

新潟県教育委員会(以下県教委)は、当時の建設省北陸地方建設局(以下北陸地建)の依頼を受け、昭和61・62年度に和島バイパス法線内の遺跡分布調査を行なった。その結果、この区間内で8ヶ所以上の埋蔵文化財包蔵地が確認され、このことを北陸地建に通知している。

昭和63年度に県教委は、先の分布調査で発見された埋蔵文化財包蔵地のうち6か所に対し、確認調査を実施した。その結果、各遺跡の調査対象面積・内容等が明らかになり、地域住民の懸念であるバイパスの早期開通が危ぶまれる事態になった。これを知った和島村は、埋蔵文化財の調査促進を図るために、北陸地建・県教委に対し陳情・要請を行った。この三者協議の中で、和島村独自の発掘チームを編成し、調査の進行を早めるという案が提示され、和島村はこれに同意する。その結果、山田郷内・八幡林2遺跡の発掘調査については、和島村教育委員会が主体になり、平成2年度事業として実施することになった。



第2図 遺跡の位置 (1/20,000)

(長岡市和島地域全図) 平成18年1/10,000 (4)

2 発掘調査および整理作業の経過

(1) 確認調査

昭和 63 年 7 月 4 日、県教委による確認調査を実施。バックホウを使用して、3 本のレンチと 11 ヶ所の試掘坑をあけ、調査面積は対象面積約 1,500 m² のうち約 422 m² であった。調査の結果、丘陵尾根末端部分に設定した 1T を中心に、古代から中世にかけての遺構・遺物が検出され、本調査必要範囲が約 2,800 m² 前後であることが明らかになった。

(2) 本調査

平成 2 年 4 月 26 日、遺跡地内にバックホウを搬入。5 月 2 日まで湧水対策の暗渠工事を実施する。

5 月 8 日～5 月 9 日、業者委託による基準杭打設。

5 月 8 日～6 月 7 日、Ⅱ層削削とⅢ層上面での遺構確認・遺構掘り。Ⅱ層中からは、中世から近世初期にかけての陶磁器、鉄滓などが出土した。検出遺構は、水田跡・溝・内部に石敷きを持つ掘立柱建物（鍛冶工房）があり、共伴遺物から 15～17 世紀頃を中心に機能したものと推定された。

6 月 8 日～6 月 13 日、調査区全景（第一面）および、遺構完掘状況の写真撮影。水系を張った簡易造り方による平面図作成。

6 月 14 日～7 月 4 日、古代から中世初期の遺物包含層であるⅣ～V 層削削および、VI 層上面での遺構確認作業。VI 層上面での明らかな遺構は、1段高い丘陵末端部で検出された 40 個あまりのビットのみである。低地部では、当該期の遺構を確認することはできなかったが、V 層が泥炭化していたため、木製品が良好に保存していた。木製品の所属時期は、共伴土器から平安末～鎌倉時代頃と推定される。このほか注目される遺物としては、表裏に「大國」「金口（令^ミ）」の文字と人面が墨書きされた襷があげられる。

7 月 5 日、丘陵末端部の遺構（ビット群）完掘状況写真撮影および、簡易造り方による平面図作成。

7 月 7 日～7 月 30 日、VI 層除去後に弥生時代後期末～古墳時代中期の包含層であるⅦ層の削削・遺構確認・遺構掘りを行なう。また、古代末～中世の木製品を多量に含む V 層の、北側への伸びが確実になったため、調査区を拡張する。調査の結果、古墳時代前期の溝・土坑と土器を検出。拡張区では、中世の呪符・下駄・曲物・舟形などの木製品、鉄製の刀子、銅製仏具「りん」などが出土した。

7 月 31 日、調査区全景（第二面）および、遺構完掘状況の写真撮影。

8 月 3 日、業者委託による、昇降式高所撮影装置を用いた空中写真測量を実施。

8 月 7 日、VI 層以下をバックホウで試掘したが、遺構・遺物は全く検出されなかつた。本日をもって現場作業は終了となつた。

(3) 整理作業

平成 3 年度中に、遺物水洗など基礎整理作業を完了させた。しかしその後、諸開発に伴う緊急調査に追われて整理作業は一時中断、平成 16 年度になって再開した。中断期間が長かったため、遺物の再洗浄など手戻りがあり、その点が大きな反省材料であった。

平成 16 年度から「八幡林遺跡」「門新遺跡」の国道 116 号バイパス建設工事関連の発掘調査報告書を刊行させる傍ら、整理作業を進めた。平成 18 年度は本報告書作成のための遺物実測・図版作成・写真撮影等を経て入稿・校正作業を行い、本年度をもって報告書刊行作業は終了した。

第2章・遺跡周辺の環境

1 地理的環境

山田郷内遺跡は、新潟県長岡市島崎地内に所在する。

和島地域は長岡市北西部の海岸寄りに位置しており、山田郷内遺跡から海岸線までは、最短直線距離にして約2.2kmを測る。本地域は地形的にみて、①三島山地から派生する「東側丘陵」、②海岸に面した「西側丘陵」、③両者に挟まれた島崎川沿いの沖積低地、の3地形に分けられる。山田郷内遺跡は地形区分でいえば、西側丘陵およびその裾の沖積低地に広がっており、標高98mを測るピーク「高ヶ峰」から東に伸びる尾根の末端付近に立地している。国史跡「八幡林官衙遺跡」が所在する尾根は、同じ高ヶ峰から分岐したもので、小規模な沢「西谷」をはさんで本遺跡とは相対している。

山田郷内遺跡は、居住域と想定される丘陵先端部平坦面と、水田および祭祀・遺物廃棄エリアとして利用された低地部から成り立っている。丘陵部はかなり開析が進んでおり、「和島村史」における地形区分では、小起伏丘陵に分類されている〔藤田・長谷川1996〕。本丘陵を形作る地層は、「魚沼層」と呼ばれる固結度の低いシルト層や砂層を基盤とし、シルト層の部分からは植物化石が多産する。

西谷を挟んだ対岸（八幡林遺跡側）の丘陵では、島崎集落にかけて平坦な台地状の地形がみられる。この地域には、魚沼層の上に未固結の灰色シルト層と中粒ないし粗粒の砂層を主体とする「田沢層」が堆積し、貧弱ではあるが礫層も認められることから、段丘地形である可能性が指摘されている。本層の上部には、平坦面を中心に粘土化の進んだ黄褐色土がみられ、上耕工業団地付近の露頭に見られた類似土層の分析では、始良Tn火山灰に起因する可能性がある火山ガラスが検出されている〔藤田・長谷川前掲〕。八幡林遺跡の調査で出土した旧石器時代の資料（B・G地区）の一部は、ローム質の本層上位を出土層準としており〔和島村教委2005a〕、「和島村史」における分析結果を裏付けるものと思われる。

2 歴史的環境

（1）弥生時代から古墳時代

和島地域が所在する島崎川流域は、平野部との比高差が15mを超える、弥生時代後期の高地性集落が高密度に分布する地域として知られている〔田中1989〕。特に、東側丘陵の主稜線上に所在する赤坂遺跡（上桐地内）では、標高90m前後の尾根線約1kmにわたって遺構・遺物が分布、その北端の尾根を断ち切る位置に上幅7m・深度2m以上の濠（条濠？）が確認されるなど規模が卓越しており〔和島村1996〕、当該地域における拠点的な施設であった可能性が高い。

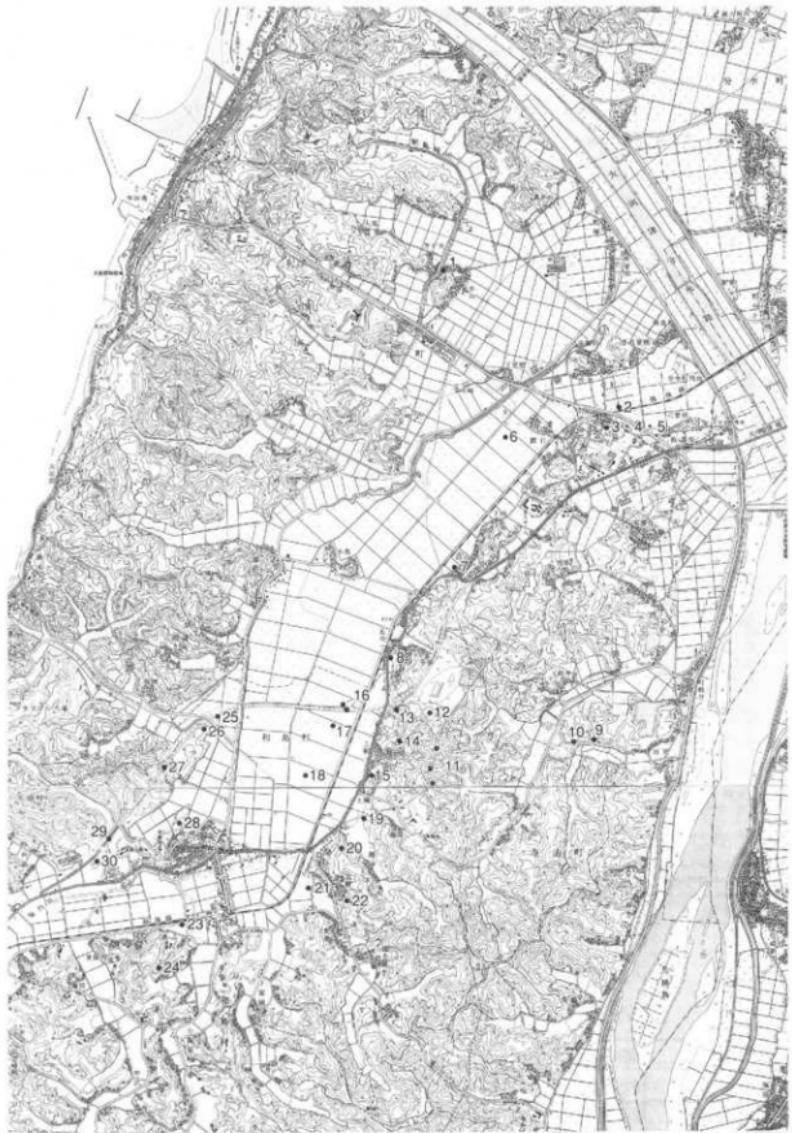
防御的機能が想定される島崎川流域の集落遺跡としては、赤坂遺跡と同じ東側丘陵に立地する、ヤケ山遺跡・イブケ入道跡・上桐城遺跡・大平遺跡・城遺跡〔和島村1996〕、西側丘陵上では奈良崎遺跡〔新潟県教委ほか2002〕・姥ヶ入南遺跡〔(財)新潟県埋文事業団1997・1998〕などが該当する。奈良崎遺跡・姥ヶ入南遺跡の調査では、当該期の周溝墓も確認されている。また、東側丘陵の主稜線より外れるが、寺泊入軽井に所在する屋舗塚遺跡では、4m×2m・深度1mを測る大型の墓坑を持つ方形台状墓が検出されて

いる。埋葬施設は倒抜き式の木棺と推定され、棺内部からは緑色凝灰岩製の管玉2点が出土した〔寺泊町教委2004〕。

古墳時代になると、前述した防衛的機能を持つ高地性集落は姿を消す。島崎川流域の当該期の遺跡は、上桐神社裏遺跡〔和島村1996〕・山田郷内遺跡・五分一稻場遺跡〔新潟県教委1978〕など低丘陵上に立地するもののほかに、門新遺跡外割田地区〔和島村教委1996〕・上新田遺跡・北野丸山遺跡〔和島村教委2003〕のように、沖積低地の中の微高地に進出する遺跡が現れる。

No.	遺跡名	所在地	所属時期	文献	備考
1	舞台島	長岡市寺泊本山	弥生前～古墳前	寺村・久我1960	
2	諏訪田	長岡市寺泊竹森	弥生中～後期	寺泊町1991	土坑墓
3	横瀬山廃寺跡	長岡市寺泊竹森	弥生中～後期・古墳	寺泊町教委1977・1983・1985・1986・寺泊町1991	
4	庚塚古墳	長岡市寺泊竹森	古墳後期？	寺泊町教委1977・寺泊町1991	円墳？
5	舞台塚古墳	長岡市寺泊竹森	古墳後期？	寺泊町教委1977・寺泊町1991	円墳？
6	古屋敷	長岡市寺泊鰐口	弥生後期～古墳前期	寺泊町1991	
7	七手上	長岡市寺泊下網	古墳後期	寺泊町教委1999	
8	五分一稻場	長岡市寺泊五分一	古墳前～中期	新潟県教委1978	
9	大久保古墳群	長岡市寺泊町絆井	古墳前期	寺泊町1991	前方後円墳2・方墳3
10	屋舗塚	長岡市寺泊人絆井	弥生後期	寺泊町教委2004	方形台状墓
11	赤坂	長岡市上桐	弥生後期	和島村1996	条塚？
12	イブッ入	長岡市上桐	弥生後期	和島村1996	
13	ヤケ山	長岡市上桐	弥生後期	和島村1996	
14	上桐城	長岡市上桐	弥生後期	和島村1996	
15	上桐神社裏	長岡市上桐	弥生中期～古墳前期	和島村1996	
16	門新(谷地)	長岡市上桐	古墳前～後期	和島村教委1995・2005b	水田跡
17	門新外割田	長岡市上桐	古墳中期	和島村教委1996	水田跡
18	上新田	長岡市上桐	古墳前期		
19	松ノ脇	長岡市三瀬ヶ谷	弥生中期～古墳前期	和島村1998a	
20	大平	長岡市北野	弥生後期	和島村1996	
21	北野丸山	長岡市北野	古墳前～後期	和島村教委2003	溝
22	城	長岡市北野	弥生後期	和島村1996	
23	下ノ西	長岡市小島谷	古墳前～後期	和島村1996	
24	下小島谷古墳群	長岡市小島谷	古墳前期	和島村1996・1997	前方後方墳3
25	大武	長岡市島崎	弥生中期～古墳後期	(財)新潟県埋文事業団1995～1998	井戸
26	奈良崎	長岡市島崎	弥生中期～古墳後期	新潟県教委ほか2002	円墳1・方墳1・周溝墓3
27	姥ヶ入南	長岡市島崎	弥生後期	(財)新潟県埋文事業団1997・1998	周溝墓1・条塚？
28	大塚	長岡市島崎	弥生後期	和島村教委1996	
29	山田郷内	長岡市島崎	弥生後期～古墳中期	和島村1996・本書報告	水田跡
30	八幡林	長岡市島崎・両高	古墳前期	和島村教委1992・和島村1996	堅穴住居1

第1表 周辺の主要遺跡一覧表（弥生時代・古墳時代）



第3図 弥生・古墳時代の遺跡 (1/50,000)

(国土地理院「毎帳」「令治」1/25,000より)

この時期の墳墓（古墳）で調査されたものとしては、奈良崎遺跡で検出された1号墳と2号墳がある。前者は後世の削平で確定的でないが、直径18mほどの墳丘規模を持つ木棺直葬の円墳と推定されており、副葬品として振文鏡、管玉、水晶製勾玉が出土している。後者は1辺が10m前後となる方墳と推定されており、後世の削平のため主体部は確認されなかったが、周溝内部から古墳時代前期の土器と鉄器が出土している〔新潟県教委ほか 2002〕。このほか、発掘調査はなされていないが、3基の前方後方墳で構成される下小島谷古墳群〔和鳥村 1997〕や、2基の前方後円墳と3基の方墳からなる大久保古墳群〔寺泊町 1991〕の存在が知られている。これら以外にも、島崎川流域の丘陵上に多く分布する塚・山城として登録されたものの一部には、当該期の古墳が含まれている可能性が高い。

No	遺跡名	所在地	所属時期	文献	備考
1	向星敷	長岡市寺泊大地	平安	寺泊町教委2000	
2	弁才天廻跡	長岡市寺泊大地	不明	寺村・久我1960	須恵器廻跡？
3	夏戸廻跡	長岡市寺泊年友	不明	寺村・久我1960	須恵器廻跡？
4	諏訪田	長岡市寺泊竹森	平安	寺泊町1991	
5	京田	長岡市寺泊竹森	平安	寺泊町1991	
6	太星敷	長岡市寺泊敷ヶ曾根	奈良・平安	寺泊町教委1987・1991a	
7	横越山廃寺	長岡市寺泊竹森	白鳳～平安	寺泊町教委1977・1983・1985・1986 寺泊町1991	白鳳期の寺院跡
8	小谷池跡	長岡市寺泊五分一	平安	寺泊町1991	
9	五一一廻場	長岡市寺泊五分一	平安	新潟県教委1978	
10	七ツ石	長岡市寺泊郷本	平安	寺泊町1991	製塙遺跡
11	扇田	長岡市与板岩方	平安	坂井1990・与板町1993	製鉄遺跡
12	門新(谷地)	長岡市上桐	平安	和島村教委1995・2005b 和島村1996・1997	開拓領主の居宅
13	上新田	長岡市上桐	奈良～平安		
14	上桐神社裏	長岡市上桐	奈良～平安	和島村1996	
15	中道窓跡	長岡市北野	不明	和島村1996	須恵器窓跡？
16	北野丸山	長岡市北野	白鳳～平安	和島村教委2003	
17	下ノ西	長岡市小島谷	飛鳥～平安	和島村教委1998b・1999・2000・2003b 和島村1996・1997	古志郡衛関連 大家跡？
18	旧北辰中学校	長岡市小島谷	奈良	和島村2000	瓦窯跡
19	本合分	長岡市梅田	平安	和島村1996	
20	梅田	長岡市梅田	平安	和島村1996	
21	吉沢	長岡市高岡	平安	和島村教委1992	製鉄遺跡
22	八幡林	長岡市島崎・高岡	奈良～平安	和島村教委1992・1993・1994・2005a 和島村1996・1997	石屋城？ 大領館？
23	山田郷内	長岡市島崎	白鳳～平安	和島村1996・本書報告	
24	大塚	長岡市島崎	奈良～平安	和島村教委1992	
25	姥ヶ入	長岡市島崎	平安	(財)新潟県埋文事業団1997	製鉄遺跡

第2表 周辺の主要遺跡一覧表（古代）



第4図 古代の道路 (1/50,000)

(国土地理院「写真」「神宮」1/25,000より)

（2）古代

山田郷内遺跡が所在する和島地域を中心とした島崎川流域は、古代において越後国古志郡に属していたと考えられている。本地域は、第4回にみられるように古代の遺跡が非常に多く分布しており、製鉄遺跡や須恵器・瓦窯跡などの生産遺跡が集中することでも知られている。中でも、国レベルの石屋城から古志郡大領の館に変遷した可能性が高い国史跡「八幡林官衙遺跡」〔和島村教委1992～1994・2005a〕や、出舉と同司（據）借貸に関わる記録簡・「越後國」と国名から記す貢進物付け札・『山海經』の一場面を描いた絵画板・国府の「今浪人司」から発給された文書木簡など注目される木簡群が出土し、古志郡家の本体と推定される下ノ西遺跡〔和島村教委1998～2000・2003b〕、木造基壇外装を持つ建物と白鳳期の瓦・埴仏・鶴尾などが検出されている横瀬山廃寺跡〔寺泊町教委1977・1983・1985・1986〕、郡が機能しなくなった時期に台頭した有力者層の私的支配拠点（開発領主の居宅）である門新遺跡〔和島村教委1995〕など、注目される内容を持つ遺跡が目立つ。

古志郡は、現在の三島郡および長岡市周辺にはば比定されており、9世紀代に三島郡が分立する以前には、柏崎市と刈羽郡一帯を含む広大な領域をもっていた。八幡林遺跡出土木簡には、「多岐郷戸主物マ五百足……」という後の三島郡の郡名を記した木簡も出土しており〔和島村教委1994〕、その事実を如実に物語るものといえよう。10世紀前半に成立した『和名類聚抄』には、三島郡分立後の郷として、「大家」「栗家」「文原」「夜麻」の4郷が記載されている。このうち大家郷については、八幡林遺跡Ⅰ地区出土墨書き土器に「□大ヶ家驛」があり〔和島村教委1994〕、和島周辺に郷域を設定できる可能性が高い。他の3郷の所在地については諸説があり、現在までそれを特定することはできていない。

郡内の延喜式内社は、「三宅神社」（2座）・「桐原石部神社」・「都野神社」・「小丹生神社」・「宇奈具志神社」の5社6座があり、このうち桐原石部・小丹生・宇奈具志の3座は、和島地域を中心とした島崎川流域に集中している。この式内社の分布や官衙遺跡（八幡林・下ノ西遺跡）の所在に象徴されるように、本地域は古志郡の中核部としての役割を担っていた。

古志郡を通過する古代の官道「北陸道」は、従来海岸ルートと内陸ルート2説が考えられていた。しかし、前述したように八幡林遺跡で「□大ヶ家驛」と書かれた墨書き土器が出土したことや、下ノ西遺跡V区で検出された「馬の洗い場」状土坑を伴う施設の存在から、島崎川沿いの内陸ルートを取る可能性が非常に高くなった〔和島村教委2003b〕。下ノ西遺跡の施設を「大家駅」とするには、北陸道に該当する遺構が未確認であるなど更に検討が必要と思われるが、そうであるならば『出雲国風土記』意字郡条にみえる、「黒田駅 郡家同處なり」と同じ景観が想定できよう。『延喜式』兵部省では、「越後国駅馬 滝海八匹、鶴石、名立、水門、佐味、三嶋、多太、大家各五匹、伊神二匹、渡船部船二匹」と記載されており、大家駅には駅馬五匹が置かれていた。北陸道の本道は前述のように発見されていないが、八幡林遺跡Ⅰ地区および下ノ西遺跡Ⅰ区東において南北方向に伸びる道路遺構が検出されている〔和島村教委1998b〕。いずれも、両側に側溝を持ち、八幡林遺跡の道路は側溝心々で幅4m、下ノ西遺跡のものはほぼ同じ位置で3回以上改修が加えられており、側溝心々で4.9～5.3mの規模を持つ。これら南北道路の機能としては、前者は海岸部と島崎川流域を結ぶものであり、後者は小島谷川に沿って南下し、岬越えで浮舟に抜ける信濃川方面（東古志）への連絡路であった可能性が高い。今後当該地域周辺で、それらと交わる東西方向の北陸道本道が発見されることを期待したい。

(3) 中世

平安時代の後半からは、荘園と公領が併存する時代となる。和島地域周辺でも国衙領である保とともに、多くの寄進地系の荘園が記録されている。和島地域に直接関係するものとしては、出雲崎町乙茂から和島地域東保内にかけて比定される国衙領乙面保と、三島地域を中心とした出雲崎町から和島地域の一部と考えられる吉河莊、長岡市白鳥町周辺から三島地域・和島地域・出雲崎町の一部にかけてとされる白鳥莊の3つがあげられる。保は多くの場合、国衙周辺や港・河川などの交通の要衝に設置されたと考えられ、周辺には乙面保のほかに、於木保（出雲崎町小木）・小加礼保（寺泊入軒井・寺泊町軒井）などが分布する。

鎌倉時代の終わり頃になると、和島地域は信濃出身で越後に進出してきた風間氏の勢力下となる。風間信濃守は、元亨三（1323）年、村田の地に日蓮宗越後一宗大本山の格式を持つ本山妙法寺を建立したことでも知られている。風間信濃守信昭の弟である村岡三郎は、村岡城（村田）を築いて和島地域周辺を領有し、直峰城（上越市安塚区）を本拠とする信濃守に代わって妙法寺の檀那となつた。建武二（1335）年、足利尊氏と新田義貞が対立すると、風間信濃守は義貞の陣営に属した。以後、越後は足利方（北朝方）と新田方（南朝方）に分かれ、長い騒乱状態となつた。和島地域周辺も戦場となり、南朝方に属する風間信濃守や、河内・池・小木の一族は、建武三（1336）年、島崎城に立てこもり、北朝方の色部高長・加地景綱らと戦ったが、搦め手から攻められて敗れた。この時落城した島崎城は、（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団が平成11年度に調査した奈良崎遺跡の北端部（奈良崎砦）が該当するものと推定されている〔新潟県教委ほか2002〕。

室町時代になると、越後の統治は守護職上杉氏の相伝となつたが、実際はその代官の手に委ねられた。守護代となつたのは、上杉氏古来の家臣である長尾氏である。長尾氏は府内（上越市）を拠点に、一門を各地に配置して、地方支配を行なつた。古志郡は藏王堂城（藏王）が中心で、ここを本拠とした長尾一族を古志長尾氏と呼称し、室町後期には東山の柄吉城（柄吉）に拠点が移り、柄吉長尾氏とも呼ばれた。和島地域周辺では、夏戸城の志駄氏、本与板城の飯沼氏など、長尾氏の有力な家臣の配置が知られている。

下剋上を経て、守護上杉氏から実権を奪つた長尾氏は、度重なる抗争を勝ち抜き越後の支配権を獲得する。長尾景虎（上杉謙信）は、越後府内に亡命してきた闇東管領上杉憲政より上杉氏の家督が譲られ、永禄四（1561）年には、闇東管領職に就任している。謙信没後、後継者争いである御館の乱を経て、越後は上杉景勝の支配となり、慶長三（1598）年の会津移封までこの体制は続く。

戦国・織豊期の和島地域には、力丸・高森・池浦などの諸氏が存在したことが、文献により明らかにされている。力丸は根木小屋城を本拠とし、上杉家の「軍役帳」に名が見えるなど、上杉氏の下で活躍した武将である。高森・池浦両氏は、与板城主直江家に仕える侍衆に属していた。「上杉家御家中年譜」では、高森氏は高森（岡高）、池浦氏は島崎をそれぞれ本拠としていたことが記されている。これらの諸氏は、上杉景勝の移封に伴い、主家に従い会津に移住していく。

次に、当該期の遺跡分布についてみてみたい。和島地域周辺では、中世城館跡や塚（構築時期不明のものが多い）がかなりの数確認されている。それに対し、一般的な集落遺跡は今回報告する山田郷内や、掘立柱建物柱・井戸が検出された下ノ西遺跡V区〔和島村教育委員会 2003b〕など非常に少ない。沖積低地中央の自然堤防上に立地する門新遺跡や上新田遺跡などでは、古墳時代から古代にかけて集落が営まれるが、中世段階の遺構・遺物は皆無に近い。また、慶長三（1598）年の検地帳に見える集落名が、現在のそれとはほぼ一致する点は、中世の集落が山際に点在する現集落と重なっていることを示唆し、この遺物採集の困難さが、当該期の遺跡を発見できない原因である可能性が高い。

No	遺跡名	所在地	所属時期	文献	備考
1	赤坂山城	長岡市寺泊	南北朝	寺泊町1991	
2	円福寺石塔	長岡市寺泊	鎌倉末	寺泊町1991	多層塔2基
3	向量敷	長岡市寺泊大字	13世紀	寺泊町教委2000	
4	年友城	長岡市寺泊年友	戦国	寺泊町1991	
5	木島城	長岡市寺泊木島	戦国	寺泊町1991	
6	夏戸城	長岡市寺泊夏戸	戦国	寺泊町1991	志駄氏の居城
7	田頭城	長岡市寺泊田頭	室町～戦国	寺泊町1991	
8	伊奈胡城	長岡市寺泊郷本	室町～戦国	寺泊町教委1992b	
9	五分一城	長岡市寺泊五分一	室町～戦国	寺泊町教委1991b	
10	上桐城	長岡市上桐	室町・戦国以前	和島村1996	
11	五分一稲葉城	長岡市寺泊五分一	中世		
12	上桐神社裏	長岡市上桐	13～15世紀	和島村1996	
13	中道	長岡市北野	室町	和島村1996	
14	入り館	長岡市北野	室町～戦国	和島村1996	北野城の居館
15	北野城	長岡市北野	室町～戦国	和島村1996	
16	根小屋城	長岡市根小屋	室町～戦国	和島村1996	力丸氏の居館
17	大武	長岡市島崎	13～16世紀	新潟県教委ほか2000	
18	奈良崎塚	長岡市島崎	16世紀	新潟県教委ほか2002	方形塚1
19	奈良崎	長岡市島崎	13～16世紀	新潟県教委ほか2002	
20	小谷御絃塚	長岡市島崎	中世	和島村教委2003a	方形塚1
21	妙満寺跡	長岡市島崎	13～14世紀	和島村教委2003b	火葬墓・木炭窯
22	淨觀寺石塔	長岡市島崎	戦国	和島村1996	寺院跡
23	山田郷内	長岡市島崎	12～16世紀	和島村1996・本書報告	
24	下ノ西	長岡市小島谷	13～16世紀	和島村2003b	
25	坊山塚群	長岡市寺泊志戸橋		寺泊町教委1992b	
26	花立塚群	長岡市寺泊志戸橋		寺泊町教委1992b	
27	高森城	長岡市高森	南北朝	和島村1996	
28	治暦寺石塔	長岡市村田	室町	和島村1996	伝 黒間信濃守信昭墓
29	村岡城	長岡市村岡	南北朝～戦国	和島村1996	村岡三郎の居城
30	落水館	長岡市城之丘	南北朝～戦国	和島村1996	
31	城之丘	長岡市城之丘	平安末～中世	和島村1996	
32	宿屋塚	長岡市城之丘	中世	和島村教委2002b	方形塚1
33	久田城	出雲崎町久田ほか	戦国	和島村1996	
34	中諱古越出土地	長岡市和島中諱	16後半～17世紀	和島村1996	越前焼壺・備蓄鉢
35	小鳥谷城	長岡市小島谷	戦国	和島村1996	
36	円融寺館	長岡市和島中沢	中世	和島村1996	
37	中村城	長岡市和島中沢	戦国	和島村1996	
38	蓮念寺石塔	長岡市東保内	南北朝	和島村1996	伝 村岡三郎墓
39	高畠城	長岡市和島高畠	南北朝	和島村1996	
40	高畠館	長岡市和島高畠	南北朝・室町	和島村1996	
41	阿弥陀瀬城	長岡市阿弥陀瀬		和島村1996	

第3表 周辺の主要遺跡一覧表（中世）



第5図 中世の遺跡 (1/50,000)

(国土地理院「名阪」「中道」1/25,000より)

第3章 発掘調査の概要

1 遺跡の概要

山田郷内遺跡は、昭和 60 年 8 月 27 日に実施された国道 116 号バイパス建設予定地内の分布調査時に、珠洲焼と土師器小片が採集され、新遺跡として登録されたものである。遺跡名称は、所在地の字名である「山田郷内」に由来している。遺跡範囲内には、中世にさかのほる可能性が高い寺院跡「禅祇寺跡」と、それに隣接する石塔群も存在する。

本遺跡の広がりは、畠地等における遺物散布状況および、昭和 63 年度・平成 2 年度の確認調査結果から、大きく 4 地点に分かれ、西谷側へも伸びることが明らかになっている。各地点の呼称については、本書報告部分を含む地点を狭義の「山田郷内遺跡」とし、平成 2 年度の確認調査で新たに発見された 3 地点については、区別のため「山田郷内 A 遺跡」・「山田郷内 B 遺跡」・「山田郷内 C 遺跡」と呼称することにした(第 1 図)。なお、山田郷内 A ~ C 遺跡については、バイパス工事に伴って移転する鶴舎の代替地となり、平成 3 年度に本調査が実施されている。

(1) 狹義の山田郷内遺跡

標高 98m を測るピーク「高ヶ峰」から伸びる丘陵尾根の先端部付近から、前面の沖積低地にかけての地点が、狭義の「山田郷内遺跡」である。丘陵部分は上下二段の平坦面で構成され、上段には「禅祇寺跡」と墓地、下段には昭和 34 年まで「駒林」の集落が存在していた。

上段にあった禅祇寺の創建年代については、記録・伝承等が残されていないため詳細は不明である。しかし、寺跡に残された石塔類の中に、戦国末期とみられる宝篋印塔の相輪があり [和鳥村 1996]、少なくとも中世末には存在していた可能性が高い。禅祇寺は、いつの時代か廃されて庵室となり、明治期の後半には二人の庵主によって守られていた。しかし、それも明治 42 年の利慶尼の死去や、翌 43 年に節ダン尼が寺泊下桐觀音堂へ転居したことにより、完全に廃庵になったとされている [桑原 1988]。

今回調査対象となったのは、旧駒林集落があった丘陵下段平坦面の南辺から、それに隣接する谷底低地にかけての部分である。調査の結果、縄文時代晩期から近世におよぶ遺構・遺物が検出されており、遺物量からみると古墳時代前期および中世（鎌倉から室町時代）の資料が多く、古代（奈良～平安時代）のものも定量存在する。注目される遺構としては、鍛冶工房の可能性が高い石敷きを持つ掘立柱建物（室町時代）および、低地部に形成された呪符木簡・箸・舟形等、多量の木製品を廃棄したエリア（平安末～鎌倉時代）があげられる。

(2) 山田郷内 A 遺跡

前述した山田郷内遺跡が所在する尾根と、国史跡「八幡宮官衙遺跡」がのる尾根との間の沢を、地元では「西谷」と呼んでいる。平成 2 年度に実施された確認調査では、3 地点に分かれて遺構・遺物が検出された。このうち、西谷中央に所在する用水池の北側、丘陵部と接する付近が「山田郷内 A 遺跡」である。

出土遺物は極めて少なく、珠洲焼・鉄滓を数点ずつ検出したにすぎない。主要な遺構としては、自然流

路1条・掘立柱建物1棟を検出した。後者は、梁行2間(5.0m)×桁行3間(5.4m)の総柱の構造で、直径22~56cmの円あるいは梢円形の柱掘り方を持つ。本建物には、明確な共伴遺物が無く詳細な所属時期は不明だが、柱穴規模・構造から見て中世に位置付けられる可能性が高い。

(3) 山田郷内B遺跡

前述した用水池の南、八幡林遺跡側に入り込む支谷底面が「山田郷内B遺跡」である。

遺構確認面は2枚で、上層からは自然流路1条、下層においては自然流路2条・掘立柱建物1棟などが検出されている。出土遺物は極めて少なく、須恵器・珠洲焼・鐵滓などをわずかに検出しただけである。下層の掘立柱建物は、梁行2間(3.2m)×桁行3間(4.9m)の総柱構造と推定されるが、自然流路により南寄りの柱穴等が破壊されているため、規模を確定できない。柱掘り方は、直径が20~30cmを測る円形のものが多い。建物の所属時期は、やはり中世と推定されるが、明確な共伴遺物が無く詳細は不明である。

(4) 山田郷内C遺跡

「高ヶ峰」から八幡林遺跡へと伸びる稜線の中で最も尾根幅が狭くなる付近の、西谷に面した斜面下位が「山田郷内C遺跡」である。

この地点では、2基の木炭窯が発見された(第4表・第6図)。いずれの木炭窯も地下式の構造を持ち、等高線とは直交する方向に築かれている。SJ01は、地区外に伸びるため焼成部の約半分を調査することができなかったが、完掘できたSJ02と近似した規模・形態をもつものと推定される。

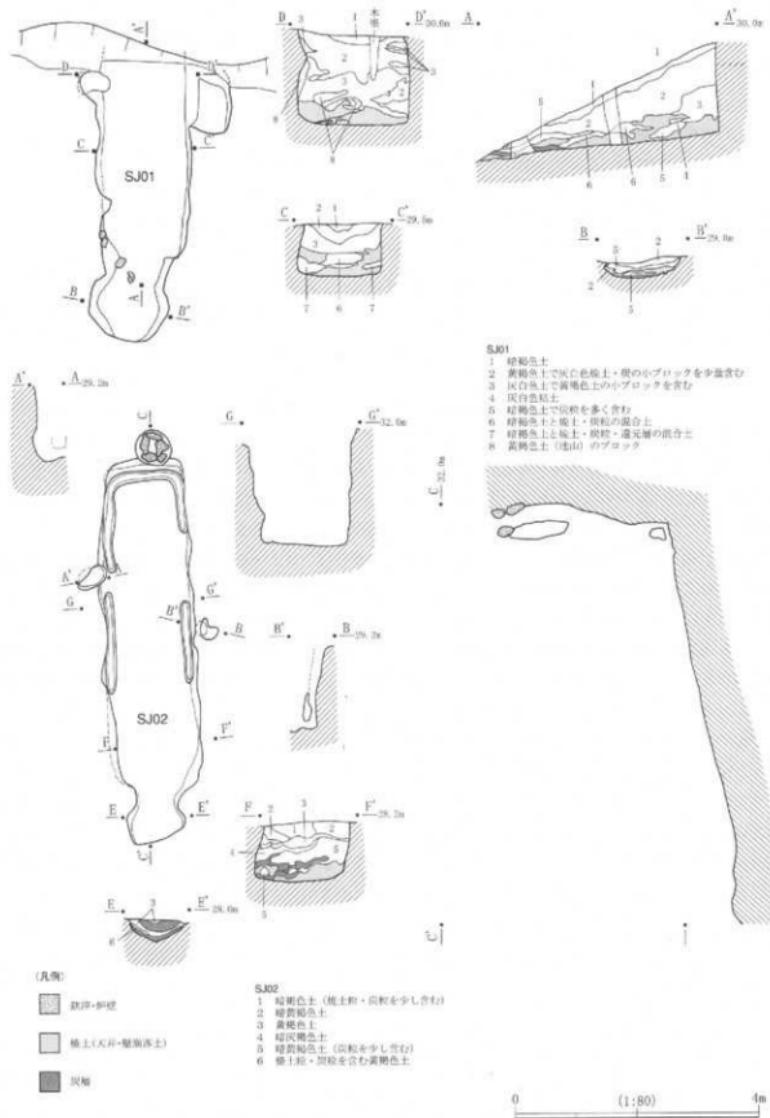
SJ02は、焼成部の床面に壁に沿って「U」字形に排水溝が掘られている。煙道は、奥壁および左右の側壁に1ヶ所ずつ設けられ、側壁煙道が左右対称ではなくわずかに前後にずれる。煙道の構築方法は、奥壁・両側壁とともに、窯体内煙面を煙道に近い幅で帯状に掘り込み、掘り込みの上端から地上に向けてと、地上から掘り込みに向けての両方から穿孔を行なうというやり方である。壁面の各掘り込みは、煙道貫通後に底の開口部を残し、鐵滓・炉壁・粘土を用いた障壁で閉塞されている。天井については、奥壁付近を含め完全に崩落しており、焼成部の高さは不明である。

SJ01・02の操業回数は、床面の木炭層が1枚であることや、窯体の補修が認められない点より、1回が多くとも数回の操業であったと思われる。

木炭窯内部および周囲からは、煙道の閉塞に用いられた鐵滓・炉壁のほかに出土遺物は無く、窯の形態・構造の面から年代を推定する。渡邊明和氏の編年〔渡邊1998〕にSJ01・02を照らし合わせると、地下式で焼成部がやや短い短冊形である点や、煙道配置の特徴などからIIA1類に分類され、11~13世紀に位置付けられる可能性が高い。同様な形態を有する木炭窯は、近接する八幡林遺跡B'地区において1基が調査されており〔和島村教委2005a〕、両者はほぼ同じ時期の操業と考えられる。本地区の調査後に、両地区間の丘陵斜面を対象とした確認調査を実施したが、新たな木炭窯や製鉄炉は発見できなかった。

遺構名	規 模 (m)									焼成部 傾斜角	焼成部 平面形	その他			
	焼成部			焚口部			煙道(直径)								
	長さ	幅	高さ	長さ	幅	深度	奥壁	北壁	南壁						
SJ01	—	1.4	—	0.6	1.32	0.32	—	—	—	7°	短冊形?	奥壁地区外			
SJ02	5.0	1.4	—	0.56	0.96	0.34	0.3	0.1	—	12°	短冊形	床壁際 排水溝			

第4表 山田郷内C遺跡木炭窯観察表



第6図 山田郷内C遺跡検出木炭窯平・断面図

2 基本層序（図版2）

図版2の下段に示したCグリッド南北ラインは第1確認面調査時のもの、上段に示した調査区西壁は1Bグリッド拡張後、第3確認面調査時の土層柱状図である。

基本土層は13種に別れ、3つの文化層が確認されている。

各土層はほぼ均一に分布するが、VI層は調査区中央西寄りの丘陵末端部にのみ分布しており、奈良～平安時代とされる遺構群が確認されている。

（土層説明）

- 0 層 黒褐色土と灰褐色土の混土層。新しい盛土。
- I 層 耕作土、畑地部では灰褐色、水田部では灰色を呈する。
- II 層 暗黒褐色土、炭化物を少量含む。室町時代～江戸時代初期の遺物包含層。
- III 層 灰褐色土、低地部のIII'層が分布しない所では、本層上面が第1確認面となる。
- III' 層 黄褐色砂質土、本層上面が室町時代～江戸時代初期の遺構確認面である（第1確認面）。
- IV 層 暗黒褐色土、平安時代末～鎌倉時代の遺物包含層。
- V 层 暗灰色粘土、低地になるに従い泥炭化する。平安時代末～鎌倉時代の遺物包含層。
- V' 层 灰褐色粘土、低地になるに従い泥炭化する。奈良～平安時代の遺物包含層。
- VI 层 灰白色粘土、植物遺体を多く含む。奈良～平安時代の遺構確認面。4Bグリッドの丘陵付近にのみ見られる。（第2確認面）
- VII 层 暗灰色砂質土、植物遺体を多く含む。古墳時代前期の遺物包含層。
- VIII 层 灰褐色砂質土、縄文時代晩期の土器および磨石類が、各1個体のみ出土した。
- IX 层 青灰色砂質土、大型の埋もれ木を含む。古墳時代前期の遺構確認面。（第3確認面）
- X 层 青灰色粘土、非常に固結度が高い。

3 遺構各説（図版1～16）

今回の調査で検出された遺構としては、第1確認面およびIV～V層上位（古代末～中世）における掘立柱建物2棟・井戸1基・土坑・溝・水田・木器集中地点（廃棄場）など、第2確認面（古代）におけるピット群・土坑、第3確認面（古墳時代）における溝・水田跡などがあげられる。以下では確認面ごとに分けて、検出遺構の概要を述べる。

（1）第1確認面（III～III'層上面）およびIV～V層上位検出遺構

a. 掘立柱建物

S B 0 2（図版6・7） 4Bで検出された南北棟、確認面はIII'層上面。主軸方向はN-44°-Wを指し、ほぼ南西から北東方向を向く。建物の規模は、梁行2間（4.4m）×梁行3間（6.6m）を測り、総柱構造を持つ。柱間の間隔は、梁行・桁行ともに2.2mの等間隔である。柱の掘り方は、長軸80～110cmを測る円あるいは楕円形を呈する。柱穴の深度は、中軸線上のP6～7と北側柱穴列のP9が床面より50～60cmで深く、それ以外のものは12～30cm程度である。なお、建物北隅のP12は、事前に実施した暗渠工

事で失われている。

柱痕跡については、平面および土層断面を精査したが、確認することができなかった。柱穴のうち、P6~9の底面には、流紋岩および砂岩を石材とする礎石が抱えられ、特にP7では、礎石の上に木製の隠板が重ねられていた。

SB02に伴う付属施設としては、建物の周囲を方形に囲む周溝と、2か所の配石があげられる。周溝は山側からの湧水や雨水の流入防止を意図した可能性が高く、配石は本建物の機能に直接関連する施設と推定される。

【周溝】 幅1~1.5mで断面「U」字形を呈する。斜面地に掘り込まれているために、深度は山側（北辺）で深く60cm前後、谷側（南辺）では30cm前後を測る。覆土は整然としたレンズ状堆積を示す。建物南辺に沿う溝では、下層から順に、黄灰色砂、暗茶褐色砂質土、赤褐色砂質土、さらに本溝がほぼ埋まりきった段階で、黒色の炭化物層が薄く複数層で確認される。それに対し、東辺の溝では砂質土や砂層の堆積はみられず、覆土が黒色炭化物層の單層となっている。周溝内で確認された炭化物層は、床面石敷き直上にみられる粒状溝等を含む炭層へと連続する。

【配石】 北側配石は柱穴P3~4・7~8に囲まれた範囲に見られる。溝SD01によって破壊され欠落する部分が多いが、本来は長方形の石敷きであった可能性が高い。残存部分から規模を推定すると、長辺2.0m×短辺1.5m程度の大きさとなる。配石の構成部材は、大人拳~小兒頭大の円礎が主体をなす。礎の石質は、乳白色の流紋岩および淡緑色の凝灰岩がほとんどで、八幡輪遺跡付近に分布する段丘疊層から簡単に入手できる岩種である。配石に使用された礎は、いずれも著しい二次焼成を受けており、それに起因する変色や割れ、炭素分の吸着が顕著である。

南側配石はP1・5間で確認されたもので、配石の西側はやはりSD01によって破壊されている。前述した北側配石ほど石の配列・平面形に規則性はなく、このため平面形・規模などに不明な点も多いが現存部分だけをみると、長軸80cm×短軸50cmを測る楕円形状を呈する。配石の構成部材・石質については、北側配石との間に違いはなく、二次焼成を受けている点でも一致する。

【SB02の年代】 本建物の共伴遺物としては、周溝覆土および床面直上に堆積する薄い炭化物層から出土した、青磁碗・珠洲焼・瀬戸焼・中世土器・鉄滓（椀形滓・粒状滓等）があげられる。陶磁器類の出土量は極めて少なかったが、おおむね15世紀頃に位置付けられる。

【SB02の性格】 SB02の性格を推定する手がかりとしては、床面の被熱した配石の存在や、床面直上から椀形滓・粒状滓等が出土したこと、覆土を伴うことの3点があげられる。これらの事実は、鍛錬鍛冶を行なった工房である可能性を強く示唆するが、建物中軸線上を大きく破壊するSD01のために、鍛冶炉や台石の存在を確認することはできなかった。

SB20 (図版4・8) 3B5~4B1に所在する。確認層位はⅢ層上面であり、建物東妻の柱穴列と柱間北辺1間分を検出した。建物の規模は、梁行きが2間(4.2m)である。梁行きについては、大半が法線外に所在するため不明である。主軸方向はN-51°-Wを向く。調査できた部分の柱間は、梁行き

No.	長軸×短軸×深(cm)	平面形	断面形	礎石等	その他
1	80×78×30	楕円形	逆台形		
2	84×78×30	楕円形	逆台形		
3	95×85×25	楕円形	逆台形		
4	85×70×32	楕円形	逆台形	SD01で一部破壊	
5	75×75×25	楕円形	逆台形	SD01で半分破壊	
6	129×(84)×30	楕円形	逆台形	礎石	SD01で半分破壊
7	90×(-)×(-)	楕円形	露状	礎石・礎板	SD01で半分破壊
8	101×85×25	楕円形	露状	礎石	SD01で一部破壊
9	115×95×25	楕円形	二層二ヶ	礎石	
10	115×85×25	楕円形	露状		
11	85×88×25	楕円形	露状		
12	-	-	-	-	積木壁で遮蔽

第5表 SB02 柱穴観察表

が 2.1m の等間隔、桁行きは 1.7m であった。柱掘り方は、長軸 30~55cm を測る円あるいは梢円形を呈する。柱痕跡は P3 のみで確認され、直径 20cm ほどの円柱であった。柱穴内部からの出土遺物は皆無であり建物の詳細な所属時期は不明だが、確認層位から 15 世紀以降に位置付けられる可能性が高い。

b. 井戸

S E 0 8 (図版 8) 2B10~3B6 にかけて所在する、円形の素掘り井戸である。検出層位は、V 層上面である。直径・深度は、それぞれ 2.0m・1.7m 前後を測る。本井戸は、確認面より 70cm 下の位置にテラスを持ち、二段掘り状を呈する。テラス以下は円筒形に掘られ、壁の立ち上がりはほぼ垂直となる。中上場での直径は、上場と比べかなり縮小し、80cm 前後の数値を示す。

覆土の状況は半裁位置が遺構の中心から外れ下層の記録が取れなかつたが、データが得られた 80cm 下までの覆土は、4 層に細分できる。3 層より上層は人為的な埋め土の可能性があり、移の葉を中心とした植物遺体だけで構成されている。

井戸に伴う遺物としては、卒塔婆の頭部破片 (526) が唯一である。このため、遺構の詳細な年代について明らかにすることはできなかつたが、確認面がⅢ層より下位であることから SB02 や SD01 よりは古く、15 世紀以前に位置付けられる可能性が高い。

c. 土坑

S K 0 7 (図版 8) 1B10 に所在し、Ⅲ 層上面で確認された。平面はほぼ円形を呈し、直径 92cm・深度 20cm 前後の浅い皿状を呈する。覆土は炭化物を多量に含む暗褐色土の単層である。共伴遺物が皆無なため所属時期の詳細は不明だが、検出層位からみて 15 世紀以降に位置付けられよう。

S K 0 9 (図版 8) 1B10 に所在し、V 層上面で確認された。長径 88cm・深度 56cm 前後を測り、平面は不整梢円形を呈する。壁の立ち上がりは北側が急であり、そのため底面の中心も北に偏った位置に所在する。覆土は 7 層に分層されるが、黄褐色土と暗褐色土の混土層である上層 (1~4 層) と、青灰色土を基調とし腐植物を多量に含む下層 (5~7 層) に大別できる。所属時期を示す遺物の共伴はないが、切り合い関係からみて SD03 より新しく、15 世紀以降に位置付けられよう。

S K 1 8 (図版 8) 1B9 に所在し、前述した SK09 の北約 50cm の位置に近接して掘られている。確認層位は、やはり V 層上面である。直径 54cm・深度 25cm 前後を測り、平面はほぼ円形を呈する。壁の立ち上がりは、SK09 と同様に北側が急である。覆土は暗褐色土を基調とし、中間に 2 枚の青灰色シルト層を挟んでいる。本土坑も構築時期を示す遺物の共伴ではなく、SD03 との切り合い関係も検証できなかつたが、確認層位からみて 18 世紀以前に位置付けられよう。

d. 溝

S D 0 1 (図版 9・10) 丘陵先端部と沖積地との傾斜変換点付近に構築されており、確認層位はⅢ~Ⅳ 層上面である。本溝は 5B8 付近で一度屈折した後、東側の谷底低地に向かって直線的に延びており、直線部の主軸はほぼ北東方向を指す。溝の規模は、幅 1.8~2.5m・深度 50~70cm 前後を測り、断面「U」字形か浅い皿状を呈する。特記事項としては、3B12~14 付近の溝底面において牛や人の足跡と思われる連續した凹痕が検出されたことがあげられる。

覆土は、灰色あるいは褐色系の砂質土を基調としており、もっとも深さがある SD02 付近では 7 層、浅い

部分では3層前後に分層される。これらは人為的な埋土ではなく、流水により自然堆積したものと考えられる。

覆土内部からは、古代の土師器・須恵器、中世の珠洲焼・瀬戸美濃焼・青磁・白磁・土師器・鉄漆、近世の肥前系陶磁器が数多く出土している。遺物の年代は8~18世紀におよぶが、溝の機能時期より古い資料がほとんどであった。SD01の年代については、遺構の中では最上位(Ⅲ'層上面)で確認できたことや、15世紀の鐵冶工房SB02を切っていること、覆土上面から18世紀の伊万里焼が出土している点などから、15世紀以降に掘削され18世紀を上限に存続した可能性が高い。

この遺構の具体的性格は、水田(SX14など)に伴う用・排水路であったと考えられるが、居住域と生産域とを隔てる区画施設としての機能も併せ持っていた可能性が高い。

SD03 (図版9) 1B9~3B7にかけて所在する。SD01と重複し、3B7以西で両者は全く重なる。検出された溝は総延長約35mに及ぶ。確認面はIV層上面である。重複のため溝幅は不明だが、東に行くにつれて幅広となる。深度は30~50cmを測り、断面は皿状を呈する。

覆土は3層に細分され、いずれも褐色系で砂質の強い層土を基調とする。覆土からは、古代の須恵器・土師器、中世の珠洲焼・青磁・白磁・瀬戸美濃焼・土師器・鉄漆などが出土した。本溝が機能した時期は、共伴遺物および検出層位からみて、13世紀から15世紀の間と考えられ、SD01は本溝の機能を引き継いだものである可能性が高い。

SD04 (図版4) 2B15~20、3B11に所在する。SD01から分岐し、延長約4.1mが検出された。確認面はⅢ層上面である。本溝はさらに南西方向に延びていた可能性が高いが、過去の圃場整備による削平のため検出することができなかった。確認できた部分の規模は、幅2.0m・深度30cm前後を測り、断面皿状を呈する。SD01との接点付近には、太さ2~5cmの木杭が11本打ち込まれており、堰としての機能が想定されよう。

覆土は2層に細分され、いずれも褐色系の砂質土を基調とする。覆土からは、13世紀頃の青磁と鉄滓が各1点ずつ出土した。切り合い関係・検出層位からみてSD01とは同時期(15~18世紀)に存在していたとみられ、青磁の年代より下る時期の遺構である。SD04の機能については、水田に伴う用・排水路であったと推定される。

SD05 (図版10) 3B14グリッドでSD01から分岐するもので、3Cを経てさらに南側法線外に伸びる。確認面はⅢ~Ⅲ'層上面である。溝の規模は、幅0.9~2.3m・深さ10~25cmを測る。断面形は浅い皿状を呈するが、西側壁の一部にテラス状の平坦面を持つ。SD01との接点付近には、直径2~8cmの木杭が15本打ち込まれており、SD04で見られたものと同様に、堰としての機能が考えられる。覆土は明褐色砂質土の單層である。

本溝から所属時期を示すような遺物の出土はないが、検出層位・切り合い関係などからみてSD01とは同時期(15~18世紀)に機能していた可能性が高い。遺構の性格としては、やはり水田に伴う用・排水路であったと推定される。

SD06 (図版9) 2B8~9に所在する。SD03から分岐し、さらに北側法線外へと伸びる。確認面はIV層上面である。規模は、幅60cm・深度10cm前後を測り、断面形は浅い皿状を呈する。覆土は2層に細分され、上層は黄褐色土、その下層に暗褐色砂質土が堆積する。内部からは、口禿の白磁碗が1点のみ出土しており、14世紀頃に位置付けられる。

本溝は切り合い関係・検出層位・共伴遺物からみて、SD03と同時期(13~15世紀頃)に機能していた

可能性が高い。

S D 1 0 (図版 11) SD13 から分岐するもので 4B11~12・17 グリッドに所在する。確認面はⅢ層上面である。規模は、幅 30~60cm・深さ 15~20cm を測り、断面「U」字形を呈する。覆土は灰褐色土の単層である。内部から所属時期を明示するような遺物は出土していないが、切り合い関係で見ると SD11 よりは古く、SD13 や SB02 と同時期（15世紀）に機能していたと考えられる。

S D 1 1 (図版 11) 3B15、4B11~12・17 に所在する。確認面はⅢ層上面である。規模は幅 30~40cm・深さ 5~20cm を測り、断面は浅い皿状を呈する。覆土は、茶褐色砂質土の単層である。所属時期を明示する遺物の共伴は無く、切り合い関係で見ると SD10 より新しい。

S D 1 2 (図版 11) 4B3、3B23 に所在する溝。確認面はⅢ層である。規模は幅 40cm・深さ 12cm で、断面は浅い皿状を呈する。

S D 1 3 (図版 11) 3B10・15、4B6・11 に所在する。鍛冶工房 SB02 の周溝から分岐し、確認面はⅢ層上面である。規模は、幅 40~60cm・深さ 15~20cm を測る。断面は「U」字形を基本とするが、セクション計測部分では壁中位付近で立ち上がりの角度が緩くなり、上端に向かって逆「ハ」の字形に開く。覆土は 4 層に細分され、褐色あるいは灰色系の色調の砂質が強い土を基調としている。やはり所属時期を明示する遺物の共伴は無いが、切り合い関係で見ると SD01 よりは古く、SD10 や SB02 と同時期（15世紀頃）に機能していた可能性が高い。

本溝の機能としては SB02 を囲う周溝の水を外部に吐かせる、排水溝としての役割が考えられる。

S D 1 5 (図版 4・10) 3B20~3C20・4C16 にかけて所在し、さらに南側調査区外へ伸びる。3B25 付近で大きく西に折れるが、それより西では不明瞭となり溝形を検出できなかった。また、3C15 グリッドでは本溝が東側へと開口する部分があり、水口のような機能が想定されよう。確認面はⅢ~Ⅳ層上面である。溝の規模は、幅 2~2.2m・最深部約 45cm を測り、断面「U」字形を呈する。壁の立ち上がりは、東側が相対的に緩やかである。覆土は 4 層に細分され泥炭の薄層を 1 枚挟むほかは、褐色系の色調を持つ砂質土を基調とする。所属時期を示す遺物の共伴は無いが、遺構間の切り合い関係では前述した SD05 や水田跡 SK14 より古く、ほぼ重複する SD16 より新しい。

S D 1 6 (図版 4・10) 3C10~4C16 にかけて所在し、さらに南側調査区外へと伸びる。3C10 以北では SD15 と完全に重なるため、検出することができなかった。確認面はⅢ層上面である。溝の規模は幅については不明、深度は 15cm 前後を測り、断面は浅い皿状を呈する。覆土は、明褐色砂質土の単層である。所属時期を示す遺物の共伴は無く、切り合い関係を見ると SD15・SK14 より新しい。

S D 2 1 (図版 5・11) 1B8~1C5 にかけて南北方向に所在する。1B13において分岐し、さらに東側調査区外へ伸びる。本溝は、木器集中地点完掘後の V 層中位で確認された。幅 1.1~1.6m・深度 15~30cm を測り、断面形は皿状を呈する。覆土は 2 層に細分され、いずれも青灰色砂を基調とするが、下層のそれは上層より粒子が粗い。

溝内部からは、若干のトチの実が出土したほか共伴遺物は無く、所属時期の詳細は不明である。木器層完掘直後に確認されたことや、確認面より下層（V 層下位）から 9 世紀台の遺物が出土している点より、古代末期（11世紀後半~12世紀前半）の遺構と考えられる。

S D 2 2 (図版 5・11) 1B14~2C にかけて所在する溝で、1B19 において三叉状に分岐する。やはり、木器集中地点完掘後の V 層中位で確認された。幅 0.36~1.7m・深度 5cm 前後を測り、断面形は浅い皿状を呈する。覆土は黄灰色砂の単層である。

溝覆土からの出土遺物は皆無であるが、検出層位からみて古代末期（11世紀後半～12世紀前半）の遺構と考えられる。1B19において、前述したSD21と重複しており、切り合い関係を見ると同溝より明らかに先行する。

e. 集石

S X 17 (図版6・7) 4B15 グリッドの北側、SD10とSD13の合流点付近に所在する集石。疊の分布する範囲は、直径90cmほどの円形である。各疊にレベル差は無く、Ⅲ層上面に貼りついた状態で検出された。疊表皮に酸化鉄の付着が顕著だが、二次焼成による赤化やスス・タールの付着は認められない。本集石を構成する石材は、凝灰岩・流紋岩を主体とする直径2～10cmの円疊であった。これらの石材は、八幡林遺跡付近に分布する段丘疊層から簡単に入手できるものである。

本集石は検出位置・確認層位からみて、SB02やSD10・SD13と同時期（15世紀）に機能していた可能性が高いが、その具体的性格は不明である。

f. 水田跡

S X 14 (図版4・11) 4B～4Cグリッドにまたがって所在する。遺構確認面は、Ⅲ～Ⅳ層上面である。保存状態が悪く畦畔の部分的確認にとどまったため、水田の区画や規模の詳細は不明である。田面にトレンチを入れて断ち割った結果、暗茶褐色シルトの耕作土（層厚15cm）と酸化鉄が沈殿した赤黄褐色シルトの床土が識別された。耕作土中からは、15～17世紀頃の青磁・瀬戸焼・肥前系陶器が少量出土している。周間に所在するSD01・SD05は、本水田跡に伴う用・排水路であった可能性が高い。

本水田跡が機能した時期は、検出層位・SD01の存続時期・共伴遺物などからみて、15世紀を上限とした18世紀頃までと推定される。

S X 29 (図版3・11) 5B～6Cグリッドにまたがって所在する。遺構確認面は、Ⅲ層上面である。第1確認面を精査中、色調の違いから3本の畦畔が明らかになり、それに区画された4枚の水田跡が識別された。調査区間に所在するため、各水田の形状・大きさを完全には捉えられなかつたが、おおむね3～5m幅の長方形を呈するものと推定される。田面の断ち割りでは、茶褐色を呈する耕作土（層厚10～20cm）と酸化鉄が沈殿した暗赤褐色の床土が確認された。耕作土中からの出土遺物は無い。本水田跡は、前述したSX14へと連続する可能性が高いが、両者の中間部において畦畔を確認することはできなかつた。

g. 木器集中地点

S X 30 (図版17) 1B6～15と2B6～8・11～13グリッドのIV～V層上位において、木製品を中心とする遺物が多量に出土した。この付近の同層は、豊富な湧水による湿潤な環境下にあったため、通常腐朽してしまう木質遺物も、保存状態は極めて良好であった。共伴土器の年代観からみて、本集中地点（廃棄場）は11世紀後半～13世紀頃に形成された可能性が高い。

出土遺物の内容としては、呪符木簡・舟形・馬形・刀形・鍋（蓋目）・箸状木製品・下駄・曲げ物・鉄製刀子・銅製仏具「りん」・環・人面墨書き石・砥石・軽石製研磨具・青磁・白磁・珠洲焼・土師器など多样であり、中でも木製品の出土量が卓越している。

これらの遺物は、丘陵平坦面に存在した集落が供給源であったと考えられる。呪術関係資料が目立つ点は、単なる日用品の廃棄場ではなく信仰・祭祀に関連する重要なエリアであったことを示すものであろう。

(2) 第2確認面(VI層上面)検出遺構

a. ピット群・土坑

2B10・3B4~13・4B1~2 グリッドのVI層上面、丘陵先端部が沖積地へと埋没する南向き緩斜面において、約 80 個のピットと土坑 2 基が検出された。遺構の検出状況から、法線外北側に分布の中心があることは確実であり、隣接する丘陵平坦面に集落の所在が予想される。今回の調査区は、居住域の縁辺部にあるものであろう。

ピット群(図版 12) 検出されたピットの中には、柱痕跡が明瞭なものもある。掘立柱建物や柵列の柱穴を含んでいる可能性が高いが、調査範囲内において規則性を捉えることはできなかった。これらピット群の覆土は、V 層とほぼ等質である暗灰色土を基調としている。

内部から所属時期を明示する遺物の共伴は無かったが、覆土はいずれも V 層に近似しており、同層中より掘り込まれている可能性が高い。V 層からは、7 世紀後半~10 世紀初頭・11 世紀後半~12 世紀前半頃の須恵器・土師器・鉄斧などが多く出土している。ピット群の時期についても、おおむねこの年代幅の中におさまる可能性が高い。

S K 1 9 (図版 12) 3B9 に所在する。円形を呈し直徑 60cm・深度 13cm 前後の規模で、ほぼ平坦な底部と比較的急に立ち上がる壁面を持つ。覆土は、V 層とほぼ等質の灰褐色土を基調とするが、黒色炭化物を多量に含む。内部からの出土遺物は皆無だが、やはり確認層位・覆土からみて、周囲のピット群と同じ古代の遺構と考えられる。

S K 2 7 (図版 12) 3B5 に所在する。円形を呈し直徑 80cm・深度 90cm 前後の規模で、断面形は底部に向かってロート状にすばまる。覆土は 2 層に細分され、上層に黒褐色土、下層に灰褐色粘土が堆積する。上下層の境界付近には、人頭大の礫が投入されていた。内部からは、前述した礫のはか、未同化であるが須恵器壺片(佐渡小泊窯産)などが出土しており、平安時代の遺構と考えられる。完掘後の基底部に良好な湧水を見たことから、比較的浅いが井戸であった可能性もある。

(3) 第3確認面(IX層上面)検出遺構

a. 溝

S D 2 4 (図版 14) 2B6~11・14~15において検出された。2B7において三叉上に分岐するほか、2B10・15 では急激に膨らんでおり、土坑などと重複している可能性がある。膨らみ部分を除いた規模は、幅 30~140cm・深度 5~15cm を測り、断面形は浅い皿状を呈する。覆土は 2 層に細分され、上から順に暗灰色土・灰色土が堆積している。内部からは古墳時代前期の土器が出土したが、いずれも小片であり全形をうかがえる資料はない。

本溝は検出層位・共伴遺物からみて古墳時代前期頃の遺構と考えられるが、具体的な機能・性格については不明である。

S D 2 5 (図版 14) 1B9・15、2B11~13において検出された。2B14 と 15 の境界付近で部分的に途切れている。規模は、幅 15~45cm・深度 5cm 前後を測り、断面形は浅い皿状を呈する。覆土は炭化物を含む灰色土の単層である。内部からは古墳時代前期の土器片が少量出土しており、この時期の遺構と考えられる。

本溝は、2B16 において前述の SD24 と交差している。この部分の平・断面を観察したが、新旧関係を捉えることはできなかった。

S D 2 6 (図版 15-16) 1B8において検出された南北方向の溝で、さらに北側調査区外へと伸びる。検出された部分の規模は、幅 80~100cm・深度 12~27cm を測り。断面形は浅い皿状を呈する。覆土は 2 層に細分され、いずれも暗灰色砂質土を基調としている。内部からは、古墳時代前期の土器片が少量出土しており、この時期の遺構と考えられる。

b. 集石

S X 2 3 (図版 15-16) 3B 20・25 グリッドにまたがる集石遺構である。直径 1~12cm ほどの円礫および、その破碎したもの合計約 220 点が、 $2.4m \times 0.9m$ を測る不整規円形の範囲から集中して検出された。集石を構成する石材は、白色流紋岩および緑色凝灰岩がほとんどを占める。これらは、八幡林遺跡側の台地に分布する段丘礫層中から、容易に入手できるものである。

本集石の所属時期は、検出層位からみて古墳時代前期の遺構と推定されるが、その具体的性格については不明である。

c. 水田跡

S X 2 8 (図版 15-16) 3B 17~20・22~25、3C 2~5 グリッドにまたがって所在する。第 3 確認面を精査中に、東西・南北方向の畦畔が部分的に明らかとなり、それによって区画された 8 枚前後の水田跡が識別された。グリッドの B C 境界ラインより南側では畦畔の遺存状況が悪く、水田の形状・大きさを完全に捉えられたのは、約半数の 4 枚においてであった。部分的に確認されたものも含め、平面形は方形を基本とするようだが、楕円形や台形を呈する区画も存在する。各水田の面積は、小さいものから順に $2.2 m^2$ ・ $4.6 m^2$ ・ $10.3 m^2$ ・ $11.0 m^2$ であった。水田耕作土は、層厚 10~15cm を測る暗褐色砂質土を基調とし、その下層に暗灰褐色砂質土が見られる部分もあった。耕作土中からは、古墳時代前期の土器小片が出土しており、確認層位からみても古墳時代前期の遺構である可能性が高い。

第4章 出土遺物

1 繩文時代の遺物

(1) 繩文土器 (図版 18-1)

1は3B12層から出土した粗製の深鉢であり、全て同一個体と考えられる。外面には、網目状撚糸文が施されている。

(2) 石器 (図版 18-2-5)

2は頁岩製の削器である。4C グリッドⅡ層から出土した。鱗状を呈する自然破砕礫を素材とし、一辺に裏面側から急角度の調整を施し、ノッチ状の刃部を作り出している。本資料はローリングによる磨耗が著しく、自然の荷重による破碎面と識別が困難な剥離面もある。

3は先端部を欠損する石錐である。珪質凝灰岩製剥片の一端に両面から人念な押圧剥離を施し、断面菱形の錐部を作り出している。本資料は中世の溝 SD04 の覆土に含まれていたもので、ローリングを受けたことによる棱線の磨耗が著しい。

4は硬質頁岩製の削器である。1B グリッドⅡ層から出土した。大型の円錐から剥離された、背面に蝶表皮を残す厚手・半月形の横長剥片を素材としている。刃部は、剥片末端の鋭い縁辺を利用しておらず、正裏面からの主に極浅形細部調整によって刃付けされている。

5は輝石安山岩製の磨石である。偏平な円錐を素材とし、正・裏面を中心に磨耗が観察される。2B9層において、前述の粗製深鉢(1)と共に伴しており、晩期に位置付けられよう。

2 弥生・古墳時代の遺物

(1) 土器 (図版 18~21-6~70)

壺 6はやや外方に伸びた有段口縁に擬凹線文を施すものである。口縁部外面にはススが付着している。7・8・11は有段口縁で上方に直立するもので、無文である。外面にはススが付着している。

9は有段口縁で外反して開くものである。口縁部の段部は明瞭なものではない。10は直線的に開く口縁部で明瞭な段部は持たず、外面のみに稜線を作っている。12は「く」の字口縁で、端部の後はヨコナデにより突出する。胴部は緩やかに張り出す。器面は頸部外面にハケメが施された後、口縁部はヨコナデで調整されている。内面には粗痕が見える。13は口縁部が水平に開きヨコナデによる口縁端部の処理を顕著に行うものである。14~16は口縁端部を上方に挿み上げるもので端部は鋭く尖った形状である。18~20・25は口縁部が緩やかに外反するもので、端部は面取を行っている。22は口縁部端部がヨコナデにより面をもつもので、体部は大きく球形に張り出す。内面は横方向のハケメ、外面は縱方向および斜め方向のハケメが施される。26は緩やかに外反するもので、内外面細かいハケメを施す。口縁部のヨコナデは顕著でない。27・28は口縁端部内側が尖り気味になるものである。29は長めの口縁部を有するもので端部は面取りされている。頸部付近には斜め方向のハケメが施される。31は口縁部が「く」の字に屈曲するハケメ調整

の壺で口縁端部は断面が丸く不規則なキザミがはいる。68～70は脚部片で高さ3cmほどのものと低く扁平なものが確認される。これらは壺あるいは壺につくものであろう。

壺 36は外面が有段状の口縁部に擬四線文を施したものである。口縁端部は欠損しているが、体部の形状は扁平な球形を呈するものであろうか。頸部の径から推測すると、口径はおよそ10cmである。37は口縁端部が立ち上がる長頸壺である。38・40は「く」の字に屈曲する口縁部の壺である。外面にはミガキが施されている。39・41は小型丸底壺である。41は小型丸底壺で直線的に伸びる口縁部をもち、胴部は球形に張り出す。底部は丸底になると思われる。遺存状態が悪く調整は不明である。42は長頸壺で口縁部が直線的に開き、体部は球形を呈するが底部は揚げ底である。43は「く」の字に屈曲する口縁部と、胴部は球形となり底部は平底となる。器面調整は磨耗が著しく不明である。49は「く」の字口縁のハケメ調整のものである。

器台 51～53は鼓形の器形で、受部の端部は面取りしているものがある。51は受部径12cmで裾部径を上回っている。器面は磨耗が激しいが一部には調整は粗いハケメ調整のち、ミガキが施されている。52も同じ形態であるが、受部・脚部の開きは51に比べ大きい。外面・内面にはミガキ、赤彩が施され、受部端部にキザミが施される。類例に乏しいが全体の器形から見て弥生時代後期終末以降のものであろう。

54は内溝して膨らむ裾部と柱状の脚部が特徴的なものである。外面は摩滅が著しいが一部にハケメ調整が施されている。脚部には透孔は見られない。56・61は脚部が大きく内溝して膨らむもので、透孔があるものとないものとがある。57の受部は内溝するもので、脚部は緩やかに広がるものと想定される。55・58の脚部はほぼ直線的に外側に開くもので、受部を含めると器高は高いものとなると思われる。

鉢 63是有段口縁を呈し、内外面にミガキ・赤彩を施すものである。

台付鉢 64是有段口縁の鉢に脚部の付け根部分が一部残存している。脚部は高坏のものと同様に裾部が広がるものと思われる。外面にミガキが施されるが赤彩は確認できない。

有孔鉢 65は底部を棒状の工具で貫通させた有孔鉢である。胴部は球形で、口縁部は磨耗があるが短く屈曲するものであろう。

高坏 59は裾部が大きく開き裾部が上方に反り返る。透孔は小さめで器高は低くなるタイプである。坏部は現存しないが脚部の形態から東海系小型高坏を系譜にもつ土器と考えられる。61は内溝する脚部に2個1対の透孔が2単位確認される。62はいわゆる柱状屈折脚の高坏である。坏部の口縁部は直線的に伸び、脚部は中空で裾部に向かって太くなり急角度で屈折する。坏部の底面は粘土充填を行っている。

(2) 編年的位置付け

以上の遺物の形態的特徴から、1期：弥生時代後期後半～終末、2期：古墳時代前期、3期：古墳時代中期に大きく大別できる。1期には、北陸地方の法仏・月影式と共に通する特徴を持つ土器が主体である。有段口縁の壺(7・8)や擬四線文を施す壺(6)、「く」の字口縁で壺部が強く挽き出されるもの(12)や壺(36)、長頸壺(37)、赤彩の鉢(63)・台付鉢(64)などが挙げられる。器台の51～53は器形から後期終末以降のものと思われる。2期では、前段階の系譜を受け継ぎながら小型器台や小型丸底壺などが出現する。壺では口縁の有段部が不明瞭になるもの(9・10)、「コ」の字もしくは「く」の字口縁のもの(13～24)、壺(38～43)、器台(54～61)、有孔鉢(65)が2期のうち新潟シンボ編年5～8期ころに併行するものと思われる。3期では、個体数が少なく不明瞭な部分が多いが、壺(49)、高坏(62)などがこれに該当する。また、碗が見られることから中期の初頭前後と考えられる。

3 古代の遺物

(1) 須恵器 (図版 22~26・71~157)

坏蓋 71~88 は坏蓋である。88 は返りのあるタイプで、返りの形状から 7 世紀末頃に位置付けられるが、出雲崎町梯子谷窯跡〔新潟県教委ほか 2001〕の製品とは胎土が異なる。

71~76 の口縁端部は、しっかりと下方に折れるものが主体である。つまみが遺存する個体では、つぶれた擬宝珠形のつまみをもつ。法量は口径 17 cm 前後・器高 2~3 cm 前後のものがあり、大振りなものが目立つ。

77~87 は側面觀が山笠形を呈するものである。端部の形状は、しっかりと下方に折れるもの (77·78·81·84) と、断面三角形状を呈するもの (79·83) とがある。つまみには、擬宝珠形のものとボタン状の 2 タイプがみられる。法量は、口径 14 cm 前後・器高 3 cm 前後が主体的である。

86·87 は佐渡小泊窯跡群の製品である。側面觀はいずれも山笠形を呈する。86 のつまみの形状は、中央がくぼむ環状紐に近い。圓化しなかった破片にはボタン状を呈するものもある。

有台坏 89~93·100 は浅身の有台坏である。口縁部が遺存するものは、端反り気味になるものが多く、口径 13 cm を超す大ぶりな個体が目立つ。92 は非小泊産と推定される。外に強く踏ん張る内端接地の高台を持つ。93 は内側に入り込んだ水平接地の高台を持つもの。底部から口縁にかけて直立気味に立ち上がるが、口縁部まで完存する個体はほかに無い。99 は底部の切り離しに回転系切りが採用された、唯一の例である。高台は小さく低い。底部から直線的に折れて口縁部が立ち上がる。100 は直線的に伸びる口縁部が直角気味に折れ曲がるもので、高台は小型である。

94~96 は深身の有台坏である。このうち 94 は外面に沈線がめぐる金属器模倣のタイプである。口縁端部は次第に薄くなり、高台は内端接地で外側に強く踏ん張る。96 は極めて厚手で、側面下半部に凹線が一経施される。高台は断面が方形を呈する。

有台碗 101 は有台碗である。口縁部が「ハ」の字状に直線的に立ち上がり、外端が接地する高脚の高台を持つ。無蓋の器種である可能性が高く、佐渡小泊窯跡群の製品と考えられる。

無台坏 102~126 は無台坏である。底部の切り離しが明らかなるものは、全てヘラキリである。このうち 102·104·109~111·118 は、胎土などから非小泊産とみられる。法量は、径 12.6~14.4 cm・器高 2.9~3.5 cm の領域のものがあり、厚手の個体が多い。102·104 は粗粒の石英・長石を多量に含む特徴的な胎土であり、釜神窯など県北の窯で生産された可能性が高い。

106·112~117·119~126 は佐渡小泊窯跡群の製品と考えられる。法量は、口径 12~13 cm 前後・器高 3 cm 前後を主体とし、器壁が厚く口縁があまり外傾しない古手の個体から、薄手で外傾度が大きい新しい段階のものまで、時期的に幅を持つ。

無台坏の中で特に注目される資料としては、墨書き器 (122~129) と漆紙付着土器 (130) が挙げられる。墨書き器は、総数 8 点が出土している。墨痕の分析を新潟県立歴史博物館の浅井勝利氏に依頼したが、文字として判読できるものはなかった。漆紙付着土器 (130) は、口径 12.1 cm・器高 3.9 cm の酸化焰焼成須恵器である。底部は回転ヘラ切痕を残す。本資料は漆塗り作業の際のパレットとして使用されたものである。内面に厚く付着する漆膜上面に、直径約 9 cm の蓋紙が遺存しており、この部分を赤外線ビデオカメラで撮影したが、文字の痕跡を確認することはできなかった。

長颈瓶 134·135·139·141·144 は長頸瓶であるが、全形をうかがえる資料はない。134·135 はラッパ状に大きく聞く口縁から頸部にかけての部位である。端部が遺存するものは、いずれも上下に肥厚して

面を持つ。137・138は、長頸瓶の底部破片である。高台の断面は方形で、水平あるいは外端が接地する。139は細い筒状を呈する頸部の外面に、2条の沈線が施されるものである。141は扁球形の体部に、外に踏ん張る水平接地の高台が付くが、頸部以上を欠損する。142は大きさが他の個体より著しく小さい。145は酸化塩焼成の長頸瓶と考えられる。横にL字状に伸びる高台と緩やかに湾曲する体部を持つ。

広口瓶 147は広口瓶の頸部から体部上半にかけての破片である。器形は頸部が比較的長く、大きく外反する広い口縁部を持つものと推定され、頸部外面には2条の沈線がめぐる。

平瓶 143は偏球上面の偏った位置に口縁部が付く平瓶である。法量は、体部最大径12.4cmを測り、本器種の中では小型に属する。口縁部を大きく欠損するため、端部の形状は明らかでない。肩が強く屈曲する偏平な体部を持ち、底部はヘラキリの後ナデにより平底に仕上げられている。

短頸壺 146は偏球形を呈する短頸壺の体部上半部分である。この個体は、粗粒の石英・長石を多量に含む特徴的な胎土を持ち、筑神窯など県北の窯で生産された可能性が高い。

壺蓋 97は短頸壺とセットになる蓋である。法量は、口径14.2cm・器高4.7cmを測る。腰高な宝珠形つまみが付き、平坦な天井部から垂下する受け部を持つ。外面にのみ自然釉が厚くかかり、壺にかぶせた状態で焼成された可能性が高い。

横瓶 156・157は俵を横にしたような体部の上に口縁部が付く横瓶である。156は、体部破片で外面が格子目タタキ+カキ目、内面は同心円タタキが施されている。157は、体部における一方の端にあたる。内面には、粘土円盤による閉塞痕をとどめている。外面には、厚く自然釉がかかる。

壺 150～155は壺である。全形をうかがえる資料は1個体のみであったが、残存部位からみて何段階かの法量差が認められる。150～152は同じような口縁部形態を持ち、口径25～28cm前後の領域のものがある。体部の調整は、(外)格子目タタキ・(内)同心円タタキ、(外)格子目タタキ・(内)放射状タタキのか、内面に平行タタキを施した例が確認される。153は匂めの口縁部で短部は嘴状に突出する。

154は、口径27cmを測る壺で復元によりほぼ全形をうかがえる資料である。体部は肩の張る倒卵形で、直立気味に短く立ち上がる口縁部が付き、底部は尖底に近い丸底である。口縁端部の形状は、上下につまみ出されて面を持つ。体部の調整は、外面が格子目タタキ、内面には同心円タタキが施されている。

(2) 土師器 (図版26・27・161～195)

鍋 158・159は鍋である。ほとんどが小破片であり、全形をうかがえる個体は無い。いずれもロクロ成形で作られている。体部はいずれも平行タタキがみられる。158のタタキは裏表両面にあり断面が円く幅5mm程のものであるが、159のものは外面のみで断面は鋭角で幅が狭い。

高坏 160は黒色上部器の高坏である。内面黒色処理された碗形の坏部に、裾が水平に広がる低い脚部が付く。口径12.2cm・器高7.0cmを測る小型品である。坏部の調整は、(外)ハケナナデ・(内)ヘラミガキが施される。この形式は古墳時代後期に隆盛した器種で小型化したものは、8世紀前半まで残存する。

有台坏 161は須恵器写しの有台坏である。口径15cm・器高4.6cm・底径9.8cmを測り、大ぶりなものである。器形は口縁部が堆反り気味で、高台は外に開く。内外面ともにヘラミガキ、赤彩が施される。

無台坏 165は金属器を模倣した無台坏である。口径17.4cmを測る大型品であり、口径の割に身が浅い。体部下半部は緩やかに湾曲し、口縁部は上方に立ち上がる。器面は、内外面ともに丁寧なヘラミガキのもの、黒色処理が施されている。口縁部の外側には、1条の沈線がめぐる。

無台碗 162・166～175はロクロ成形で作られた無台碗である。162は深身の大型品で底部の切り離し

が回転ヘラキリによる唯一のものである。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、上部でわずかに外反する。全体的に遺存状態が悪く、器面調整の詳細は判然としないが、かすかに赤彩の痕跡をとどめることから、内外面ともに赤彩されていた可能性が高い。

164は内面黒色処理された無台碗。風化が著しく、器面調整等は不明である。

166～175は底部の切り離しが回転糸切り未調整のものである。166・167は、ロクロナデの単位が細かく、内面も平滑に仕上げられている。大型で深身の167は、口径12.6cm・器高4.2cm・底径5.8cmを測る。外面部下半にヘラケズリによる再調整を行い、内面に対して晒文風のヘラミガキを施した精製品である。

有台碗 176は高台が高めになり口縁端部が端反りになる有台碗である。内面がミガキによって平滑になっている。口径は16cm、身の深さは古代のものにしては浅いため、年代が降る可能性もある。

長甕 177～183は長甕である。全形を復元できる資料は少ないが、非ロクロのものとロクロ成形のものが並存する。177～180はロクロ成形長甕である。177は口径24.0cmを測るもので、底部は丸底となる。頭部から口縁部にかけて短く「く」の字にくびれ、端部は丸い。体部の調整は、上半が外面ともにロクロナデ、下半は（外）平行タタキ・（内）同心円タタキである。178～180は口縁端部が肥厚し、面取りされたもので、体部にはカキメが施される。181～183は非ロクロ成形長甕。181は口径13.8cmを測り、口縁部は短く「く」の字にくびれる。内外面の調整は、いずれも縦方向のハケ調整である。

小甕 184～194は小型の甕である。完形に復元できた資料は無いが、長甕と同様に非ロクロ・ロクロ成形が並存する。184～190はロクロ成形小甕である。内外面ロクロナデで、平底・回転糸切り未調整となる可能性が高い。口縁部形状の種類には、単純口縁と、受け口状を呈するものがある。

191～194は非ロクロの個体である。頭部のくびれが比較的ゆるやかで、丸い端部のほかに、上下に肥厚するものや、端面に凹線を施すものがある。体部の器面調整は、外面縦ハケ・内面横ハケを基本とする。

瓶 195は瓶である。体部上半を欠損する。器面の風化が著しく調整は不明だが、非ロクロ成形である可能性が高い。出土した体部下半は厚手の作りで、長甕を倒立させたような形態である。底部は大きく開口しており、底径23.0cmを測る。体部上半の形状は、他遺跡の資料からみて、深鉢形となる可能性が高い。類似資料として、上越市一ノ口遺跡東地区【新潟県教委ほか1994】が挙げられる。

(3) 灰釉陶器（図版24-131～133）

131～133は有台碗か有台皿となる灰釉陶器の細片である。内外面にごく薄く灰釉が掛かっている。

(4) 繞年の位置付け

当該期の遺物は概ね3時期に区分できる。まず、飛鳥時代では返りのある坏蓋(88)1点が出土した。奈良時代では、坏蓋(71～76)、有台坏(89～91、94)、無台坏(130)、長頭瓶(139)、広口壺(140)などが該当する。平安時代では、坏蓋(77～87)、有台坏(92、95～101)、無台坏(102～126)、甕(151～154)、長頭瓶(134、135)、灰釉陶器(131～133)などで、9世紀前半から10世紀前半に相当するとみられる。

4 中・近世の遺物

分類・編年の表記は、土師器は【水澤幸一 2005】、珠洲焼は【吉岡康暢 1994】、青磁は【上田秀夫 1982】、白磁は【森田勉 1982】、青花は【小野正敏 1982】、瀬戸焼は【藤澤良祐 2005】の各氏論文を参考にした。

(1) 陶磁器・土器の分類と概要（第7回）

（中世）

a. 中国製陶磁器

- 青 磁 割花文碗、運舟文碗・小杯、外面に雷文が施された碗、見込みに花文が施された厚手の碗、口縁部内面に波状文が施された稜花皿、香炉などが出土している。产地は竈泉窯系のものが主体である。
- 白 磁 玉緑口縁（白磁II・IV類）および口禿の碗、瓶頸、高台無釉の小皿などが見られる。
- 青白磁 薄手で花文を施した体部小片が出土している。器種は短頭壺のような小型の器種であろう。
- 青 花 明代の青花小碗及び見込みに馬の目文様が施された小皿が出土している。

b. 龍戸・美濃焼

平 碗 桶形を呈するもの。

天目茶碗 後期様式のものでかけられた鉄釉の発色には、黒色と茶褐色の2種類がある。

卸 皿 半透明の釉薬が施されている。口縁部は片口のものもある。

瓶 子 一般的に見る長胴形のものほか頸部の長い徳利形瓶子が確認された。

香 炉 脚部が退化傾向にあり、体部が丸く膨らむ持腹形香炉である。

折縁深皿 口縁部が断面T字形のものである。

折縁皿 内面を内削ぎした折縁皿で大窯4期に特徴的な器種である。

丸 皿 大窯期の小皿で見込み、底部に重ね焼きの痕跡が見える。全形が分かるものはない。

c. 珠洲焼

壺 口唇部上端が凹線状にくぼみ、体部内面に同心円タタキを残す古相の資料も存在する。

片口鉢 薄手で口縁端部は面取りされやや窪んでいる。

擂鉢 口縁部の形状には、外傾する面を持つものや、内削ぎ状のものなどがある。

壺 体部をタタキ成形した壺T種とロクロ成形のR種がみられる。

淨瓶 壺の体部上半に注口が付くもの。注口部は、体部との接合箇所で剥落している。外面には、波状文が施されている。

d. 妆器系陶器

壺 口縁部が、遺存する資料は1個体だけである。口縁端部は、上下に引き伸ばされて「T」字形を呈する。体部外面には、方形密格子の押印がまばらに施されている。このほかに越前焼の壺がある。

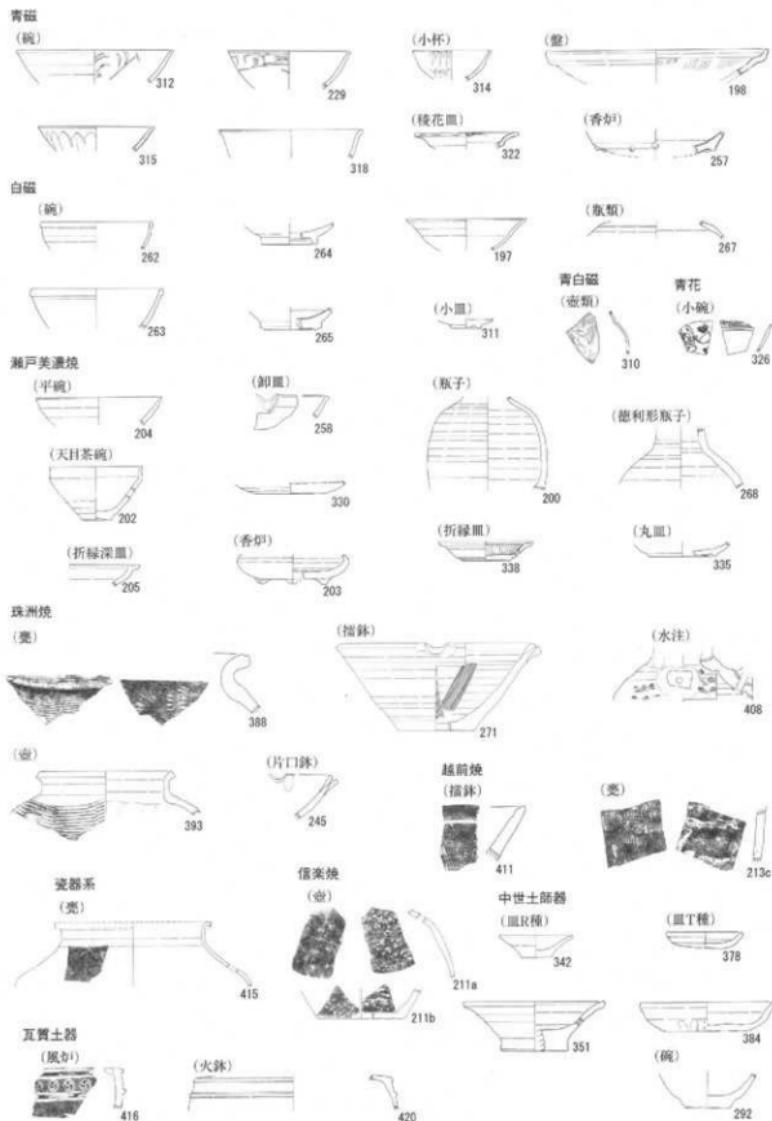
壺 大粒の石英を多く含む胎土が特徴的な信楽焼の壺で、体部が球形に張り出し底部はやや大きめの平底である。

擂鉢・鉢 口縁部内面に横位の沈線がめぐる越前焼と、土師器に近い焼き上がりの产地不明のものとがあるが、出土量は少ない。

e. 瓦質土器

風炉 風炉の体部破片が出土している。

火鉢 丸形の火鉢が2点出土している。突帯と巴文の押捺が見られる。



第7図 中世陶磁器分類図

f. 中世土師器

皿 ロクロ成形（R種）、手づくね成形（T種）の両者がみられる。ロクロ成形のものは、底部の切り離しが全て回転糸切りである。古代土器の系譜をひく小皿と、柱状高台を持つものとに分けられる。

ロクロ成形の皿では、通常の底部のもの、厚みのある柱状高台を持つものがある。柱状高台は出土割合が高い。底径は4~8cm代に収まるものが一般的だが、11cmを測る大型品もある。

手づくね成形の皿では、身が浅く底部から口縁にかけて緩やかに湾曲するもの（A類）と身が深めで口縁が上方に立ち上がる「坏」形のもの（B類）に大別できる。口径8~10cm代、器高2cm前後のものと、口径16cm代、器高3.5cm前後のものの2種類の法量がある。

碗 1点のみ確認できたが、口縁部は欠損しており器形は不明である。

(近世)

a. 肥前系陶磁器

染付 碗・広東碗の蓋・皿・瓶・香炉や見込みを蛇の目釉剥ぎする高台無釉の皿などが出土している。

陶器 豆土目積み及び砂目積みの皿、刷毛目の鉢、瓶、京焼風の呉器手碗、擂鉢、壺などがある。

b. 濑戸・美濃焼

志野 乳白色の志野釉が掛けられたもので釉薬は厚く、貫乳が発達している。小皿が出土している。

c. 土器

焰烙 L字形に折れる口縁部で底部は浅い擂鉢状を呈すると思われ、在地で製作された可能性が高い。

(2) 遺構出土の土器・陶磁器

S D 0 1 (国版 28-196~228)

197は口禿の白磁碗で緩やかに湾曲して外方に開く。13世紀後半のものである。

198は青磁盤で15世紀代のもの。口縁部と体部の一部の破片が4点出土しており、図上で復元した。

199は青磁碗で12世紀末のもの。小片のため口径など不明であるが、内面に刻花文が施されている。

200は瀬戸で前期様式の瓶類である。外面は無釉である。

201~205は瀬戸美濃である。201は後I期の鉢、202は後II期の天目茶碗、203は後I期の持腰形香炉で底部は回転糸切痕を残す。204は後II期の平碗、205は後II期の折縁深皿で破断面には漆締痕が認められる。

206~210は珠洲である。207はIII期の壺、206・209は体部片で前者はI期の壺（388）と同一個体の可能性が高い。208はV期の擂鉢、210はIV期末頃の擂鉢である。

211は信楽の壺で、大き目の底部に球形に膨らむ部がつくものである。15世紀に位置付けられる。

212~213は越前の壺である。213は体部に簾状文と菊花文が押印される。13世紀に位置付けられる。

214は產地不明の壺器系陶器である。こね鉢のようなもので焼成はやや軟質である。

215~219はロクロ成形の中世土師器で底部がやや厚めのもので柱状高台となるものがある。220はロクロ成形の土師器皿である。

221~226は手づくね成形で作られた中世土師器皿である。A類で底部と体部の境界付近に段を持つタイプには口径14cm前後の大型品（223・224）と口径9cm前後・器高2cm前後を測る小型品（221・222）がある。

前者は13世紀前半、後者は鎌倉後期（13世紀後半～14世紀前半、以下同様）の所産である。B類（225・226）には、内外面に煤・タールの付着が著しく、灯明皿としての用途が推定されるものがある。225が鎌倉後期、226が14世紀とみられる。

227・228は近世の肥前系磁器で溝上面から出土した。227は内面中央にコンニヤク印判を施し、蛇目釉剥ぎの見込みを有する波佐見の染付皿である。18世紀中頃から後半のものである。228は小杯で17世紀前半のものである。

以上、SB01から出土した土器は、12世紀後半から14世紀に位置付けられるものが主体をなす。しかし、SB02を切りその掘削時期は15世紀前半以降へ確実に下り、出土遺物の中心年代とは整合しない。

S D 0 2 (図版 29・30-229~238)

229は中国製の15世紀中頃の青磁碗。外面には、線描きの雷文が施されている。

230～232は瀬戸美濃である。230は後Ⅲ期の平碗、231は瓶子、232は枝花皿でいずれも後期である。

233～236は珠洲で、IV～V期のものである。

237は土師器皿底部で回転糸切未調整、内面はらせん状のロクロ調整がある。15世紀に位置付けられる。

238は信楽の底部片で15世紀のものである。

S D 0 3 (図版 30・31-239~252)

239・243～247は珠洲である。239は回転糸切の擂鉢底部である。片口鉢の245はⅡ期、246はⅠ期で口縁端部には条線が見られる。

240・241は瀬戸前期の瓶類である。240の外面にヘラ書き文を施す。241の外面には灰釉を施す。

248・249はロクロ成形の中世土師器で、底部に回転糸切痕を残す。

250～252は手づくね成形の皿である。底部と体部の境界付近に段を持つ。所属時期は252が13世紀前半以前、250・251が鎌倉後期である。

S D 0 4 (図版 31-253)

253は中国竜泉窯系の青磁碗。外面には、鏽連弁文が施されている。13世紀後半のものである。

S D 0 6 (図版 31-254・255)

254は口禿の白磁碗である。13世紀後半に位置付けられる。

255は中世土師器底部で回転糸切痕が残る。

S X 1 4 (図版 31-256~260)

256は青磁碗で15世紀前半から中ごろのものである。外面には蓮弁文・見込みには花文が施されている。

257は青磁香炉の体部片。体部下部の湾曲部に突帯がめぐり、瘤状の突起がみえる。優品であると思われ、破断面には漆継ぎ痕がみられる。15世紀のものである。

258は瀬戸美濃で鉢皿口縁である。後Ⅰ～Ⅱ期のものである。

259は珠洲Ⅳ期頃の壺体部片である。

260は壺器系の壺で13世紀のものである。外面には簾状文の押印が連続的に施される。

S X 3 0 (図版 31-33-261~307)

261～265・267は白磁である。261は高脚の高台で見込みには界線が見られる。12世紀前半のものである。262～264はⅡ類で玉縁口縁の碗に相当する。12世紀後半に位置付けられる。265は厚い底部に低い高台がつくⅣ類である。267は瓶類で12世紀前半のものと見られる。

266は青磁碗の底部で15世紀代である。

- 268 は瀬戸前期の徳利形瓶子で外面には灰釉が施される。県下では初例である。
- 269～271 は珠洲焼で、269 は II～III 期の壺、270 は II 期の壺、271 は擂鉢で IV 期の古相に位置付けられる。271 の口縁端部には外傾する広い面を持ち、鋤目の間隔は広い。底部切り離しは静止糸切である。
- 272～297 はロクロ成形の土器器である。口縁部片の 272 は 351 と同形の柱状高台皿であろう。273 は小皿である。全形をうかがえるものが少ないと認め器種は不明であるが、碗（279・292）や高足高台の有台碗（297）に相当する器形もみられる。また、柱状高台（274～283）は大小各タイプが多く存在する。厚みのない底部破片は 273 と同形のものと見られる。
- 298～307 は手づくねの皿で、A 類の口径が小さく口縁が短いもの（298～302・306）、口径が大きいもの（304・307）、B 類の 305 が見られる。298～300 の所属時期は 13 世紀前半以前、301～304 は鎌倉後期、305・306 は 14 世紀に位置付けられる。

（3）遺構外出土の土器・陶磁器（図版 33～41・308～470）

- 308 は肥前系陶器の胎土目皿である。目積痕は 4 単位である。1,580～1,600 年代の所産である。
- 309 は肥前系の染付瓶である。17 世紀中ごろの所産である。
- 310 は青白磁の瓶頸で短頸壺の可能性もある。外面には花文を施している。12～13 世紀のものであろう。
- 311 は白磁の小皿で所属時期は 15 世紀前半である。
- 312～325 は青磁で割花文（312・313）、蓮弁文碗（315・316）・杯（314）と、端反り口縁を持つ 317・318、がある。碗（320・321）、皿（324・325）の見込部分には、花文が施される。
- 322・323 は口縁部内面に波状文が施す稜花皿である。所属時期は 312・313 が 12 世紀末、314～316 が 13 世紀後半、317～321 が 15 世紀代、322・323 が 15 世紀後半、324・325 が 15 世紀前半となる。
- 326 は青花小碗で濃い蓝色の呉須で施文する。小野氏分類 B 1 群に相当し 15 世紀後後に位置付けられる。
- 327～330・332～338 は瀬戸・美濃焼。327 は瀬戸前期の瓶頸口縁部である。外面に灰釉がかかっている部分がある。328 は瀬戸美濃の天目茶碗で後 I 期である。329・330 は中 I～II 期の鉢である。共に同一個体の可能性が高く、内外面に灰釉が見られる。331 は底地不明の瓶頸である。332 は瓶頸脚部で後期、333 は碗形鉢で後 I 期、334 は桶で後 IV 期に位置付けられる。335 は大窯期後半の丸皿、336 は大窯 IV 期の皿、337 は後期の深皿で釉薬をハケメリ・ツケガケを行う。338 は大窯 IV 期の菊皿で内面に削ぎが入る。
- 339 は端反りの口縁を持つ志野小皿で 16 世紀末のものである。
- 340～373 は、ロクロ成形の皿形土器で外開きになる口縁部をもち、底部の切り離しはいずれも回転糸切り未調整である。小皿（342～344）や柱状高台皿（351）などが出土している。時期幅があり 11 世紀後半（342・345～350）、11 世紀末（343・344）、12 世紀（351～372）のものが見られる。373 は B 類で、15 世紀のものである。煤が多量に付着しており灯明皿として利用されている。
- 374～387 は手づくね成形の皿 A 類で、口径が 9 cm 前後の小型と 15 cm を越える大型が存在する。374・382～385・387 が 13 世紀前半以前、その他は鎌倉後期のものである。
- 388～409 は珠洲焼で 388～394 は壺である。388 は端部上面が四線状にくぼみ、体部内面に放射状タタキ痕をとどめる最古タイプの資料で I 期に相当する。口縁部の形状には強く屈曲する II 期の 389 や、肥厚口縁を持つ IV 期の 390・III 期の 391 などがある。393・394 は壺 T 種でいずれも IV 期のものである。口縁部は直立気味に短く立ち上がり、端部がわずかに肥厚して面を持つ。397 は R 種の壺底部片で糸切痕が見られる。395 は体部片で前者の割れ口外面には漆と布で接着した痕跡が見られる。396 は IV 期の小型鉢で回転糸

切痕が見られる。398~407は擂鉢で398・400・401はⅣ期のもので口縁端面は広く面取りされ、鉗目の間隔は空いている。399・402・403はⅤ期に属し口縁が内削ぎ状に作られるもので、鉗目が多条もしくは密に施される。404・405の口縁部は丸くすぼまるもので、櫛描き波状文が施文されるものもあるが粗雑な施文である。VI期の所産である。408はI期の水注で注口部は、その接合部から剥落し遺存しない。肩部に櫛描波状文がめぐる。409も同様の波状文が見られるが、施文単位が異なるものである。

410~414は越前焼である。擂鉢の410・411は内面の鉗口上端に1条の沈線がめぐる。412~414は甕の体部片である。412は格子状の押印が施される。413は破損箇所に漆と布による接着痕が見られる。所属時期は15世紀代である。

415は瓷器系陶器の甕である。口縁部は一部を欠損するが、端部を上下に伸長させ「T」字形に作るものと思われる。体部破片の外面には、菊花文と方形密格子の押印を施す。

416・420は瓦質土器の火鉢である。外面に横位の突窓2条をめぐらし口縁部に巴文を押捺している。417~419は風炉で蓮子文が見られる。

421は青花小皿で高台内側に砂が付着する。小野氏分類B群かE群で16世紀末に位置付けられる。

422~458は肥前系陶磁器である。422~424、433・434は染付碗、皿で網目文、梅花文、草花文、コンニャク印判のものが見られる。425は香炉で笠文が施されている。426~429は蛇ノ目釉剥ぎの皿である。430は瓶の高台部である。431は見込み中央にコンニャク印判による五弁花、高台裏に「大明年製」と施文する皿である。432は廣東碗の蓋で、つまみ中央部および裏面に笠文が描かれている。435は口縁部が上方に折れる刷毛目鉢である。

436~442は胎土目の皿である。内面と口縁部外面に透明釉が施されている。1580~1600年頃の所産である。443~447は砂目の皿である。1610~1630年頃の所産である。

448・449は刷毛目碗である。448は明るい肌色の胎土で17世紀後半、449は暗い赤茶色で18世紀前半のものである。

450~455はいわゆる京焼風陶器で、450は高台無釉の小碗である。高台の内側には、印判押捺がみられる。451~455はいずれの個体も、骨付を除く全面に黄色味を帯びた透明釉が掛けられている。

456は刷毛目の鉢で高台の両角はそぎ落とされ面を持っている。17C前~中頃の所産である。

457は刷毛目の瓶である。底部は基底で17世紀後半に位置付けられる。

462~468は擂鉢である。462は須佐の擂鉢で、口縁部は折り返されている。胎土は黄色掛かった灰色である。その他は肥前で、口縁部は折り返すか外反する。底部は有台か無台で回転糸切痕を残す。

469・470は焰烙で、口縁部が出土している。口径35cm前後のもので、口縁部には煤が付着している。

471は瀬戸美濃の水滴である。472は泥人形で狛犬であろう。473はサイコロで、時期は近世であろう。

5 金属製品(図版41~474~477)

474は鉄刀で直線的に伸びる。茎には目釘孔が見られる。現存長26.4cmを測る。

475はSK27出土の手斧で刃部が「ハ」の字状に広がる。全長9.3cm、刃部の最大幅6.1cm、着柄部の幅3.3cmで袋状に折り曲げ断面は隅丸方形となる。基部は一方の腹部が膨らみをもつ。

476はりんご碗状を呈し、紐には直径3mm程度の孔が穿たれている。素材は青銅製と見られる。

477は環で形状は梢円形を呈し、長径3.7cm、短径3.3cmを測る。

6 木製品

(1) 木簡 (図版 46・47-517-525)

517は、頭部は圭頭であり、下部は尖っている。約77.2cmに及ぶ大型の木簡である。墨書きは漢字と仮名のまじったものであるが、判読については断定できない。なお、残っている部分については5枚に割られている。518は大型の呪符木簡で、まじないの具体的な内容を示すものとしても注目できよう。519・520は、頭部は圭頭で、下部の尖った完形品である。521は、頭部は圭頭であるが、中央部で割れており、下部は失われている。呪符木簡と考えられる。522・523は文字もほとんど判読できず、また接合面こそ見られなかったが、材質等から考えて、一連のものと思われる。なお、522は中央部に孔があいている。524は板状の木製品に墨書きが見られるが、詳細は不明である。525は「らいかう田」と判読される面の裏に墨書きが見られる。断定はしがたいが、「梵字(パン)急々如律命」と考えられる。なお、「らいかう田」についての詳細は不明である。

(新潟県立歴史博物館 前嶋 敏)

第8図 山田郷内遺跡出土木簡釈文

(2) 日常用品・呪術用具・その他 (図版 42~47-478~516・526~533)

478・479 は台と歯を別材に柄で組み合わせる差歎下駄である。478 の台は全長 23.0cm、最大幅 8.2cm、最大厚 2.8cm、上下端では次第に幅を狭め、厚さも両端で薄くなる。横断面は台形状となる。台は板目材を使用し、台の上面から後歯に木釘を 3 箇所打ち込んでいる。479 は台の半分を欠損しているが 478 と同形になるものであろう。差歎の差込穴は前後の歯ともに 2 箇所認められる。480~482 は差歎である。480・481 の柄は 1 本、482 の柄は 2 本あり、整形の加工痕が明瞭に認められる。どちらも装着痕が観察できる。また、接地面には砂粒が埋まっており、使用された製品であるといえる。483・484 は一本から作り出した連歎下駄である。483 は現存長 23.2cm で、台の半分弱と歯を欠損している。484 は台が隅丸の長方形で、現存長 23.7cm、歯は欠損している。両者とも鼻緒孔は穿たれておらず未製品と考えられる。歯の根元には線上の加工痕が残り、鋸と鑿を併用して作り出している。

485 は鉤物の角形鉢あるいは槽の未製品と考えられ、外面、内面ともに粗削りな加工痕が残り、整形段階のものと考えられる。

486 は組物の箱板で接合部は精巧に穿孔されている。

487 は折敷の底板である。

488~492 は漆器である。488 は椀で口径 18.4 cm、器高 5.1 cm、底径 7.5 cm であるが、保存処理後の仕上がりに歪みがあるため、口縁部の形態は原形を留めていない。高台は中央を削り、低い高台を形成している。漆は高台内部を除き塗布されている。489 は厚い底部をもつ椀である。高台は中央部を削る純高台で厚さ 1.5 cm である。490 は深めの身とやや高めの高台がつく椀で、口径 15.3cm、器高 5.6cm、高台径 7.4cm である。高台は中央を窪ませ、中央には幅 2 mm、長さ 1.5mm ほどの刻印が認められる。漆は内外面ともに塗布されている。491 は浅めの身と低い高台をもつ椀で、口径 16.2cm、器高 3.7cm、底径 9.8cm であるが処理後の歪みが強く、口縁部の傾きは不確定な部分がある。漆は高台内部を除き塗布されている。492 は小皿で、漆膜の剥離は見られるものの、遺存状態は良く完形品である。口径 8.8cm、器高 1.2cm、底径 6.6cm である。漆膜剥離面には下地として炭粉が施されている。四柳嘉章氏の編年 [四柳 1997] によって、漆器の形態を見てみると 489~491 は 12~13 世紀、492 はこれよりも新しく 14 世紀と考えられる。

493・494 は曲げ物の側板である。493 の内面には入念な墨書きが施されている。また、494 の側面上部の 4 周にはそれぞれ 1 文字の墨書きが見られ、「東」「司」「触」「桶」と記されている。新潟県立歴史博物館の藤森健太郎氏によると中世の仏教寺院で使用される用具であるという。詳細な位置付けについては藤森氏・皆川氏の論稿 (第 6 章 3) を参照頂きたい。

495・496 は曲げ物の底板で 495 の中心には穿孔が施される。何らかの 2 次利用がなされたようである。

497~501 は箸状木製品である。SX30 を中心に大量に出土しており、総数 273 本が確認された。形態は両端を削って細くするものと一端を切断し一方が細くなるもので、前者が主体的である。前者の全長は 13~27cm の幅があり、多くは 19cm 以上 22cm 未満にあり全体の 6 割以上を占める。

502~516 は碁目 (504)、鍼 (509)、矢板状木製品 (508)、しゃもじ (510・511)、火筆臼 (514・515)、飾り板 (516) のほか、加工木片である。504 は鳴鏑を大きくした碁目 (ひきめ) と呼ばれるものである。鏑矢のように雁又の鎌は装着しない。多くは矢を発射した際に音が鳴るよう先端部に孔が開けられる。形態は中間で膨らみをもたせ上下両端が窄まるもので、もうひとつの同型部品を糸で巻き漆を塗って固定したと考えられる。断面は半円形になっており外形はロクロ挽きで成形する。内面は手作業でくり抜いて空洞としている。本製品は SX30 より出土したことを考慮すると、儀礼的な用途で使用された可能性も考え

られる。509 は一本作りの鉗で、刃先の方は幹の部分、柄の方は枝の部分を利用している。遺存状態が悪く加工痕は明瞭ではないが、柄は掘りやすいように平坦面を作っている。刃先には別に金属の鉗先を装着したものと考えられる。

526 は SE08 から出土した卒塔婆で下部は欠損する。墨痕は見られなかった。

527 は平坦面をもつ棒状の木製品である。一方の面には「×」字状に掘り込みが 6 個あり、裏面にも加工部分が 2箇所ある。

528 は断面円形の棒状木製品で、一方の先端は腐食で欠損している。表面には黒漆、先端部は赤漆が施されている。用途は不明である。

529 は板材を加工したもので人形の可能性も考えられる。

530 は頭部と鞍を表現しており、馬形と考えられる。

531 は船形で角材に船槽をくり抜いて作り出す。幅 2.6cm、現存長 14.3cm、舟底の厚さ 0.4cm で船首を欠損する。船尾は隅丸方形で錫状に伸びる。船首は尖らせるか（隅丸）方形の形態になるとを考えられる。船体の断面は外面が逆台形、内面は U 字形となる。

532 は一方の側面に鋭角の切込みを入れ下端に小孔を開けた木片である。

533 は刀形である。全長 29.2cm、最大幅 2.8cm、厚さ 3mm の板材である。

7 石製品（図版 47・48・534～554）

人面墨書き石 534 は硬質砂岩の扁平な自然石の表裏に人物と文字が墨で描かれている。下半部は欠損しているが表面には顔と胸部が描かれ、頭部には「金口(令")」と記されている。裏面には顔の輪郭はないが、眉・目・鼻が描かれ、中央には「大國」と描かれている。どちらも目の瞳が描かれていないところに特徴がある。人面を墨書きした石の類例は、杉之森遺跡〔新潟県教委 1976〕で川原石の両面に男女の戲画が描かれた例があるが、顔の表現もかなり異なり直接的な関連性は認められない（新潟県立歴史博物館 戸根与八郎氏 浅井勝利氏のご教示による）。

砾石 全長 13.6cm、重量 1,243g の大型品（545）と 6～8cm 前後、重量 100～200・400g 前後の小型～中型（535～545）タイプのものがある。石材は白色系の凝灰岩がほとんどである。形状は直方体であったと見られるが、使用により砥面が湾曲しているものが目立つ。544 は木器集中地点（SX30）から出土していることから、中世に所属するものと考えられる。先端部に被熱痕が観察できる。

軽石製品 全長 9cm、重量 46g の研磨痕のある軽石製品である。表面には刃物の痕と見られる線状痕が数条見られる。

8 鍛冶関連遺物（図版 48～547～554、87～555・556）

羽口 547～549 は羽口の先端部で形状は断面円形を呈する。いずれも外径 5～6cm、内径 2cm ほどの法量である。550～554 は体部片で断面円形のものと多角形のものが見られる。

鉱滓 包含層および溝から鉱滓が出土している。総重量にして 21kg、純点数 70 点に昇った。図版 87 の 555・556 は形状から楕円形鉱治滓と見られる。

第5章 自然科学分析

竹原 弘展

1 はじめに

山田郷内遺跡では中世の鍛冶工房施設が検出されている。鍛冶工房跡より出土した鉄滓 5 点について、断面を観察・分析した。

2 試料と方法

分析対象試料は、山田郷内遺跡鍛冶工房跡より検出された鉄滓 5 点である。それぞれ、試料No1・2 は微小な球状、試料No3・4 は薄い微小な薄片状、試料No5 は楕円形を呈する。

試料は、まず法量、色調、着磁力を調べ、肉眼観察による簡単な所見を記録した。色調には、標準土色帖を用いた。着磁力は、直径 30mm のリング状フェライト磁石を使用し、強弱を 5 段階表示した。

続いて、試料断面の観察・分析を行った。まず、写真撮影した後試料を樹脂に包埋した。樹脂には注型用高透明エポキシ樹脂を使用した。5 点のうち、試料No5 は一部を岩石カッターで切り取った後、それ以外は試料が微小なため丸ごと包埋している。包埋試料はディスクオーブンで研磨した後、カーボランダムの #3000、ダイヤモンド粒子の 1μm の頃で研磨し、観察・分析面とした。観察・分析には、走査電子顕微鏡 JSM-5900LV (日本電子テクニクス株式会社製、以後 SEM) および付属するエネルギー分散型 X 線分析装置 JED-2200 (検出器はスーパーミニカッブ EDS 検出器 EX-54130MSK で検出可能元素は B~U、以後 EDS) を使用した。試料は予めカーボン蒸着を施し、導電性を持たせた。組織観察には反射電子の組成像を用い、相ごとに定性・簡易定量分析を行い、さらに元素マッピングを実施した。

3 結果および考察

各試料の法量、色調等を表 1 に、写真、分析結果を図版 1~5 および表 2 にそれぞれ示す。

・試料No1 (図版 1)

直径 2.4mm のやや歪な球状である。色調は黒褐色を呈し、磁着は弱い。断面の全体像 (図版 1-(2)) を見ると、中心の空隙周囲の明色層、微細な樹枝状結晶が円形にある層、最外部の歪な中間色の相にやや暗い相とやや明るい相がブロック状に混ざる層の大きく 3 層に分かれる。

中心の空隙の周囲の明色の層を定性・簡易定量分析を行った結果、Fe が多く検出された。続いて、樹枝状組織のある層を分析したところ、ここでも Fe が多く検出された。この微細な樹枝状組織はウスタイト (FeO) と思われる。なお、この層の暗色部は空隙となっている。最外部の歪な層では、Na、Al、Si、K、Fe が検出され、元素マッピングでも見られるように Fe が全体に浸透し、ブロック状の鉱物が混じっている。この層は試料生成後に土砂が鉄分の浸透により二次的に付着したものと思われる。

粒状滓では、一般的に鍛冶滓に類似する組織が観察される。当試料においても微細樹枝状ウスタイトが見られることからおそらくは粒状滓の一種であろう。

・試料No2（図版2）

直径2.1mmの球状である。色調は暗灰色を呈し、ガラス光沢が見られる。磁着は極めて弱い。断面全体像を見ると、中心に大きな空隙があり、周囲も随所に気孔が見られる。全体が非晶質で、結晶組織は特に観察されなかった。定性・簡易定量分析結果もSiが多くを占め、Feは10%程度と少ない。鉄分が少なく、結晶の晶出がなかったガラス質の粒状滓と思われる。

・試料No3（図版3）

厚さ0.5mmの微小な薄片である。色調はくすんだ黄褐色を呈す。磁着はかなり弱い。全体的にSiを中心にしてNa、Al、K、Ca等を主に含んでいる。ところどころ明色粒が見られ、その明色粒からFeとTi、Mn等が検出される。磁着があるのはこの箇所が原因と見られる。

鍛造剥片を想定して分析に供したが、断面を分析すると、Siが多く、Feはかなり少ないと見られ、鍛造剥片とは異なり、粘土の類が熱を受けて生成したものかと考えられる。

・試料No4（図版4）

厚さ0.9mmの微小な薄片である。くすんだ黄褐色を呈す。磁着は弱い。これも、試料No3と同様にSi、Na、Al、K等を主に含む。場所によってはSiのみしか検出されない箇所もあった。これもところどころにFeとTiが検出される明色粒がある。

No3と同じく、鍛造剥片とは異なり、被熱した粘土の類であろう。

・試料No5（図版5）

重さ111.7gの楕形である。破面は3面あり、暗青灰色を呈す。磁着はやや強い。断面をSEMで観察したところ、図版5-④～⑥のようになつた。全体的には④と⑥の下半分や⑤のように、明色、中間色、暗色の3相があり混じった箇所が殆どを占めており、局的に④と⑥の上半分に見られるような、明色の相のみが大きく成長したような箇所が見られた。

統いて、⑥の像を得た箇所で各相の定性・簡易定量分析および元素マッピング分析を行つたところ、⑦～⑨および表2の結果を得た。明色部（⑦・⑧）はいずれもFeが殆どを占めており、ウスタイト（FeO）と思われる。中間色部（⑨）はFeに加えてSiもよく検出されており、ファイアライト（ $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）である。暗色部（⑩）はSiを中心としたAl、Fe等を含む素地となるガラス質である。また、断面全体を通して、金属鉄は確認されなかった。

楕形の形状と、ウスタイトが全体的に多く観察されることから、楕形鍛鍊鍛治滓の可能性が高いと思われる。また、すでに製錬を経てTiの量が少なくなつてると見られ、原材料が砂鉄か鉄鉱石かの区別は鍛鍊鍛治滓からは困難である。

4 終わりに

山田郷内遺跡より出土した鐵滓について、断面の観察・分析を行つた。その結果、鍛鍊鍛冶の初期に発生する粒状滓が確認された。粒状滓は「鐵冶作業において凹凸を持つ鐵素材が鐵冶炉の中で赤熱状態に加热されて、突起部が溶け落ちて酸化され、表面張力の関係から球状化したり、赤熱鉄塊に酸化防止を目的に塗布された粘土汁が酸化膜と反応して、これが鍛打の折に飛散して球状化した微細な遺物」とされてお

り（大澤・鈴木 2005）、鍛錬鍛冶作業が行われていたことの証拠となる。また製鉄原料については、試料が鍛冶滓であったため識別は困難であった。

参考・引用文献

- 大澤正己・鈴木福徳（2005）中道西山東山遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査。中道西山東山遺跡、第 5 章第 1 節、149-173、財団法人 烏取県教育文化財団 埋蔵文化財センター
- 窟田敬郎（1983）考古学ライブラリー 15 製鉄遺跡、ニューサイエンス社
- 吉岡康暢他（1994）国立歴史民俗博物館研究報告第 58 集 日本・韓国の鉄生産技術《調査編 1》，国立歴史民俗博物館
- 吉岡康暢他（1994）国立歴史民俗博物館研究報告第 59 集 日本・韓国の鉄生産技術《調査編 2》，国立歴史民俗博物館

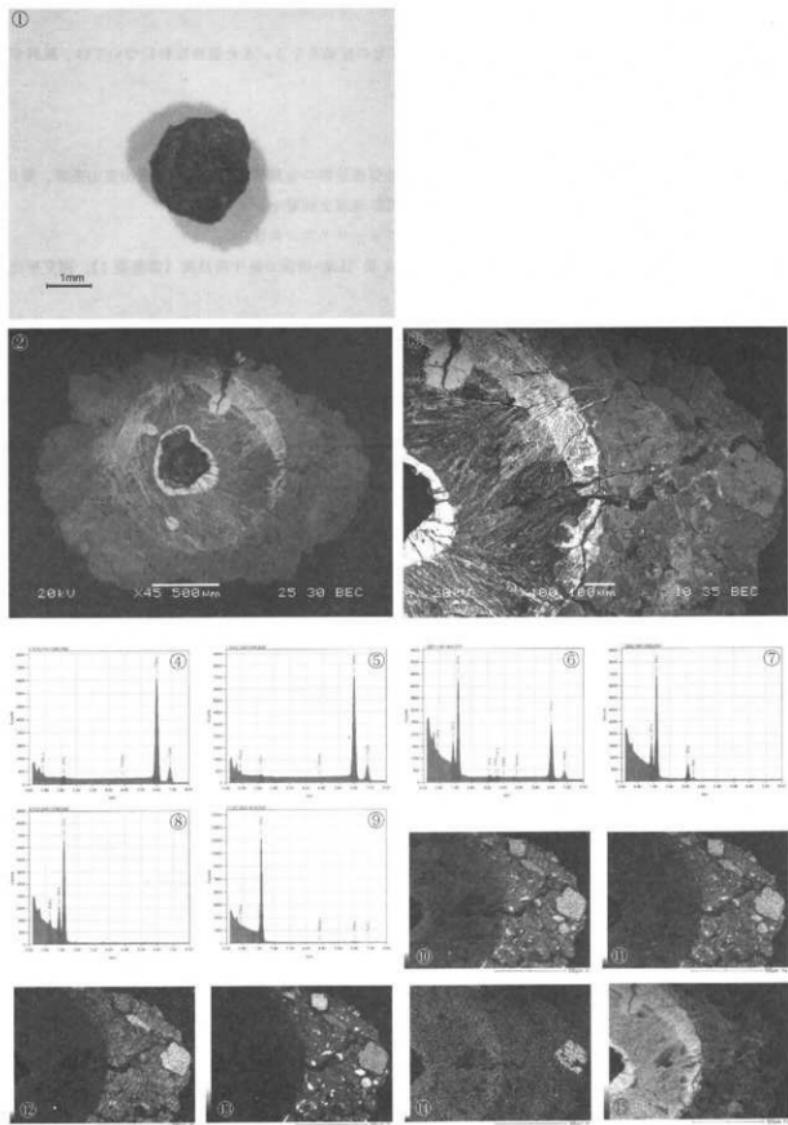
表 1 試料一覧

試料No	出土遺構	出土位置	寸法(mm)、重量(g)	色調	着磁力	肉眼観察所見
1	SB02	5D	ø2.4、0.013	10YR3/1黒褐	2	やや粗な球状、気孔有り
2	SB02	5J	ø2.1、0.004	N3/暗灰	1	球形、気孔有り、ガラス質を呈し光沢がある。
3	SB02	5I	3.5×3.1×0.5、0.006	10YR5/4にぶい黄褐	1	微小な斜片状、両面とも若干の凸凹有り、気孔有り。
4	SB02	5I	3.7×3.5×0.9、0.012	10YR5/3にぶい黄褐	2	微小な斜片状、両面とも若干の凸凹有り、気孔有り。
5	覆土（黑色炭化層）		56×55×29、111.7	表面10Y4/2オリーブ灰、地5B3/1暗青灰	4	被覆13mm。底面の凹凸が激しい。気孔は底面に多くある。上面は平滑。

表 2 簡易定量結果

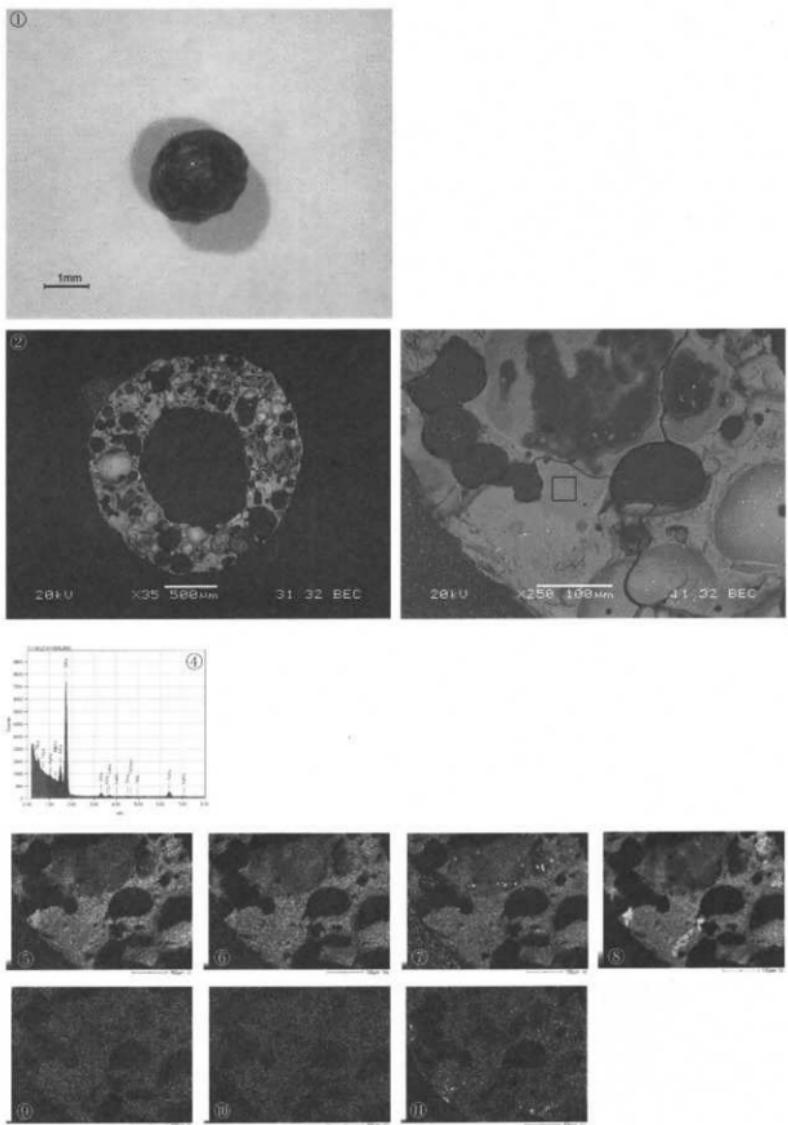
試料No	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	FeO	Total
④	—	—	—	1.05	—	—	—	—	98.95	100.00
⑤	—	—	—	0.77	—	—	—	—	99.23	100.00
⑥	—	—	10.30	39.06	0.56	0.39	—	—	49.69	100.00
⑦	—	—	16.27	72.09	11.63	—	—	—	—	99.99
⑧	6.34	—	18.57	75.08	—	—	—	—	—	99.99
⑨	—	—	—	98.26	—	—	—	—	1.74	100.00
2	2.46	1.28	11.74	70.27	2.40	1.04	0.63	—	10.19	100.01
3	4.06	—	17.55	72.91	2.59	1.95	—	—	0.95	100.01
⑥	—	—	1.42	1.38	—	—	5.10	3.66	88.44	100.00
⑤	2.36	—	15.60	72.42	7.11	—	—	—	2.51	100.00
4	6	—	—	100.00	—	—	—	—	—	100.00
⑦	—	—	0.82	1.31	—	—	5.54	4.78	87.56	100.01
5	⑧	—	—	0.33	0.58	—	—	—	99.09	100.00
⑨	—	—	0.12	0.57	—	—	—	—	99.31	100.00
⑩	1.34	—	16.33	45.10	6.30	3.41	—	—	27.52	100.00

数字は質量%、—は検出できず



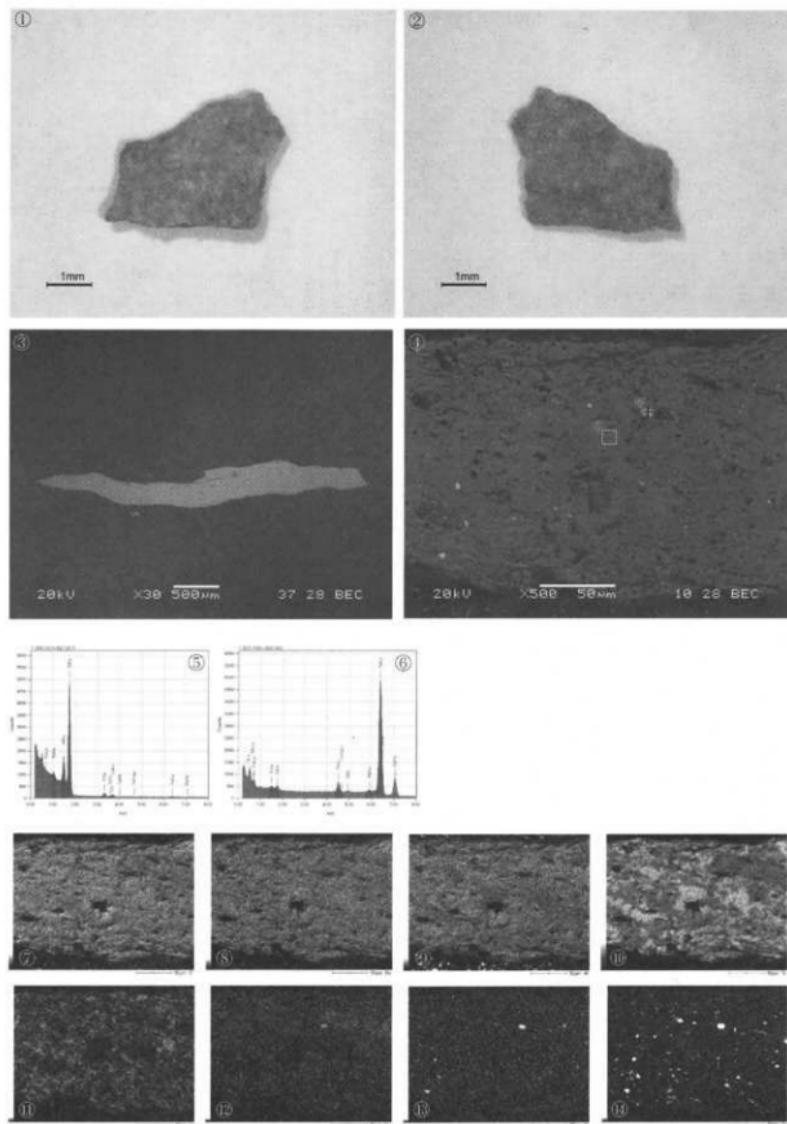
図版1 試料No.1観察写真・分析結果

① 全体像、②・③ SEM反射電子組成像② $\times 45$ ③ $\times 100$ 、④～⑬ ③+字点のEDSスペクトル図、
⑭～⑯ ③の元素マッピング像⑭O⑮Na⑯Al⑭Si⑮K⑯Fe



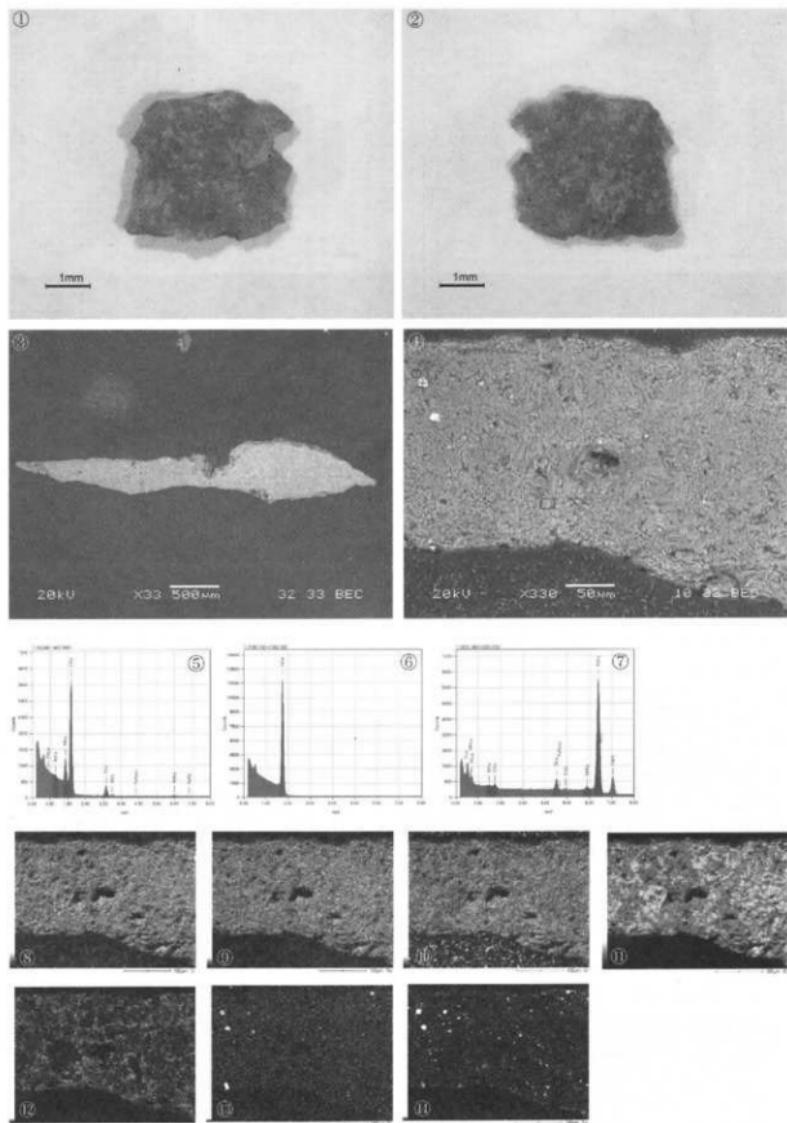
図版2 試料No.2 観察写真・分析結果

① 全体像、②・③ SEM反射電子組成像② $\times 35$ ③ $\times 250$ 、④ ③枠内のEDSスペクトル図、
⑤～⑪ ③の元素マッピング像⑤O⑥Na⑦Al⑧Si⑨K⑩Ca⑪Fe



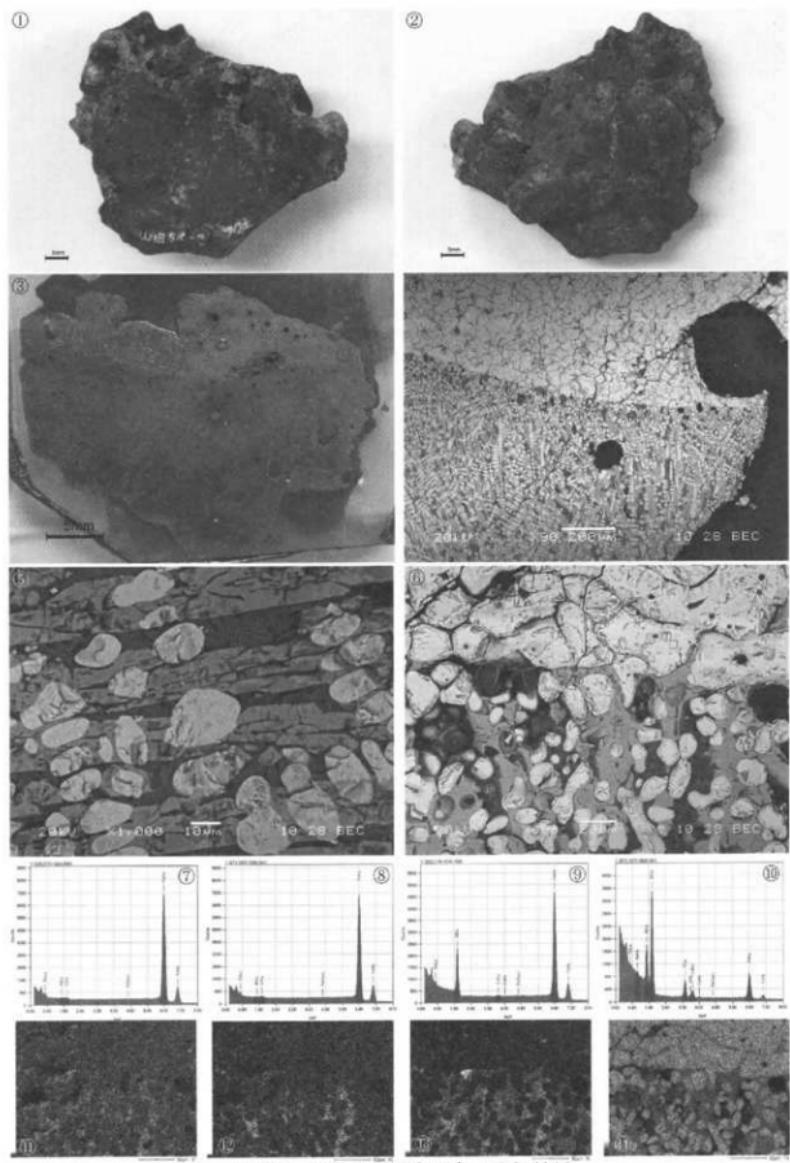
図版3 試料No.3 観察写真・分析結果

①・② 全体像、③・④ SEM反射電子顕微鏡像③×30④×500、⑤・⑥ ④枠内または十字点のEDSスペクトル図、
⑦～⑭ ④の元素マッピング像⑦O⑧Na⑨Al⑩Si⑪K⑫Ca⑬Ti⑭Fe



図版4 試料No.4 観察写真・分析結果

①・② 全体像、③・④ SEM反射電子組成像③×33④×330、⑤～⑦ ④枠内または+字点のEDSスペクトル図、
⑧～⑪ ④の元素マッピング像⑧O⑨Al⑩Si⑪Ti⑫Fe



図版5 試料No.5 観察写真・分析結果

①・② 全体像、③ 断面全体像、④～⑥ SEM 反射電子組成像④×90⑤×1000⑥×600、
⑦～⑩ ⑥枠内のEDSスペクトル図、⑪～⑯ ⑥の元素マッピング像⑪O⑫Al⑬Si⑭Fe

第6章　まとめ

1　遺構について

山田郷内遺跡で検出された遺構は、掘立柱建物2棟、ピット、土坑、溝、水田（畦畔群）のほか遺物集中域が2か所確認された。調査区西側丘陵部の平安時代のピット群、第3確認面の古墳時代の溝・水田遺構のほかは14～15世紀を中心とした遺構群である。

特に周溝を伴う掘立柱建物（SB02）は、床面に礫を敷いた部分があることや、覆土に炭層・粒状滓などの鍛冶関連遺物を有する点から小鍛冶を行った工房跡と考えられる。前章のとおり自然科学的分析による鍛造洞片こそ検出できなかったが、鍛練鍛治の初期に発生する粒状滓や椀形鍛錬鍛治滓が存在することが判明した。遺物は覆土から15世紀の陶磁器、土器が出土している。SB02の南側に存在する水田群はこれ以外に重複した遺構が検出されていないため、ほぼ同時期に並存したものと思われる。居住域の中心をのちの胸林集落となる調査区北西側の丘陵沿いに求めるとすると、本調査区は集落の南端に位置し鍛冶工房が営まれたことになる。

次に、明確な掘り込みが検出されなかつたが、調査区北側に多量に木製品を出土した集中域（SX30）が存在する。主な出土遺物は11世紀後半から14世紀代までの年代幅を持っており、断続的に廃棄行為等が行われていたようである。出土遺物には呪符や船形・刀形などの形代、箸状木製品、漆器、仏具のりん、刀子、鎖（藤目）のほか柱状高台皿や小皿が見られる。これらは呪術用具としての利用も考えられることから、日常的な呪術や信仰の場が形成されていた可能性が高い。また、第3章で述べたとおり丘陵上段に存在した押积寺の宝篋印塔の相輪は、戦国末期に位置付けられ少なくとも中世末期には寺院が存在した可能性があり、この集中域との関連が注目される。

2　遺物について

（1）縄文時代から古代

本遺跡出土の縄文時代の遺物は晩期の土器と石器がわずかに出土したのみで、遺跡の様相は不明確である。ただ島崎川流域における晩期の遺跡は、後期以降の増加傾向の中で捉えられ、大武遺跡・奈良崎遺跡・姥ヶ入遺跡・十二遺跡・京ヶ入遺跡・横瀧山廃寺跡・松葉遺跡・山王B遺跡などで確認されている。いずれも沖積地に沿った丘陵緩斜面部に立地しており、本遺跡の遺物はこうした主要な遺跡の活動領域の一端を示すものと考えられる。

弥生時代から古墳時代では、一定量の出土を見るが遺構に伴う遺物で同化できるものはなかった。恐らく居住域は周辺の丘陵緩斜面にあったと考えられるが、遺物の出土状態から見て廃棄したものとは考えにくい。今後は集落存在の究明が課題となるだろう。

古代では、奈良・平安時代を中心に須恵器・土師器・灰釉陶器が一定量出土している。掘立柱建物は確認されていないが墨書き器8点や漆容器として使用された無台坏などが出土していることから、一般集落とは異なり、近接する八幡林遺跡と何らかの関連性を有する可能性がある。

(2) 中世

a. 中世土器・陶磁器の受容とその変遷

中世の土器・陶磁器は第4章4で述べたように土師器を主体とし、珠洲焼・越前焼・瀬戸美濃焼などの国産陶器、青磁・白磁などの輸入磁器がある。ここでは本遺跡における中世土器・陶磁器の受容と変遷のあり方を年代別に概観することにする。

まず11世紀後半から末にかけてロクロ成形の土師器皿(273)がわずかであるが確認され、12世紀に至ると出土量が増加する。これと併行して12世紀の年代幅に収まる白磁(碗II・IV類や瓶類など)が数点出土している。珠洲焼の中にはI期(12世紀中葉～末)に属する甕(388)や鉢(246)・水注(408)もごくわずかではあるが出土しており、これらが貯蔵や調理などの役割を果たしていたと考えられる。12世紀末には、割画文の青磁碗(312・313)が数点見られる。13世紀後半以降、珠洲焼(III期)が徐々に増加し始め日常器種の主体を占めるようになり、運弁文の青磁碗(315・316)・坏(314)も見られるようになる。瓷器系陶器では越前焼・产地不明の甕(415)が受容されている。また、点数はわずかであるが既に古瀬戸前期様式(12世紀末～13世紀後葉)の瓶類(200・240・241・268など)が存在することは注目される。土師器ではつくねの小皿が主体を占めるようになり、出土量は引き続き一定量が認められる。14世紀では珠洲焼と青磁が定量みられるが、中世土師器は激減する。鍛冶工房が営まれた15世紀には古瀬戸後期様式の製品が増加し、鉢・碗・瓶類といった多くの日常器種が受容される。青磁は出土数が増加し碗(317・318・320など)・皿(324・325)のはか盤(198)・香炉(257)といった優品も見られる。一方、珠洲焼は擂鉢・甕に限定され15世紀後半(VI期)を最後に見られなくなる。越前焼は擂鉢(410)・甕(412・413など)が少量流入している。16世紀には瀬戸美濃の大窯製品が主体となり、16世紀末の中国製青花は1点のみ確認される。一方、胎上目・砂目の肥前系陶器がこの頃新たに出現する。17世紀以降は瀬戸美濃焼に代わり肥前系陶磁器が日常器種の主体となる。

	白磁	青白磁	土師器	珠洲焼	青磁	瓷器系	越前焼	信楽焼	瓦質土器	青花	瀬戸美濃	肥前系陶磁器
11C												
12C	■	■	■									
13C		■	■		■							
14C			■	■								
15C							■	■	■		■	
16C										■	■	
17C												■
18C												
19C												

第9図 山田郷内遺跡出土土器・陶磁器の変遷

b. 中世土師器について

県内における中世土師器の編年は近年良好な資料が増加したこともあり、品田高志氏【品田 1999】、水澤幸一氏【水澤 2005】らにより着実に整備されつつある。中世土師器編年研究における県内の主要遺跡は、上越市至恵寺遺跡【水澤・鶴巻 2003】・一之口池跡東地区【新潟県教委ほか 1994】、馬場屋敷遺跡【白根市教委 1984】、胎内市江上館跡【中条町教委 1993~1997】・下町・坊城遺跡【中条町教委 1996~2005】などが挙げられる。また北陸地方における編年は、資料の蓄積により田嶋 1986・四柳 1997・宮田 1997など多くの論考があり、県内の編年でも参考にするところが多い。本遺跡出土中世土師器の年代は、概ね 11 世紀後半から 15 世紀に位置付けられるが、本資料は造構一括資料ではないため、遺跡全体の傾向として器種ごとに可能な限り法量分布を示し年代比定の客観的根拠としたい。

まずクロ成形土師器であるが、多くが底部破片であり他遺跡との比較対象になるものが少ない。器高・口径のわかるものは 273・342~344・351 である。273・342~344 は口径 9 cm 前後、器高 3 cm 以下で底部がやや厚めで口縁部が直線的に伸びる小皿で、11 世紀後半~末に位置付けられる。

351 は口径 17.3cm、器高 6.1cm、底径 8.2cm の柱状高台皿で大型の部類に入る。身が深めで直線的に体部が開き外反する口縁部や肥厚した柱状高台が特徴的な土器である。国内出土の柱状高台について考察した八尋典氏によれば、このタイプは柱状高台环（輪）A 類とされ、従来の皿形に替わって主体となる新しい器形であるとしている。このタイプの出現を柱状高台土器の大きな画期（「転換期」）とし、地域間で微妙な時期差が存在するが概ね 13 世紀前後に全国的な変化が起こったと位置付けている【八尋 2001】。北陸地方の編年【田嶋 1986・四柳 1997・宮田 1997】では、低い棒状の高台から大型・内厚で掘部が広がるものへと変化しており、11 世紀中頃から 12 世紀後半頃の年代が示された点も踏まえると、本資料もこの時期に相当するものと考えられる。13 世紀以降では 220（13 世紀後半）や 373（15 世紀）のはかは断片的で、出土点数は少數である。

ところで、本遺跡で掲載した柱状高台は底径 3.4~11.2cm までの幅をもつが、少なくとも 29 個体が確認されている。底径 4~8 cm 代が主体であるが、4 cm・7 cm 代が特に多く 11 cm 代の大型品も 1 点ある。柱状高台皿の県内における出土はごくわずかであり、燕市有馬崎遺跡【前山 1997】、加茂市青海神社遺跡【坂井 1994・伊藤 2000】、新潟市山木戸遺跡【新潟市 1994】、至徳寺遺跡【水澤・鶴巻前掲】で数点の出土を見るのみである。このような状況の中で、本遺跡の多量な柱状高台の出土は特異な状況といえよう。

柱状高台の使用方法は①灯明皿または蠟燭立て、②儀式のための主たる器、③灯明・儀式などの補助的な器とされ、何らかの宗教または儀礼のために使用された可能性が指摘されている【八尋前掲】。有馬崎遺跡 E・4・t 区Ⅲ層では柱状高台皿 5 個体が小皿と共に出土し、一括廃棄された可能性が指摘されており注目される【前山前掲】。また、本遺跡出土の柱状高台についても、祭祀の痕跡が見られる本器集中地點（SX30）の出土資料があり、有馬崎遺跡と同様な位置付けをすることは可能であろう。

次に、てづくね成形土器では口径 8.0~15.6cm、器高 1.3~3.6cm の範囲にあり、図化できたものは 34 個体である。これらの土器は水澤氏の編年【水澤 2005】によれば、大別して 13 世紀前半以前、13 世紀後半、14 世紀に位置付けられる。13 世紀前半以前では、小型（口径 9 cm 前後、器高 2 cm 以下）・大型（口径 14 cm 前後、器高 3.5 cm 前後）が確認され、大型口径はこの時期に限られるという。13 世紀後半には口径が縮小傾向にあり、器高はほぼ同様であるがやや深めのタイプも見受けられる。14 世紀では浅身のもの（口径 8 cm、器高 1.3 cm）と体部が直線的に立ち上がり口縁端部が尖り気味のもの（口径 12 cm、器高 3 cm 前後）が確認される。本遺跡では 3 個体確認されるが、県内でも同様で良好な資料は少數である。

3 「東司触桶」墨書き曲物について

山田郷内遺跡出土遺物の中に、比較的小振りの木製曲物桶が含まれていた。この桶を今回、肉眼及び赤外線カメラを用いて熟観したところ、桶の円周を四等分する位置に「東」「司」「触」「桶」の四文字があることが判明した（ただし、「東」は一画目が欠損している）。

東司とは、仏教寺院、特に押宗寺院内の便所のことである。伽藍の東側に位置することが多いことから来る名称である。京都東福寺には、伽藍南東の一角に室町時代の東司が遺っており、国指定重要文化財となっている。

日常も修行と考える僧侶の生活においては、東司での作法も細かく定められていた。史料によって細部に異同があるが、道元の『正法眼藏』や実道恵仁の『初心行護鈔』等を総合すれば凡そ以下の通りである。

すなわち、用を足そうとする僧侶は、触桶の置き場所におもむいて、杓で触桶に水を酌み、これを持って廟に入る。触桶の水で便器を軽く濡らし、一旦桶を置いて便器にまたがってしゃがみ、用を足す。その後、籌木あるいは紙を用いた後、触桶を取り、そこから手のひらに水を受け、便器に付着した大小便を洗う。洗い終わったら触桶を一旦置き、籌木あるいは紙で洗った部分をぬぐい乾かす。こうして清めた後は、再び桶を持って出て、桶を元の場所に戻す。このように、触桶は終始重要な役割を果たしている。

今回判明した桶は、まさにこれら諸史料にみえる「触桶」そのものと見てよいだろう。注目すべきは、触桶はもともと、便器のある空間に常置されているものではなく、別の棚から僧侶が持つて入るものであったという点である。この桶にわざわざ「東司触桶」と明記されていることは、この点と関わるのかもしれない。なお、『正法眼藏』では当該の桶を「淨桶」と称している。同書では籌木について、使用前を「淨」、後を「触」と区別して形容するので、「触桶」とは一旦使用したことを示す墨書きと考える余地もあるが、直接汚れる籌木とは異なって複数回使用するものと思われるが、その可能性は低く、便所用の桶を区別する意図と思われる。

いずれにしても、正式の作法で排泄行為を行う本格的寺院で使用されていた物であることは疑いなく、とすれば、その寺院の位置や名称などが問題となる。現在のところ、山田郷内遺跡からは、明確な寺院遺構は発見されていない。しかし、同地には押枳寺という廃寺があったとされ、その関連と言われる石塔群も今に残る。また、山田郷内遺跡は繩文～江戸時代に至る複合遺跡だが、鎌倉時代の祭祀遺物のほか、同時期の仏具（りん）が出上している。今回の触桶も、これらの宗教施設の便所で使用されていた可能性も考えられる。

寺院の便所で使用する用具としては、律宗以外では律宗などの寺院で使用されていた「淨瓶」、「触瓶」がある。この「淨瓶」、「触瓶」の使用方法は「淨桶」、「触桶」と同様であった。道元が中国から持ち帰った押宗寺院の生活の指導規範書として「押苑清規」（1103年成立）がある。同書によれば、中国で律宗はかつて律宗の寺院に間借りしていたとある。この記述によれば、律宗寺院の便所で使用されていた「淨瓶」、「触瓶」などの道具が、律宗の便所での道具として取り入れられたことが想像される。日本では、便所で用を足したあと、きれいにする用具が「瓶」から「桶」に変化したと思われる。したがって、便所で使用する「淨桶」、「触桶」は律宗の寺院に限られた道具では必ずしもない。

とはいえ、桶に書かれた「東司」の文字は律宗に由来を求める用語であることや、『正法眼藏』の上記部分は1239年の述であり、桶自体の年代については慎重を期することとして後考を俟ちたいと思う。

（新潟県立歴史博物館 藤森健太郎・駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室 菅川義孝）

要 約

- 1 山田郷内遺跡は新潟県長岡市島崎に所在し、島崎川左岸の標高約 16.5m の丘陵裾部分に立地する。
- 2 調査は一般国道 116 号和島バイパス建設にともなう発掘調査である。一次調査は昭和 63 年度、二次調査は平成 2 年度に実施し、調査面積は 2,800 m² である。
- 3 遺物は縄文～江戸時代までのものが出土しているが、中世の遺物が多量に出土した。
- 4 主な遺構は、古墳時代（溝 2 条・集石遺構 1 基・水田）、平安時代（ビット群・土坑 2 基）、中世～近世（鍛冶工房跡 1 棟・井戸 1 基・土坑 3 基・溝 14 条・水田・廐棄場）が検出された。特に、中世では集落の外縁部に水田とともに鍛冶工房が営まれていた状況がうかがえる。
- 5 鍛冶工房跡とされる SB02 は、2 間（4.4m）×3 間（6.6m）の総柱の掘立柱建物である。周囲には幅 1 m 前後の溝を 8.5m×11m の規模で巡らしている。床面には被熱した配石が 2 か所認められる。炭化物・鉱滓などを分析した結果、粒状滓・椀形鍛錬鍛治渣であることが判明し、この施設が鍛錬鍛冶を行った工房であることを裏付けた。床面覆土から青磁・珠洲・瀬戸・中世土師器が出土し、概ね 15 世紀頃に位置付けられる。
- 6 木器集中地点の SX30 では、11 世紀後半～14 世紀頃の遺物が出土している。土師器（柱状高台や小皿）、陶磁器、漆器などの日常用具のほか、刀子・環・りん・祝符、形代（舟形・馬形・刀形）、人面墨書きといった呪術・信仰にかかる遺物も出土したことから、精神生活としても重要な場であったと考えられる。中世土師器では柱状高台が 29 個体以上出土しており、有数の出土量である。本器種は儀礼的な用途が推定されており [八紘 2001]、この点も SX30 の性格を裏付けている。
- 7 曲物（494）の周囲には「東司触桶」と墨書きされており、仏教寺院の便所で使用された洗浄用具であったことが判明した。これは『正法眼藏』などに記されるように、本格的寺院において正式な作法で使用された「触桶」そのものと考えられる。このことから、時代は不明であるが遺跡周辺に寺院が存在した可能性を示唆する。

引用参考文献

- 伊藤秀和 2000 「加茂市青海神社遺跡出土の柱状高台皿について」『越佐補遺物』第5号 越佐補遺物の会
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』NO.2
- 小野正敏 1982 「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』NO.2
- 春日真実 1994 「第VI章まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区』新潟県教育委員会 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1997 「越後における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』第7号
- 桑原錦郎 1988 「駒林觀音尊像記」(プリント)
- (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 1995 「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」平成7年度
- (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 1996 「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」平成8年度
- (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 1997 「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」平成9年度
- (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団 1998 「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報」平成10年度
- 坂井秀弥 1990 「新潟県三島郡と板町の製鉄遺跡」『新潟考古』第1号 新潟県考古学会
- 坂井秀弥 1994 「加茂市青海神社遺跡の土器」『新潟考古学談話会会報』第14号
- 並澤正史・水澤幸一 2001 「伝至徳寺遺跡の遺物様相~中世前半を中心として」『上越市史研究』6
- 並澤正史 2003 「(古代)時代概説」『上越市史』資料編2 考古
- 品田高志 1997 「第5章第2節 越後国における土師器の変遷と諸相」『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会 桂書房
- 品田高志 1999 「中世土師器」『新潟県の考古学』新潟県考古学会 高志書院
- 白根市教育委員会 1984 「馬場屋敷遺跡発掘調査報告書」
- 全国シンポジウム「中世窯業の諸相~生産技術の展開と編年~」実行委員会 2005 「発表要旨集・資料集」
- 田嶋明人 1986 「IV 第2節 9世紀後半から13世紀にかけての土師器の変遷」『漆町遺跡I』石川県立埋蔵文化財センター
- 田中靖 1989 「島崎川流域における弥生時代の遺跡」『新潟考古学談話会会報』第4号 新潟考古学談話会
- 寺泊町 1991 「寺泊町史」資料編1 原始・古代・中世
- 寺泊町教育委員会 1977 「横瀧山廃寺跡発掘調査報告書 第一次 越後國府・國分寺所在論への提言」
- 寺泊町教育委員会 1983 「横瀧山廃寺跡発掘調査報告書 第二次 昭和57年度調査報告」
- 寺泊町教育委員会 1985 「横瀧山廃寺跡発掘調査報告書 第三次 昭和58年度調査報告」
- 寺泊町教育委員会 1986 「横瀧山廃寺跡発掘調査報告書 第四次 昭和59年度調査報告」
- 寺泊町教育委員会 1987 「京田・太屋敷・日光畠遺跡発掘調査概報」
- 寺泊町教育委員会 1991 a 「太屋敷遺跡発掘調査報告書 一平成2年度の調査ー」
- 寺泊町教育委員会 1991 b 「五分一城跡発掘調査報告書」
- 寺泊町教育委員会 1992 a 「花立・坊山塚群発掘調査報告書 一平成3年度の調査ー」
- 寺泊町教育委員会 1999 「土手上遺跡」

- 寺泊町教育委員会 2000『寺泊町埋蔵文化財調査報告書 向屋敷遺跡』
- 寺泊町教育委員会 2004『新潟県寺泊町屋舎塚遺跡発掘調査報告書』
- 寺村光晴・久我勇 1960『寺泊乃おいたち 先史遺跡について』
- 中条町教育委員会 1993『中条町埋蔵文化財調査報告第2集 江上館I』
- 中条町教育委員会 1994『中条町埋蔵文化財調査報告第6集 江上館II』
- 中条町教育委員会 1995『中条町埋蔵文化財調査報告第8集 江上館III』
- 中城町教育委員会 1996『中条町埋蔵文化財調査報告第9集 下町・坊城遺跡・中倉遺跡ほか』
- 中条町教育委員会 1996『中条町埋蔵文化財調査報告第10集 江上館IV』
- 中条町教育委員会 1997『中条町埋蔵文化財調査報告第12集 下町・坊城遺跡II～川跡出土の遺物』
- 中条町教育委員会 1997『中条町埋蔵文化財調査報告第13集 江上館V』
- 中条町教育委員会 1999『中条町埋蔵文化財調査報告第18集 下町・坊城遺跡III～A地点の調査～』
- 中条町教育委員会 2000『中条町埋蔵文化財調査報告第20集 下町・坊城遺跡IV～B地点～』
- 中条町教育委員会 2001『中条町埋蔵文化財調査報告第21集 下町・坊城遺跡V～C地点・政所条遺跡群』
- 中条町教育委員会 2005『中条町埋蔵文化財調査報告第33集 下町・坊城遺跡IV～D地点・坊城館の調査～』
- 長岡市 1992『長岡市史』資料編I 考古
- 新潟市 1994『山木戸遺跡』『新潟市史』資料編I 原始・古代・中世・文化財
- 新潟県教育委員会 1976『焼屋敷遺跡 杉之森遺跡』
- 新潟県教育委員会 1978『新潟県埋蔵文化財調査報告書第14集 五分一稻場遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡東地区』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2000『新潟県埋蔵文化財調査報告書第97集 大武遺跡(中世編)』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2001『新潟県埋蔵文化財調査報告書第99集 堀越館跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2001『新潟県埋蔵文化財調査報告書第104集 梶子谷窯跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2002『新潟県埋蔵文化財調査報告書第116集 奈良崎遺跡』
- 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 2006『新潟県埋蔵文化財調査報告書第153集 大坪遺跡』
- 新津市教育委員会 2002『内野遺跡発掘調査報告書』
- 八峰興 2001『柱状高台考古』『中世土器研究論集』中世土器研究会 20周年記念論集 中世土器研究会
- 藤澤良祐 2005『日本の遺跡5 横戸窯跡群』同社
- 藤田剛・長谷川正 1996『和鳥村の地形・地質』『和鳥村史』資料編I 自然・原始・古代・中世・文化財
- 前山精明 1997『有馬崎遺跡』分水町教育委員会
- 水澤幸一 2004『至徳寺遺跡の中世後期土器(補遺)』『上越市史研究』第7号
- 水澤幸一 2005『越後の中世土器』『新潟考古』第16号 新潟県考古学会
- 水澤幸一・鶴巻康志 2003『至徳寺遺跡』『上越市史叢書』8 考古中・近世資料
- 宮田進一 1997『第4章第2節 越中国における土師器の編年』『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会 桂書房
- 森 隆 2003『富山県の中世土器(資料編)』一県東部・富山平野を中心とした地域における一 『富山考古学研究』
- 紀要 第6号 財團法人富山県文化振興財團 埋蔵文化財調査事務所
- 森田勉 1982『14～16世紀の白磁の分類と編年』『貿易陶磁研究』NO.2

- 与板町 1993 『与板町史』資料編上巻 原始・古代・中世・近世
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 西柳嘉章 1997 「第3章第2節 能登国における土師器の編年」『中・近世の北陸』北陸中良土器研究会 桂書房
- 西柳嘉章 1997 「第6章第3節 北陸の中世漆器」『中・近世の北陸』北陸中良土器研究会 桂書房
- 和島村 1996 『和島村史』資料編 I 自然・原始・古代・中世・文化財
- 和島村 1997 『和島村史』通史編
- 和島村教育委員会 1992 「和島村埋蔵文化財調査報告書第1集 八幡林遺跡」
- 和島村教育委員会 1993 「和島村埋蔵文化財調査報告書第2集 八幡林遺跡」
- 和島村教育委員会 1994 「和島村埋蔵文化財調査報告書第3集 八幡林遺跡」
- 和島村教育委員会 1995 「和島村埋蔵文化財調査報告書第4集 門新遺跡」
- 和島村教育委員会 1996 「和島村埋蔵文化財調査報告書第5集 門新遺跡外割田地区」
- 和島村教育委員会 1998 a 「和島村埋蔵文化財調査報告書第6集 松ノ脇遺跡」
- 和島村教育委員会 1998 b 「和島村埋蔵文化財調査報告書第7集 下ノ西遺跡 出土木簡を中心として」
- 和島村教育委員会 1999 「和島村埋蔵文化財調査報告書第8集 下ノ西遺跡II」
- 和島村教育委員会 2000 「和島村埋蔵文化財調査報告書第9集 下ノ西遺跡III」
- 和島村教育委員会 2001 「和島村埋蔵文化財調査報告書第10集 奈良崎遺跡」
- 和島村教育委員会 2002 a 「和島村埋蔵文化財調査報告書第11集 奈良崎遺跡II」
- 和島村教育委員会 2002 b 「和島村埋蔵文化財調査報告書第12集 宿屋塚遺跡」
- 和島村教育委員会 2003 a 「和島村埋蔵文化財調査報告書第13集 妙満寺跡」
- 和島村教育委員会 2003 b 「和島村埋蔵文化財調査報告書第14集 下ノ西遺跡IV」
- 和島村教育委員会 2003 c 「和島村埋蔵文化財調査報告書第15集 北野丸山遺跡」
- 和島村教育委員会 2005 a 「和島村埋蔵文化財調査報告書第16集 八幡林遺跡IV」
- 和島村教育委員会 2005 b 「和島村埋蔵文化財調査報告書第17集 門新遺跡 谷地地区II」
- 渡邊明和 1998 「第Ⅷ章 考察」『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書Ⅲ(分析考察編)』新津市教育委員会

別表1 遺構計測表

番号	地名	タリフ	通路の南北両端(古~新)	時代	構造面	平面	長さ(m)	幅(奥)	説明(他)	備考
9-10	S001	3-4	S011-S012-S001-S005	15-16世紀	壁・屋・廊	-	-	1.8-2.5	0.5-0.7	古代~近世の遺構出土
6-7	S002	48	S011-9-S001-S001	15世紀	壁・屋上階	-	6.60	5.40	-	古墳上施設、2階の施設は
9	S003	138-387	S005-S003-S001-S009	13-15世紀	瓦張上階	-	17.40	-	0.3-0.5	古代~近世の遺構出土
4	S004	3101-29, 30111	S004-S001	15-16世紀	壁・屋上階	-	壁R	-	0.30	複数の古墳用施設
10	S005	3104	S005-S007	15-16世紀	壁・屋・廊	-	壁R	-	0.25	複数の古墳用施設
9	S006	286-6	S008-S003-S001	13-15世紀	瓦張上階	-	壁R	-	0.40	0.10
8	S007	1810	S003-S007-S001?	15世紀以前?	壁・屋上階	-	壁R	0.92	-	遺物なし
8	S008	3101-386	-	15世紀以前?	瓦張上階	円柱	2.69	2.00	1.20	手筋受盤(古)
8	S009	110	S001-S009	15世紀以前?	瓦張上階	手筋受盤	円柱	0.68	-	遺物なし
11	S010	3101-12, 17	S010-S011-S013-S002	15世紀	壁・屋上階	-	壁R	-	0.60	0.30
11	S011	3015, 4011-12, 17	S010-S011-S013-S002	15世紀以前?	壁・屋上階	-	壁R	-	0.40	0.20
11	S012	401-3223	-	16世紀以前?	壁	-	壁R	-	0.40	0.12
11	S013	3101-15, 406-11	S010-S011-S013-S002	15世紀以前?	壁・屋上階	-	壁R	-	0.60	0.30
4-11	S014	48-4C	S014-S006?	15-16世紀	壁・屋・廊	-	-	-	-	青銅・鐵刀・金銀出土
4-10	S015	3200-3201-4516	S010-S005-S005-S114	15世紀以前?	壁・屋上階	-	17.40	-	2.20	0.45
4-10	S016	3101-4516	S010-S015-S005-S114	15世紀以前?	壁・屋上階	-	17.40	-	0.30	遺物なし
5-7	S017	31015	-	15世紀	壁・屋上階	円柱	0.90	0.90	-	遺物なし
8	S018	110	-	18世紀以前	瓦張上階	円柱	0.54	0.36	0.25	遺物なし
12	S019	329	-	古代	瓦張上階	円柱	0.60	0.60	0.13	遺物なし
20	S020	305-401	-	16世紀以前?	壁・屋上階	-	-	-	4.20	-
5-11	S021	106-173	S022-S021-S001-S020	古代から	瓦張上階	-	手筋受	1.1-1.6	0.15-0.30	遺物なし
5-11	S022	1014-25	S022-S021-S005	古代から	瓦張上階	-	手筋受	0.36-1.7	0.05	遺物なし
15	S023	3250-25	S023-S005	古墳時代	瓦張上階	手筋受	2.40	0.80	-	遺物なし
14	S024	266-11, 14-15	S024	古墳時代	瓦張上階	-	17.40	-	0.3-1.4	0.05-0.15
15	S025	109-15, 2011-13	-	古墳時代	瓦張上階	-	17.40	-	0.15-0.45	土塁跡出土
16	S026	118	-	古墳時代	瓦張上階	-	17.40	-	0.8-1.0	土塁跡出土
19	S027	105	-	手筋受	瓦張上階	円柱	17.40	0.80	0.90	手筋受・鐵刀・金銀出土
16	S028	3017-29-25, 302-5	-	手筋受	瓦張上階	-	-	-	-	ソルベの本日
3-11	S029	39-6C	-	11-12世紀	瓦張上階	-	-	-	-	木製品・土器等が遺物出土
17	S030	385-15, 296-6, 11-13	S022-S021-S001-S020	11-12世紀	瓦張上階	-	-	-	-	-

別表2 原始・古代遺物観察表

No.	地主位置	部位	時代	種類	標本	層位	地質	鉱土	色調 (S)	色調 (V)	日付	備考
1	2012	遺	漢文帝	罐之器	罐之器	11#	砂岩	灰	-	-	-	11月15日打開文 外觀又火
6	246	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	17.0	-	-	-	-	外觀又火
7	239	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	9.6	-	-	-	-	外觀又火
8	2310	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	13.4	-	-	-	-	外觀又火
9	239	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	16.6	-	-	-	-	外觀又火
10	238-19	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	16.0	-	-	-	-	外觀又火
11	2057-12	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	14.4	-	-	-	-	外觀又火
12	2012	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	21.6	-	-	-	-	外觀又火
13	239	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	14.4	-	-	-	-	外觀又火
14	237-13	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	14.4	-	-	-	-	外觀又火
15	2319	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	17.4	-	-	-	-	外觀又火
16	236	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	17.0	-	-	-	-	外觀又火
17	236	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	19.4	-	-	-	-	外觀又火
18	2519	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	21.0	-	-	-	-	外觀又火
19	2519	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	24.0	-	-	-	-	外觀又火
20	236	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	16.6	-	-	-	-	外觀又火
21	235-1-6	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	16.6	-	-	-	-	外觀又火
22	239	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	17.0	-	-	-	-	外觀又火
23	237-1-2	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	19.6	-	-	-	-	外觀又火
24	239	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	16.6	-	-	-	-	外觀又火
25	236	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	16.0	-	-	-	-	外觀又火
26	235-19	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	17.6	-	-	-	-	外觀又火
27	236-1-10	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	17.6	-	-	-	-	外觀又火
28	235-10	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	17.0	-	-	-	-	外觀又火
29	239	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	21.8	-	-	-	-	外觀又火
30	237-1-12	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	20.4	-	-	-	-	外觀又火
31	2319	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	16.8	-	-	-	-	外觀又火
32	235-1-6	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	25.0	-	-	-	-	外觀又火
33	2316	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	16.0	-	-	-	-	外觀又火
34	239-12	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	16.0	-	-	-	-	外觀又火
35	2310	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	-	-	-	-	-	外觀又火
36	239	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	-	-	-	-	-	外觀又火
37	235-1-1	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	12.4	-	-	-	-	外觀又火
38	236	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	12.6	-	-	-	-	外觀又火
39	235-1-12	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	17.0	-	-	-	-	外觀又火
40	236	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	12.4	-	-	-	-	外觀又火
41	236-1-6	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	9.0	-	-	-	-	外觀又火
42	236	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	11.0	-	-	-	-	外觀又火
43	236-1-11	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	10.6	-	-	-	-	外觀又火
44	236-1-7	遺	漢文帝	弦纹罐	弦纹罐	美	13.4	-	-	-	-	外觀又火

N.o.	孟子	部位	時代	類別	形質	變遷	數字	色澤(PF)	色澤(%)	口亞口	備考
63	387-12	目	古式・輪廓	古式・輪廓	直	11.4	-	灰	灰	灰	灰質地
68	2812	目	古式・輪廓	古式・輪廓	直	11.6	-	灰	灰	灰	灰質地
67	385-10	目	古式・輪廓	古式・輪廓	直	12.6	-	灰	灰	灰	灰質地
68	390	目	古式・輪廓	古式・輪廓	直	-	-	黑	黑	黑	黑質地
69	2814	目	古式・輪廓	古式・輪廓	直	13.2	25.2	5.6	黑	黑	黑質地
50	4-9	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	-	-	灰	灰	灰	灰質地
51	3812	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	12.0	9.0	9.5	灰	灰	灰質地
52	390	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	13.8	8.0	11.0	白+灰	白	白質地
53	2519	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	-	-	13.6	石	灰	灰質地
54	4-9	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	9.0	8.2	7.0	白	白	白質地
55	379	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	-	-	10.5	黄	黄	黃質地
56	4-9	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	-	-	10.6	灰	灰	灰質地
57	3810	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	-	-	10.0	白	白	白質地
58	3812	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	-	-	16.4	白	白	白質地
59	3824	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	-	-	10.0	褐	褐	褐質地
60	2586	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	-	-	12.9	白	白	白質地
61	2010	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	16.0	-	-	白	白	白質地
62	3295-11	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	-	-	11.6	白	白	白質地
63	390	口	古式・輪廓	古式・輪廓	直	-	-	11.6	白	白	白質地
64	2-9	目	生後後眼	生後後眼	平行	12.2	-	-	白	白	白質地
65	286	目	生後後眼	生後後眼	平行	9.4	7.4	3.6	白	白	白質地
66	38-41塊茎	V	占塊	占塊	平行	21.0	-	-	白	白	白質地
67	130	V	占塊	占塊	平行	24.0	-	-	白	白	白質地
68	286-11	V	占塊	占塊	平行	-	-	8.6	Imag	白	白質地
69	286-11	V	占塊	占塊	平行	-	-	6.5	炎+白	白	白質地
70	110-14-15	V	占塊	占塊	平行	-	-	8.6	細的粒	白	白質地
71	107	V	目	魚肉	直	16.4	2.5	-	灰	灰	灰質地
72	3816-15	V	魚肉	魚肉	直	16.1	2.8	-	白	白	白質地
73	2014-15	V	魚肉	魚肉	直	16.1	2.4	-	白	白	白質地
74	3810	V	魚肉	魚肉	直	16.4	3.4	-	白	白	白質地
75	286-11	V	魚肉	魚肉	直	16.2	-	-	白	白	白質地
76	386-11	V	魚肉	魚肉	直	16.3	-	-	白	白	白質地
77	210-15	V	平安	平安	直	15.0	2.7	-	白	白	白質地
78	214-15	V	平安	平安	直	14.6	3.4	-	白	白	白質地
79	229	E	平安	平安	直	13.8	2.5	-	白	白	白質地
80	3814-15	V	平安	平安	直	-	-	-	白	白	白質地
81	2519-15	V	平安	平安	直	14.2	-	-	白	白	白質地
82	2519	V	平安	平安	直	16.4	-	-	白	白	白質地
83	1815	V	平安	平安	直	14.0	2.9	-	白	白	白質地
84	2514-15	V	平安	平安	直	14.8	-	-	白	白	白質地
85	2514-15-286-11	V	平安	平安	直	14.6	-	-	白	白	白質地
86	3801-386	V	平安	平安	直	15.8	2.7	-	白	白	白質地
87	390	V	平安	平安	直	-	-	-	白	白	白質地

N.o.	地名	位置	時代	埋置	25倍	50倍	鏡面	底座	船上	色調(赤)	色調(青)	口径	備考
88	2513・18	V	飛鳥	須佐宮 石造坪	—	—	—	自	白	17.5cm×9.5cm	底盤へ少少	—	—
89	2519	N-V	飛鳥	須佐宮 石造坪	石造坪	13.4	3.7	9.7	白	須佐宮	底盤	—	—
90	S204	圓- \times -6.5	飛鳥	須佐宮 石造坪	石造坪	13.6	4.2	8.4	白	須佐宮	底盤	—	—
91	356-7	V	飛鳥	須佐宮 石造坪	石造坪	13.8	5.3	9.8	白	須佐宮	底盤	—	—
92	386	V	平安	須佐宮 石造坪	石造坪	13.0	3.8	10.2	白	須佐宮	底盤	—	—
93	486-11	B-V	飛鳥	須佐宮 石造坪	石造坪	14.6	6.7	8.9	白	須佐宮	底盤	—	—
94	256	II	飛鳥	須佐宮 石造坪	石造坪	14.4	7.7	8.6	白	須佐宮	底盤	—	—
95	3814・15	V	飛鳥	須佐宮 石造坪	石造坪	16.4	7.9	9.4	白	須佐宮	底盤	—	—
96	3211・34	V	飛鳥	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	14.4	4.7	—	黑	須佐宮	底盤	—	—
97	S204/Ho	圓土	飛鳥	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	14.2	—	—	黑	須佐宮	底盤	—	—
98	386-11	B-V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	—	—	7.0	白	須佐宮	底盤	—	—
99	386-2513	B-V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	—	—	8.0	白	須佐宮	底盤	—	—
100	386-2513-256-2	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	10.0	4.5	6.4	白・黑	須佐宮	底盤	—	—
101	2511	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	15.9	6.3	8.4	白	須佐宮	底盤	—	—
102	354-13	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	14.8	3.3	7.4	白	須佐宮	底盤	—	—
103	359-14	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	12.4	4.2	9.0	白	須佐宮	底盤	—	—
104	351-15	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	12.6	3.1	6.5	白	須佐宮	底盤	—	—
105	351-15/2512	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	12.6	2.8	9.0	白	須佐宮	底盤	—	—
106	25-25	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	11.6	2.7	7.2	白	須佐宮	底盤	—	—
107	280	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	13.4	2.8	7.6	白	須佐宮	底盤	—	—
108	314-15	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	10.8	3.3	7.4	白	須佐宮	底盤	—	—
109	314-15	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	14.0	3.2	9.6	白・黑	須佐宮	底盤	—	—
110	386-11	H	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	13.0	3.2	9.6	白	須佐宮	底盤	—	—
111	386-11/2510	V/V-N-V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	12.0	3.0	10.0	白・黑	須佐宮	底盤	—	—
112	38-6	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	12.8	3.6	8.8	白・黑	須佐宮	底盤	左	小品 圓形×2個
113	386	B-V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	12.3	3.1	7.8	白	須佐宮	底盤	右	小品 圓形×2個
114	386-11	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	11.6	3.1	7.1	白・黑	須佐宮	底盤	左	小品 圓形×2個
115	386-15-19-20	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	12.2	3.3	7.8	白	須佐宮	底盤	右	小品 圓形×2個
116	397	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	12.4	2.9	6.6	白	須佐宮	底盤	左	小品 圓形×2個
117	351-15	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	12.3	3.2	7.5	白	須佐宮	底盤	右	小品 圓形×2個
118	386	B-V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	13.0	6.2	9.2	白	須佐宮	底盤	—	—
119	3810	N-V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	12.2	2.9	7.6	白	須佐宮	底盤	—	—
120	386-15	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	12.2	2.9	7.5	白	須佐宮	底盤	左	小品 圓形×2個
121	386-15-19-20	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	11.8	3.3	6.6	白	須佐宮	底盤	右	小品 圓形×2個
122	386-14	1-B-V-N-V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	13.2	2.9	8.0	白・黑	須佐宮	底盤	左	小品 圓形×2個
123	387-8	B-V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	—	—	—	白	須佐宮	底盤	右	小品 圓形×2個
124	386-15-251-15	■■■	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	11.8	2.1	7.2	白	須佐宮	底盤	左	小品 圓形×2個
125	386-14-15-256-12	N-V/V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	12.6	2.6	8.4	白	須佐宮	底盤	右	小品 圓形×2個
126	386-7	N-V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	12.6	2.9	7.4	白	須佐宮	底盤	左	小品 圓形×2個
127	387-8	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	—	—	—	白	須佐宮	底盤	右	小品 圓形×2個
128	386-15	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	—	—	—	白	須佐宮	底盤	左	小品 圓形×2個
129	S203	圓土	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	—	—	—	白	須佐宮	底盤	右	小品 圓形×2個
130	3810	V	平安	須佐宮 石造坪	須佐宮 石造坪	11.8	3.9	8.8	白・黑	須佐宮	底盤	—	—

No.	西十松原	場所	時代	种类	直径	胸高	直径	胸高	直径	胸高	直径	胸高	直径	胸高	直径
174	2010-15	V	平安	1.袖筋	12.6	6.0	17.05	胸筋	2.8	3.5	12.6	6.0	17.05	胸筋	6
175	2011-14/2013	R~V	平安	1.袖筋	12.4	5.6	17.05	胸筋	3.5	5.6	16.0	—	17.05	胸筋	6
176	1810	V	平安	1.袖筋	16.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
177	2011-15	V	平安	1.袖筋	23.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
178	2011-14-15	V	平安	1.袖筋	21.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
179	2011-15	V	平安	1.袖筋	19.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
180	2010-16	R~V	平安	1.袖筋	20.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
181	2011-15	V	奈良	1.袖筋	13.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
182	2010-15	V	奈良	1.袖筋	16.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
183	2010	V	平安	1.袖筋	13.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
184	2011-19	Q	平安	1.袖筋	12.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
185	2006-7	R~V	平安	1.袖筋	13.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
186	1307-8	V	平安	1.袖筋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
187	大明	V	平安	1.袖筋	8.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
188	2011-15	V	平安	1.袖筋	14.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
189	2011-15	V	平安	1.袖筋	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
190	2011-15/2011	V	平安	1.袖筋	12.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
191	2011-15	V	平安	1.袖筋	14.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
192	2011-15	V	平安	1.袖筋	13.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
193	2011-15	V	平安	1.袖筋	13.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
194	2011-15	V	平安	1.袖筋	14.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
195	1807-8/2010-16	R~V	平安	1.袖筋	—	—	—	—	—	—	—	—	2 ~ 3 m@R	—	—

別表3 中近世遺物観察表

注：色・形態の括弧表示は種類の色調を示す。

N.o.	地點	部位	時代	鉢類	口徑	器高	底径	質地	色調(赤)	色調(青)	基面断面	ロクロ	備考
355	S801/4/06	甕	中世	須焰圓器	33.6	—	—	黑	赤(白)	赤(白)	直口	14	直口
157	S801/2/04	甕	五代	白磁	14.4	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
158	S801/2/05	甕上部/口部	五代	青磁	26.8	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
229	S801/2/05	甕	12世	青磁	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
200	S801/2/05/206	肩-V/Y	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
221	S801/2/05/205	肩-V/Y	後期	輪(火)免	24.4	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
202	S801/2/05/201	肩上面	後期	須焰	11.6	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
203	S801/2/05/202	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
314	S801/2/05/203	肩上面	後期	須焰	15.2	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
265	S801/2/05/205	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
206	S801/2/05/201	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
207	S801/2/05/201	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
208	S801/2/05/205	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
209	S801/2/05/205-15	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
210	S801/2/05/201	肩上面	後期	須焰	25.2	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
211	S801/2/05/205	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
212	S801/2/05/201	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
213	S801/2/05/205-7	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
214	S801/2/05/201	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
215	S801/2/05/203	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
216	S801/2/05/201	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
217	S801/2/05/203	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
218	S801/2/05/200	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
219	S801/2/05/203	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
220	S801/2/05/201	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
221	S801/2/05/203	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
222	S801/2/05/203	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
223	S801/2/05/201	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
224	S801/2/05/203	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
225	S801/2/05/201	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
226	S801/2/05/203	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
227	S801/2/05/204	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
228	S801/2/05/201	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
229	S801/2/05/205	肩上面	後期	須焰	—	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
230	S802	甕	五代	須焰	手碗	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
231	S802	甕	五代	須焰	瓶	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
232	S802	甕	五代	須焰	瓶	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
233	S802	甕	五代	須焰	瓶	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
234	S802	甕	五代	須焰	瓶	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
235	S802	甕	五代	須焰	瓶	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
236	S802	甕	五代	須焰	瓶	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
237	S802	甕	五代	須焰	瓶	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
238	S802	甕	五代	須焰	瓶	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
239	S802	甕	五代	須焰	瓶	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
240	S802	甕	五代	須焰	瓶	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
241	S802	甕	五代	須焰	瓶	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口
242	S802	甕	五代	須焰	瓶	—	—	白	(赤)(白)	(赤)(白)	直口	14	直口

N.o.	地名	地物	特征	形状	结构	质地	颗粒	粒度	颜色(%)	色调(%)	参考
236	S002/262	壤土	V型	圆球	团粒	—	—	—	灰	灰	—
237	S002/262	壤土	1.5C	中等土质粘	团粒	—	—	6.7	暗灰色 1.5-2.5%	1.5-2.5%	—
238	S002/262	壤土	1.5C	低壤	块状	—	—	6.7	灰 黑	1.5-2.5%	—
239	S003/263	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	8.2	白 灰	1.5-2.5%	—
240	S003/263	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	10	深灰 灰	1.5-2.5%	—
241	S003/263	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
242	S003/263	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
243	S003/263	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
244	S003/263	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
245	S003/263	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
246	S003/267-8	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	9	灰 灰	1.5-2.5%	—
247	S003/267-8	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
248	S003/267-6	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
249	S003/266	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
250	S003/266	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
251	S003/266	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
252	S003/266	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
253	S003/265	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
254	S006/261	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
255	S006/266	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
256	S011/6/C3	中等粘土	1.5C	中等粘土	中等	直立	直立	—	—	—	—
257	S011/6/18	中等粘土	1.5C	中等粘土	中等	直立	直立	—	—	—	—
258	S011/6/17-18	中等粘土	1.5C	中等粘土	中等	直立	直立	—	—	—	—
259	S114	中等粘土	1.5C	中等粘土	中等	直立	直立	—	—	—	—
260	S114/4/5-18	中等粘土	1.5C	中等粘土	中等	直立	直立	—	—	—	—
261	S003/266-7	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
262	S003/267-12	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
263	S003/267-12	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
264	S003/266-7	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
265	S003/262	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
266	S003/10-11-12	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
267	S003/10-11-12	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
268	S003/266-7-13	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
269	S003/266-7-13	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
270	S003/266-7	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
271	S003	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
272	S003/266-7	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
273	S003/267-13	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
274	S003/267-13	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
275	S003/267-13	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
276	S003/267-13	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
277	S003/267-13	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—
278	S003/261	壤土	1.5C	高粘	块状	—	—	—	灰 灰	1.5-2.5%	—

N.o.	品種名	細胞	時代	種別	器質	工具	操作	施土	色調(内)	色調(外)	表面(樹脂)	口々	備考	
279	SX00/2013-12	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	手-白-6	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	手-白-6	
280	SX00/2013-14	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	6.0	白-石	灰灰	灰灰	手-白-6	手-白-6	
281	SX00/2017-12	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	7.4	白-石	灰灰	灰灰	手-白-6	手-白-6	
282	SX00/199	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	7.2	白-石	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
283	SX00/2017	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	8.0	白-石-9鉛	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
284	SX00/2013-14	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	3.0	白-石	灰灰	灰灰	手-白-6	手-白-6	
285	SX00/2016-7	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	4.0	石-長	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
286	SX00/2013	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	4.0	石-長	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
287	SX00/2017-12	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	3.8	白	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
288	SX00/2017-12	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	3.6	白	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
289	SX00/2012	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	3.8	木-短	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
290	SX00/2017-12	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	4.8	白	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
291	SX00/2013-14	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	6.2	白	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
292	SX00/2013/209	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	5.0	長	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
293	SX00/2013-14	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	6.0	圓柱	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
294	SX00/2017-12	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	5.6	長-手	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
295	SX00/2016-7	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	6.8	細圓柱	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
296	SX00/2013-14	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	4.8	白	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
297	SX00/2012	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	-	白-石	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
298	SX00/2017-8	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	■7	10	1.8	白	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6	
299	SX00/2017-8	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	■7	9.6	2	6.0	木-短	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6
300	SX00/2016-7	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	■7	13.6	-	-	圓柱	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6
301	SX00/2013	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	■7	9	1.6	1.8	圓柱	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6
302	SX00/2017-8	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	■7	10	2	6.0	細柱	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6
303	SX00/2017-8	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	■7	12	-	-	圓柱	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6
304	SX00/2017-8	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	■7	15.5	2.4	10.0	角	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6
305	SX00/2017-8	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	■7	12	3.4	8.8	圓柱	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6
306	SX00/2017-8	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	■7	8	1.3	6.4	角	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6
307	SX00/2017-8	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	■7	29	-	-	圓柱	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6
308	SX00/2017	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	■7	-	-	4.2	木-口	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6
309	SX00/2017-11-12	骨-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	■7	-	-	7	木-口	灰青色	灰青色	手-白-6	手-白-6
310	30	II	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	-	-	(透明)青色	(透明)青色	手-白-6	手-白-6	
311	30/201	II	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	7.6	-	灰青	灰青	手-白-6	手-白-6	
312	SX00/2017-8	中骨頭上	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	-	-	(透明)	(透明)	手-白-6	手-白-6	
313	201	II	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	-	-	(アクリル)白	(アクリル)白	手-白-6	手-白-6	
314	30	II	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	-	-	(アクリル)白	(アクリル)白	手-白-6	手-白-6	
315	30/2015	II	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	-	-	(透明)白	(透明)白	手-白-6	手-白-6	
316	30/30	II	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	-	-	(アクリル)白	(アクリル)白	手-白-6	手-白-6	
317	30/316	中骨頭上	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	-	-	(アクリル)白	(アクリル)白	手-白-6	手-白-6	
318	30/313	中骨頭上	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	-	-	(アクリル)白	(アクリル)白	手-白-6	手-白-6	
319	30/3	II-R-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	5.6	-	(アクリル)白	(アクリル)白	手-白-6	手-白-6	
320	30/3-6-11-12	II-R-V	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	6.4	-	(アクリル)白	(アクリル)白	手-白-6	手-白-6	
321	30/4	II	JIC(未含合)F	骨頭	工具	-	-	6.2	-	(透明)白	(透明)白	手-白-6	手-白-6	

N.o.	名	科	時代	種別	原種	原種	實徑	船上	色調(%)	色調(%)	产地	产地	参考
322 28	ミツバチ	蝶形上	後1期	背鰭	後鰭	後鰭	-	(黒灰)	(黒灰)	黒白	黒白		
323 35		蝶形上	後1期	背鰭	後鰭	後鰭	-	(黒灰)	(黒灰)	黒白	黒白	高橋智子著述	
324 366-13	V	蝶形上	後1期	背鰭	背鰭	背鰭	-	(オリ)~(黒)	(オリ)~(黒)	黒白	黒白	高橋智子著述	
325 366-11	W	蝶形上	後1期	背鰭	背鰭	背鰭	-	(オリ)~(黒)	(オリ)~(黒)	黒白	黒白	高橋智子著述	
326 30		蝶形上	後1期	背鰭	背鰭	背鰭	-	(黒灰)~(黒)	(黒灰)~(黒)	黒白	黒白		
327 1267-11/12	ヒヨウ	後1期	前1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	11.5	-	-	黒灰	(黒灰)	黒白	
328 3815	ヒヨウ	後1期	前1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	10.2	-	(オリ)~(黒)	(オリ)~(黒)	黒白	黒白	
329 386-7	ヒヨウ	後1期	前1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	17	-	(黒)	(黒)	黒白	黒白	内田信輔
330 2916	ヒヨウ	後1期	前1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	(黒灰)	(黒灰)	黒白	黒白	内田信輔	
331 2216		後1期	前1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	15	-	(黒)	(黒)	黒白	黒白	内田信輔
332 386	ホカタラシ	中1期上	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	9.7	(黒)	(黒)	黒白	黒白	内田信輔
333 2816		中1期上	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	(黒)	(黒)	黒白	黒白	内田信輔	
334 28	ヒヨウ	後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	-	(黒灰)	(黒灰)	黒白	黒白	内田信輔
335 25		ヒヨウ	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	8	(黒)	(黒)	黒白	黒白	内田信輔
336 3817	ヒヨウ	後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	6.1	(黒)	(黒)	黒白	黒白	内田信輔
337 45.6	ヒヨウ	後1-V	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	20	-	-	-	-	内田信輔
338 38.2	ヒヨウ	後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	11.4	2.3	5.6	(黒)	(黒)	黒白	
339 38		後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	12.6	-	1.6	(黒)	(黒)	内田信輔	
340 226-7	ヒヨウ	後1-V	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	-	4.4	白	(黒)	(黒)	内田信輔
341 384		後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	-	3.4	白	(黒)	(黒)	内田信輔
342 326	V	後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	9	2.7	3.8	石	石	内田信輔	
343 326	V	後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	9	3.1	4.6	石	石	内田信輔	
344 320	W-V	後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	8.8	2.5	4.4	赤	赤	内田信輔	
345 385-7	W-V	後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	5.2	1.9	4.1	赤	赤	内田信輔	
346 3815	W-V	後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	-	3.8	石	石	内田信輔	
347 3815	W-V	後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	-	3.8	石	石	内田信輔	
348 386	V	後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	-	5.5	赤	赤	内田信輔	
349 3811	W	後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	-	6	赤	赤	内田信輔	
350 387	W-V	後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	17.3	6.1	8.2	石	石	内田信輔	
351 386-7	W-N	後1期	後1期	魚鱗	魚鱗	魚鱗	-	-	6.1	赤	赤	内田信輔	
352 3814-15	W-V	後1期	後1期	魚鱗	魚鱳	魚鱳	-	-	7.4	白	白	内田信輔	
353 3814		後1期	後1期	魚鱳	魚鱳	魚鱳	-	-	7.6	白	白	内田信輔	
354 386	W-V	後1期	後1期	魚鱳	魚鱳	魚鱳	-	-	8.2	赤	赤	内田信輔	
355 28		後1期	後1期	魚鱳	魚鱳	魚鱳	-	-	7.6	赤	赤	内田信輔	
356 3813-8	V	後1期	後1期	魚鱳	魚鱳	魚鱳	-	-	8.4	白	白	内田信輔	
357 3811	W	後1期	後1期	魚鱳	魚鱳	魚鱳	-	-	11.2	白	白	内田信輔	
358 387		後1期	後1期	魚鱳	魚鱳	魚鱳	-	-	7	白	白	内田信輔	
359 38		後1期	後1期	魚鱳	魚鱳	魚鱳	-	-	7.4	白	白	内田信輔	
360 3814-16	W-V	後1期	後1期	魚鱳	魚鱳	魚鱳	-	-	7.6	白	白	内田信輔	
361 3814-15	W-V	後1期	後1期	魚鱳	魚鱳	魚鱳	-	-	6.3	白	白	内田信輔	
362 38		後1期	後1期	魚鱳	魚鱳	魚鱳	-	-	5	白	白	内田信輔	
363 38	W-V	後1期	後1期	魚鱳	魚鱳	魚鱳	-	-	4.8	白	白	内田信輔	
364 3815	W-V	後1期	後1期	魚鱳	魚鱳	魚鱳	-	-	5.4	黄+赤+青+白	赤	内田信輔	
							-	-	6	黄+青+白	赤	内田信輔	

No.	出土地点	地名	時代	陶器	器形	時代	器形	断土	色調 (外)	色調 (内)	参考
365 301	■	〔江戸時代〕	中世	小口瓶	桶形	中世	小口瓶	白	灰褐色	灰褐色	日本古物
366 4-8	〔江戸時代〕	小口・直口	直口	直口	直口	—	—	7	灰褐色	灰褐色	日本古物
367 315	〔江戸時代〕	小口・直口	直口	直口	直口	—	—	7.2	白	灰褐色	日本古物
288 408-11	〔江戸時代〕	中口・直口	直口	直口	直口	—	—	7	灰褐色	灰褐色	日本古物
369 306-7	〔江戸時代〕	中口・直口	直口	直口	直口	—	—	6	灰褐色	灰褐色	日本古物
370 4-7 桜ヶ岡	■	〔江戸時代〕	中口・直口	直口	直口	—	—	3.5	灰褐色	灰褐色	日本古物
371 328-13	V	〔江戸時代〕	中口・直口	直口	直口	—	—	3.6	灰褐色	灰褐色	日本古物
372 303	〔江戸時代〕	中口・直口	直口	直口	直口	—	—	3.2	灰褐色	灰褐色	日本古物
373 307	II	打刃頭	直口	直口	直口	—	—	3	灰褐色	灰褐色	日本古物
374 18	II	中口・直口	直口	直口	直口	9.2	2	4.8	灰褐色	灰褐色	日本古物
375 28	II	中口・直口	直口	直口	直口	8	1.7	4.8	灰褐色	灰褐色	日本古物
376 18	II	中口・直口	直口	直口	直口	8	1.8	4.4	灰褐色	灰褐色	日本古物
377 18	II	中口・直口	直口	直口	直口	10.2	1.8	5.1	白	灰褐色	日本古物
378 8-9	II	中口・直口	直口	直口	直口	9.3	1.9	3.6	灰褐色	灰褐色	日本古物
379 279	一丁目・賀油	中口・直口	直口	直口	直口	9.8	2.1	5	灰褐色	灰褐色	日本古物
380 15 長崎町	I 一丁目	中口・直口	直口	直口	直口	8.4	2	4	灰褐色	灰褐色	日本古物
381 25	II	中口・直口	直口	直口	直口	8	2	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
382 25	II	中口・直口	直口	直口	直口	14	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
383 157-A	1-3 丁目・V	中口・直口	直口	直口	直口	14	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
384 25	II	中口・直口	直口	直口	直口	15.6	3.6	10.4	手・灰	灰褐色	日本古物
385 18	II	中口・直口	直口	直口	直口	15.6	3.5	—	手・石	灰褐色	日本古物
386 3205	II F	中口・直口	直口	直口	直口	12.2	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
387 325	F	中口・直口	直口	直口	直口	13.4	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
388 3-9	II	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
389 3251	II	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
390 18	II	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
391 313	II	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
392 2616	II	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
393 106-7・11-12	II V	直口	直口	直口	直口	17.4	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
395 325	II	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
396 325	II	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
397 325	V	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
398 325	II	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
399 4-9	II	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
400 35	II	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
401 35	II	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
402 13	V	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
403 6-9	V	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
404 23	V	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
405 2-9	V	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
406 2-9	V	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物
407 2-9	V	直口	直口	直口	直口	—	—	—	灰褐色	灰褐色	日本古物

N.o.	学名	地名	別名	特徴	根状	葉序	葉片	節子	色調 (赤)	基物 (根)	ロクロ	備考
408	008	水注	Ⅰ - V	1葉	水注	-	-	-	赤白	角状	赤白	赤白
429	295-7	水注	Ⅰ - V	1葉	水注	-	-	-	赤白	角状	赤白	赤白
410	2813	水注	水注	2葉	水注	-	-	-	赤白	角状	赤白	赤白
411	27-2	直島上	直島上	1	1葉	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
412	638	直島上	直島上	1	1葉	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
413	479	直島上	直島上	1	1葉	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
414	2-56	直島上	直島上	1	1葉	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
415	18	直島上	直島上	1	1葉	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
416	25	直島上	直島上	1	1葉	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
417	8-8	直島上	直島上	1	1葉	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
418	2579	直島上	直島上	1	1葉	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
419	38	直島上	直島上	1	1葉	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
420	35	直島上	直島上	1	1葉	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
421	25	直島上	直島上	1	1葉	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
422	28	直島上	直島上	1	1葉	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
423	35-6-11-12	1 - V - V	1 - V - V	1葉半	肥前	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
424	35-6-11-12	1 - V - V	1 - V - V	1葉半	肥前	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
425	59	直島上	直島上	1	1葉半	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
426	282	直島上	直島上	1	1葉半	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
427	392	直島上	直島上	1	1葉半	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
428	39	直島上	直島上	1	1葉半	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
429	38	直島上	直島上	1	1葉半	直島	直島	直島	白	12.5-5.5	赤白	赤白
430	36-6-11-12	1 - V - V	1 - V - V	1葉半	肥前	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
431	128-6-11-12	1 - V - V	1 - V - V	1葉半	肥前	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
432	4-9	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
433	125-6-11-12	1 - V - V	1 - V - V	1葉半	肥前	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
434	76	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
435	4-9	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
436	303	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
437	2513	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
438	不判	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
439	25	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
440	392	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
441	32	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
442	38	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
443	種記	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
444	28	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
445	38 小瀬カタシ	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
446	26	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
447	47	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
448	39(1)-15-496-11	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
449	35-3	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白
450	28	直島上	直島上	1	1葉半	肥前	肥前	肥前	白	12.5-5.5	赤白	赤白

N no	地名	地盤	粒径	物理 性質	土壤 剖面	土壤 深度	腐殖 物質	粉土 量	色調 (Munsell)	色調 (HS)	地勢 (H)	地勢 (D)	参考
451	2810	W-V	1/8 滅半	肥沃	0-地表層部分	-	-	3.8	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
452	3822	II	1/8 滅半	肥沃	0-地表層部分	12.5	-	-	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
453	48.±	IV	1/8 滅半	肥沃	0-地表層部分	-	-	5.8	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
454	2813	1/8 滅半	肥沃	0-地表層部分	-	-	-	4.6	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
455	49.9	IV	1/8 滅半	肥沃	0-地表層部分	-	-	5	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
456	4.9	IV	1/8 滅半	肥沃	0-地表層部分	-	-	-	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
457	185.9-11.12	I-N-V	1/8 滅半	肥沃	0-地表層部分	-	-	9.8	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
458	48	II上	1/8 中間	肥沃	0-地表層部分	-	-	4.6	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
459	3821	II	1/8 中間	肥沃	0-地表層部分	-	-	9	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
460	4.9	IV	1/8 中間	肥沃	0-地表層部分	14	-	-	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
461	2813	1/8 中間	肥沃	0-地表層部分	肥沃	-	-	-	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
462	2813	II	1/8 滅半	肥沃	0-地表層部分	-	-	-	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
463	20	II	1/8 滅半	肥沃	0-地表層部分	-	-	-	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
464	2316-17	II	1/8 滅半	肥沃	0-地表層部分	25.5	-	-	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
465	196.7-11.12	肥沃的一點	1/8 滅半	肥沃	0-地表層部分	-	-	16	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
466	333	农土	1/8 滅半	肥沃	0-地表層部分	-	-	13.6	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
467	3814	IV	1/8 滅半	肥沃	0-地表層部分	10.4	-	-	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
468	28	II面上	1/8-1/8代	肥沃	0-地表層部分	-	-	12	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
469	18 肥沃的	I-II-III	近表	肥沃	-	34.4	-	-	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶
470	18 肥沃的	I	近表	肥沃	0-地表層部分	-	-	-	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	12.5-13.0 (深褐色)	洪積地帶

別表4 土製品・金属製品等観察表

N.o.	地點	測位	時代	鉢形	縁形	底形	表面	底面	高さ(cm)	幅・底径(cm)	厚さ(cm)	参考
671	土器	30	中世	平底	無	無	素面	素面	4.9	(3.3)	—	外底鉄物
672	土器	1	中世	平底	無	無	素面	素面	1.8	(3.3)	—	外底鉄物
673	小町	小川端1	近江國	縁付	無	無	素面	素面	1.8	1.8	1.8	外底鉄物
674	S320	中世	金剛製品	無	無	無	素面	素面	2.4	2.4	0.6	—
675	S227	中世	金剛製品	無	無	無	素面	素面	3.1	3.1	0.9	—
676	S320	中世	金剛製品	無	無	無	素面	素面	7.2	7.2	5.4	—
677	S320	中世	金剛製品	無	無	無	素面	素面	—	5.4	1.2	—

別表5 木製品観察表

N.o.	地點	時代	鉢形	縁形	底形	表面	底面	高さ(cm)	幅・底径(cm)	厚さ(cm)	参考
178	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	7.4	3.2	2.4	鉢口
179	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	12.0	12.0	2.4	鉢口
180	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	—	—	—	鉢口
181	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	11.1	11.1	1.8	鉢口
182	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	15.0	15.0	1.6	鉢口
183	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	23	(0.90)	1.6	鉢口
184	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	11.9	11.9	1.2	鉢口
185	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	26.0	14.8	0.9	鉢口
186	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	19.0	14.6	0.7	鉢口
187	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	28.6	18.8	0.6	鉢口
188	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	16.2	15.2	1.4	鉢口
189	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	—	—	—	鉢口
190	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	15.1	5.1	7.4	鉢口
191	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	16.2	3.5	9.8	鉢口
192	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	9.0	6.5	6.6	鉢口
193	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	27.4	6.3	0.8	鉢口
194	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	21.4	9.8	—	鉢口
195	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	13.2	5.8	0.4	鉢口
196	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	—	17.6	0.7	鉢口
197	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	16.3	0.5	0.4	鉢口
198	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	15.8	0.5	—	鉢口
199	S320	中世	下鉢形	無	無	素面	素面	16.2	0.5	—	鉢口
200	S320	中世	素朴本造	無	無	素面	素面	—	—	—	鉢口
201	S320	中世	素朴本造	無	無	素面	素面	22.2	9.4	—	鉢口
202	S320	中世	素朴本造	無	無	素面	素面	17.2	11.2	0.3	鉢口
203	S320	中世	素朴本造	無	無	素面	素面	16.2	12.0	0.6	鉢口
204	S320	中世	素朴本造	無	無	素面	素面	(2.0)	(3.8)	0.5	鉢口

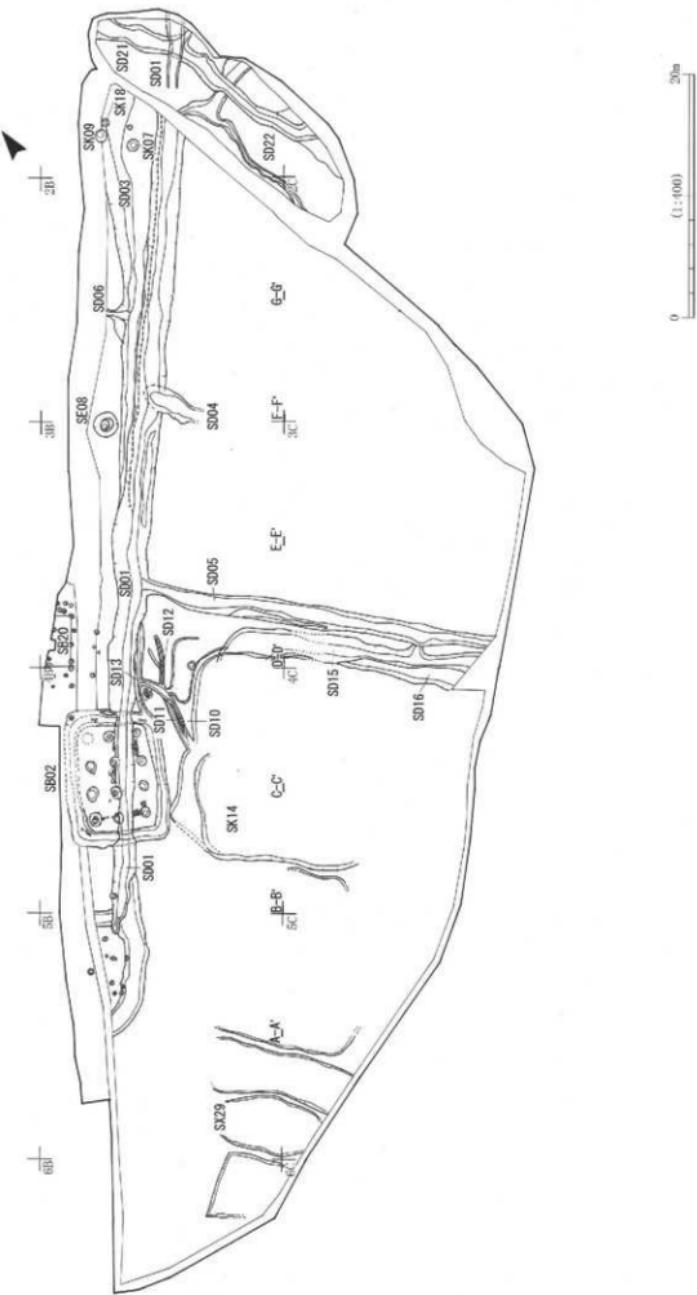
N.o.	出力機器	動作	芯棒	芯棒 φ 2.94 mm	芯棒 φ 2.94 mm	Φd (mm)	Φd (mm)	Φd (mm)	備考
566	S320	中挽	中挽	9.8	9.8	1.0	0.2	板目	
566	S320	中挽	中挽	9.3	9.3	0.8	0.2	板目	芯材の外側部品 先端焼失
567	S320	中挽	加工木製品	25.0	2.0	0.3	0.3	板目	
568	S320	中挽	加工木製品	19.0	7.2	1.2	板目		
569	S320	中挽	鉛	81.5	1.0	—	—	板目	軸孔付箇所
570	S320	中挽	鉛	19.5	10.2	4.4	4.4	板目	万能付箇所
570	S320	中挽	鉛	27.2	5.9	2.0	2.0	板目	
571	S320	中挽	鉛	23.8	5.0	0.2	0.2	板目	
572	S320	中挽	加工木製品	18.0	2.6	1.8	1.8	板目	把手付?
573	S320	中挽	木挽	26.8	3.0	0.3	0.3	板目	
574	S320	中挽	木挽	17.8	3.9	1.2	1.2	板目	
575	S320	中挽	木挽	11.8	2.2	1.5	1.5	板目	
576	S320	中挽	木挽	16.8	7.8	0.3	0.3	板目	
577	S320	中挽	純骨木綱	72.6	4.0	0.4	0.4	板目	
578	S320	中挽	純骨木綱	36.2	3.3	0.3	0.3	板目	
579	S320	中挽	純骨木綱	17.4	2.5	0.3	0.3	板目	
580	S320	中挽	純骨木綱	18.4	2.0	0.6	0.6	板目	
581	S320	中挽	純骨木綱	18.6	2.9	0.5	0.5	板目	
582	S320	中挽	木挽	—	0.6	0.5	0.5	板目	
583	S320	中挽	木挽	—	0.6	0.2	0.2	板目	
584	S320	中挽	木挽	72.4	0.6	0.1	0.1	板目	
585	S320	中挽	木挽	25.4	4.7	0.2	0.2	板目	
586	S320	中挽	木挽	14.4	2.0	0.1	0.1	板目	
587	S320	中挽	空芯管	18.6	3.6	0.8	0.8	板目	通気用孔付箇所
588	S320	中挽	加工木製品	25.9	1.0	0.6	0.6	板目	通気用孔付箇所
589	S320	中挽	鉛	16.0	0.8	—	—	板目	
590	S320	中挽	鉛	11.8	2.6	0.4	0.4	板目	
590	S320	中挽	鉛	59.0	2.6	0.6	0.6	板目	
591	S320	中挽	鉛	(4.4)	2.0	0.7	0.7	板目	
592	S320	中挽	加工木製品	23.2	3.2	0.4	0.4	板目	
593	S320	中挽	木挽	28.8	2.8	0.3	0.3	板目	

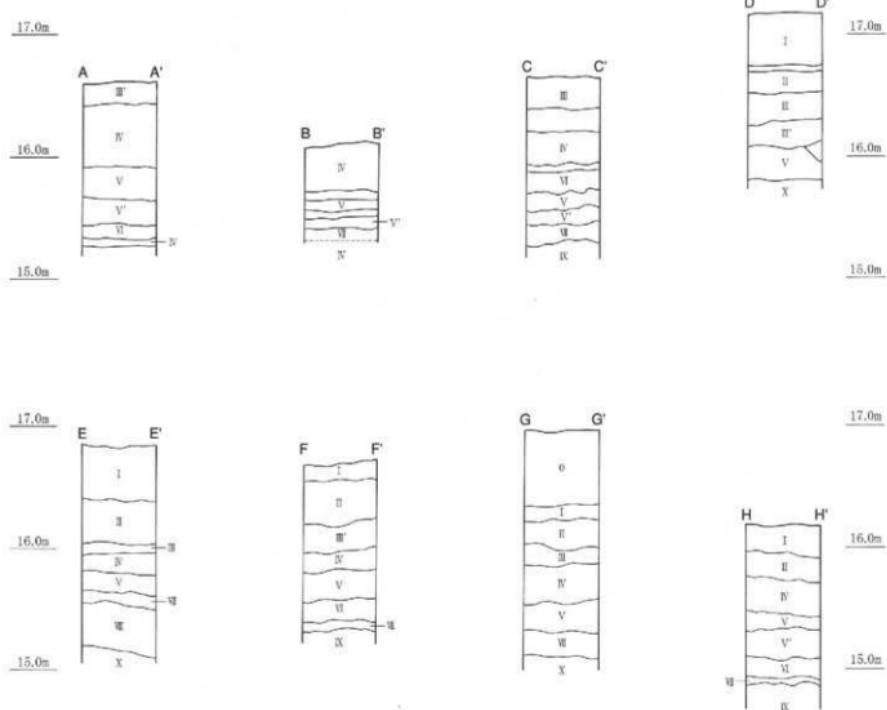
別表 6 石製品觀察表

No.	計畫名	時代	施形	器種	長(cm)	寬(cm)	厚(cm)	重(g)	石種	備考	
2	W-	新石器	石器	圓盤	7.6	6.6	1.7	99	石英		
3	S304	II	鐵文	石器	石器	2.7	2.5	0.4	6.5	石英	無質地
4	18	II	鐵文	石器	石器	2.6	13.0	1.6	263	石英	無質地
5	280	Ⅲ	鐵文	石器	石器	7.8	7.0	5.9	457	石英	無質地
534	S320	中唐	人頭像石	石器	石器	11.2	7.6	1.5	165	石英	無質地
535	34(A-3801)		人頭像石	石器	石器	4.4	3.2	1.0	28	石英	
536	2012-3001		鐵石	鐵石	鐵石	6.4	4.8	2.8	108	鐵石	
537	2358-3901		鐵石	鐵石	鐵石	9.6	(6.8)	2.2	126	鐵石	
538	H07-5-1-12	I - K ~ V	鐵石	鐵石	鐵石	8.6	2.9	1.9	118	鐵石	
539	78	Ⅲ	鐵石	鐵石	鐵石	7.8	3.2	2.8	108	鐵石	
540	200-5901		鐵石	鐵石	鐵石	7.2	4.0	3.6	142	鐵石	
541	2813	V	鐵石	鐵石	鐵石	5.4	3.6	3.6	103	鐵石	
542	185-4-1-12		鐵石	鐵石	鐵石	8.9	4.2	3.2	180	鐵石	
543	28	Ⅲ	鐵石	鐵石	鐵石	9.6	4.8	4.6	163	鐵石	
544	S330	中世	鐵石	鐵石	鐵石	12.7	7.0	5.0	129	鐵石	
545	236	V	鐵石	鐵石	鐵石	13.6	(6.6)	8.4	1243	鐵石	
546	S330	中唐	軒轅鼎	鐵石鼎	鐵石	9.0	5.4	4.1	46	鐵石	

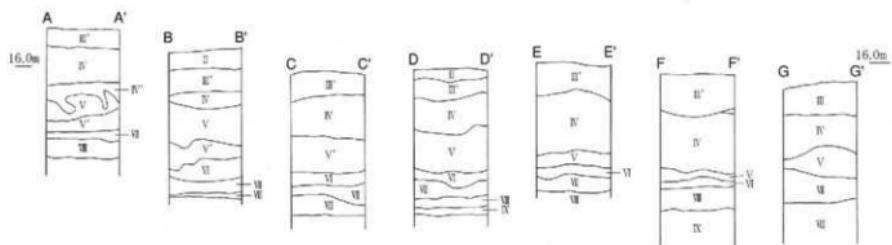
別表 7 羽門觀察表

No.	計畫名	時代	種類	施形	施土	外形	内形	断面形	产地	備考
547	207-5001	中洪	缺口	長・圓柱	長・圓柱	6.2	1.8	圓形	赤泥	
548	-4-8	中洪	缺口	長・圓柱	長・圓柱	5.0	2.1	圓形	赤泥	
549	286-11	中洪	缺口	長・圓柱	長・圓柱	4.8	1.8	圓形	赤泥	
550	不明	中洪	缺口	圓柱	圓柱	7.6	3.6	圓形	赤泥	
551	286-11	中洪	缺口	長・圓柱	長・圓柱	8.2	2.4	圓形	赤泥	
552	1815	II - V	中洪	缺口	長・圓柱	5.8	4.6	圓形	赤泥	
553	206-3803	中洪	缺口	長・圓柱	長・圓柱	8.0	5.0	多角形	赤泥	
554	2311	II - V	中洪	缺口	長・圓柱	9.0	2.8	多角形	赤泥	

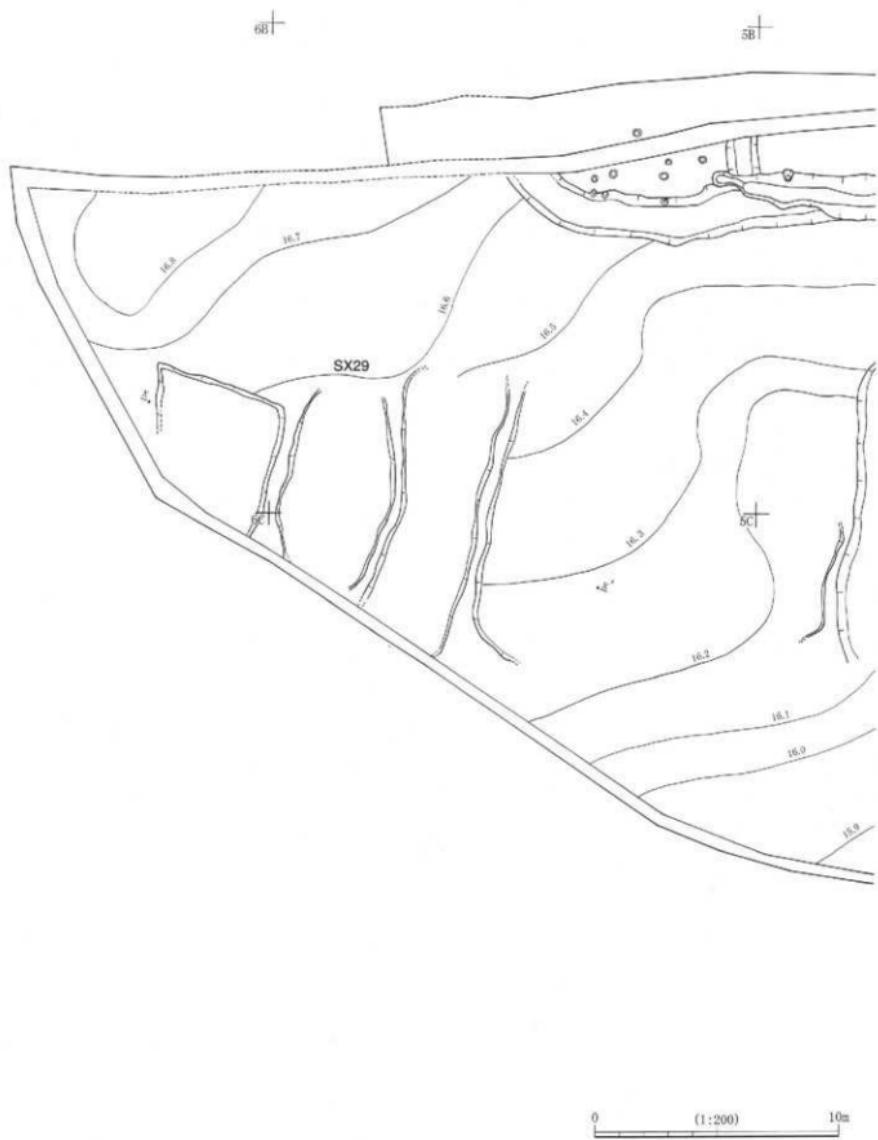


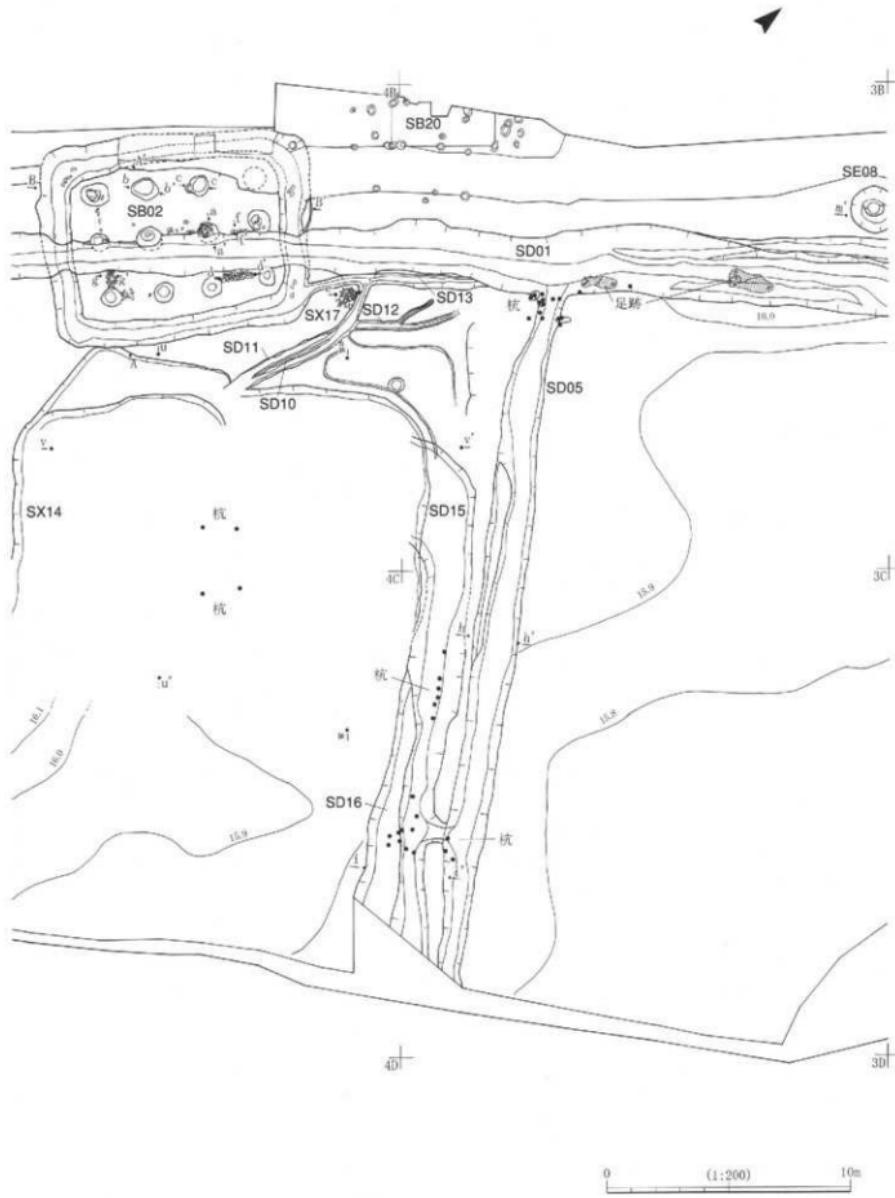


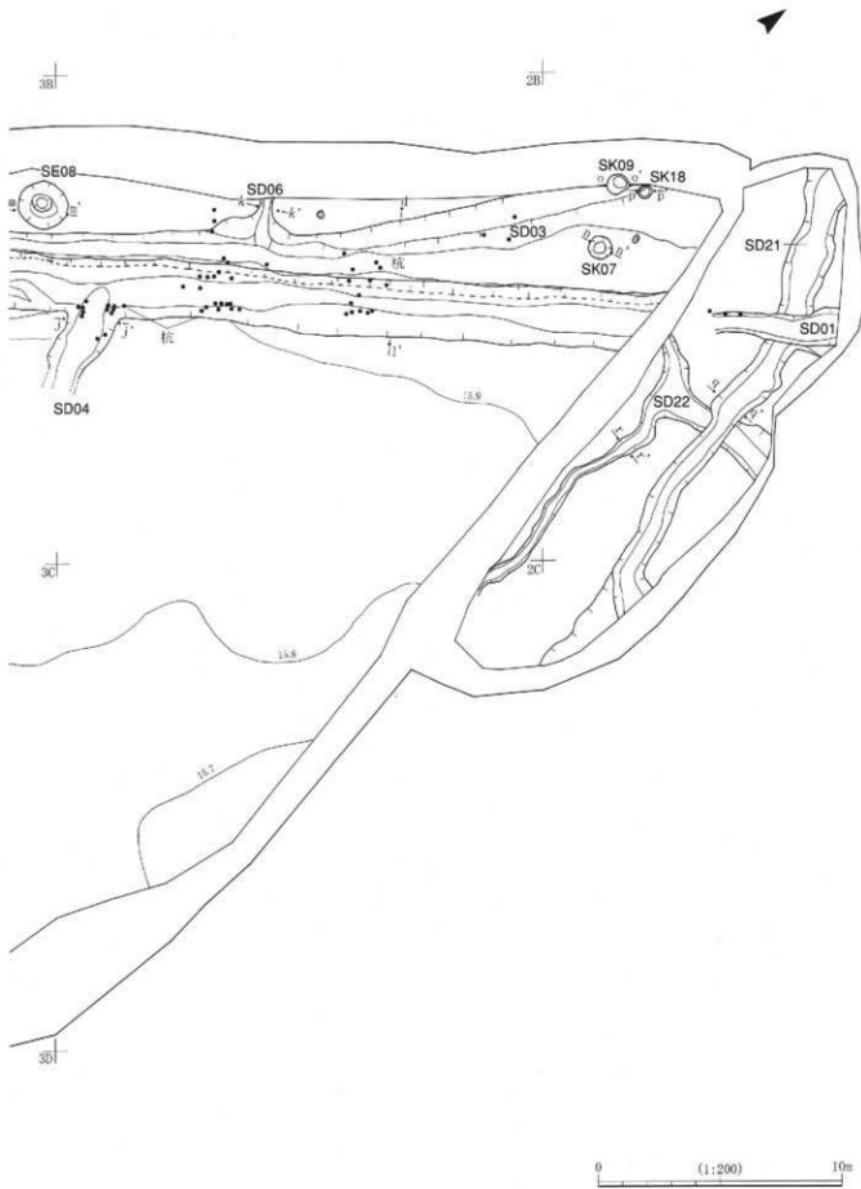
調査区西壁A-H(図版13)

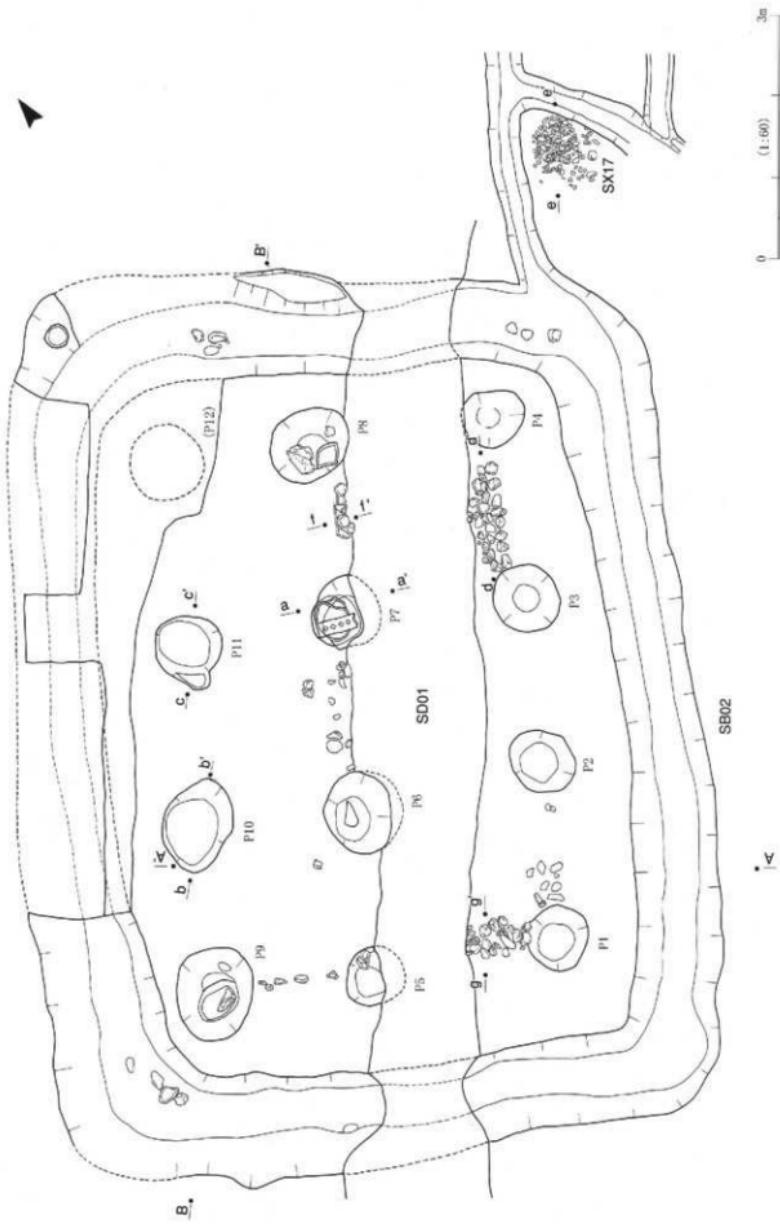


Cグリッド南北ラインA-G(図版1)

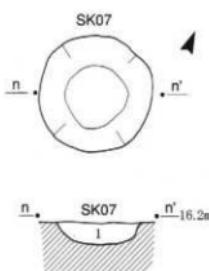
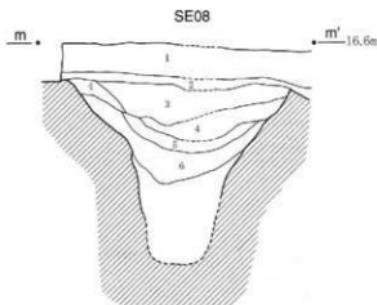
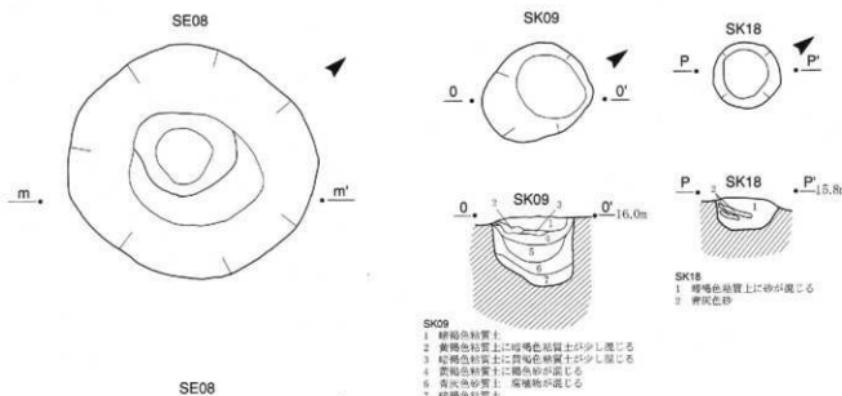
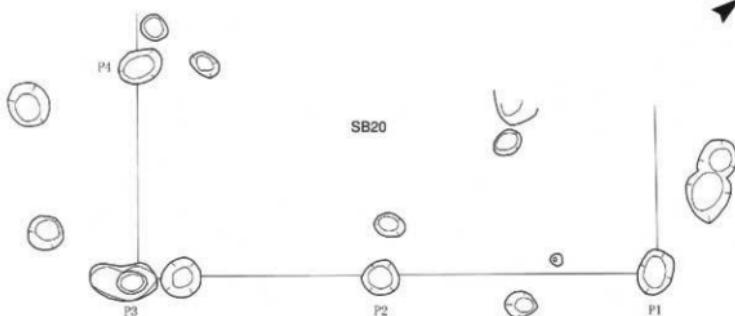












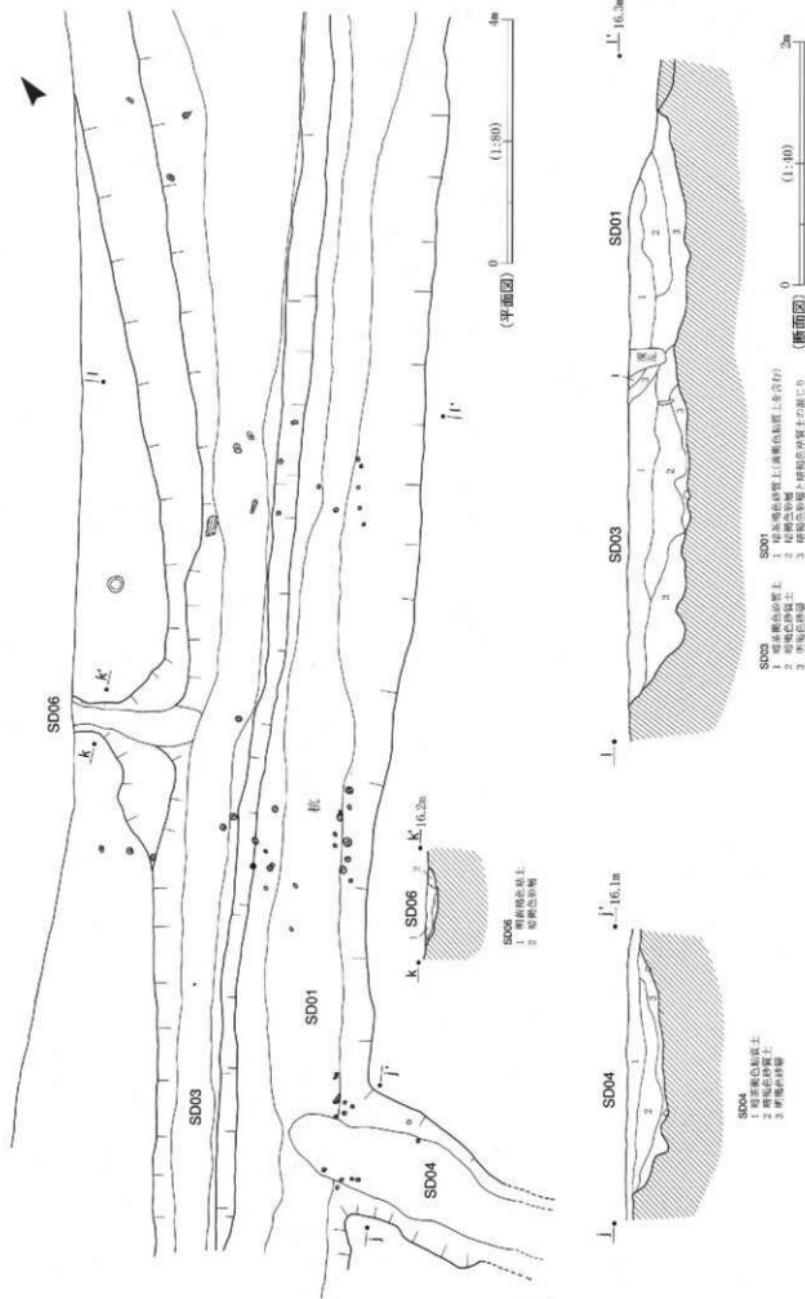
SE08

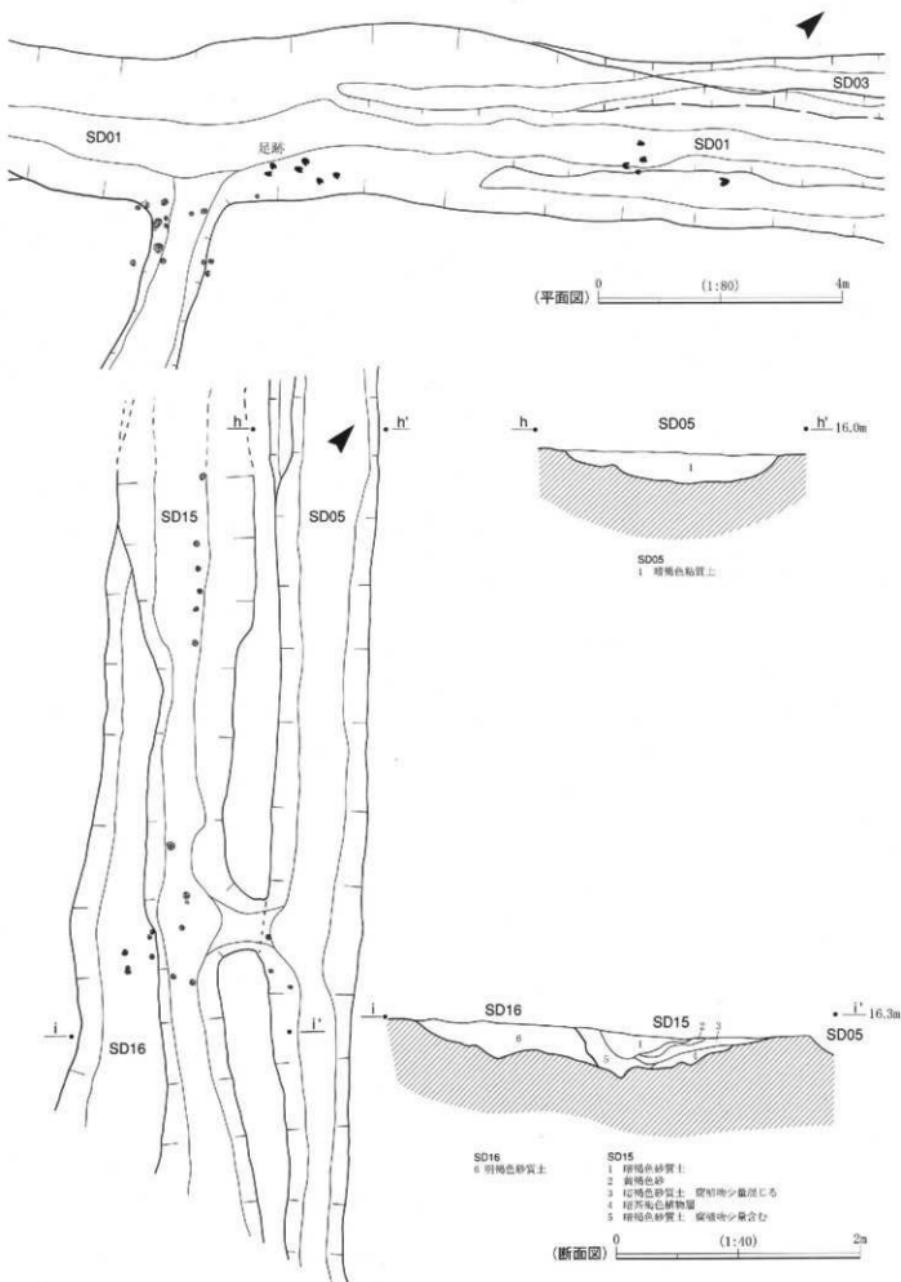
- 1 緑褐色土 形を含む
- 2 緑褐色土上に青灰色
- 3 青灰色地質層上に緑褐色地質層の混合土
- 4 及びペースト地質層上の割合が異なる
- 5 麻植物層(淡灰色地質層を若干含む)
- 6 青灰色地質層

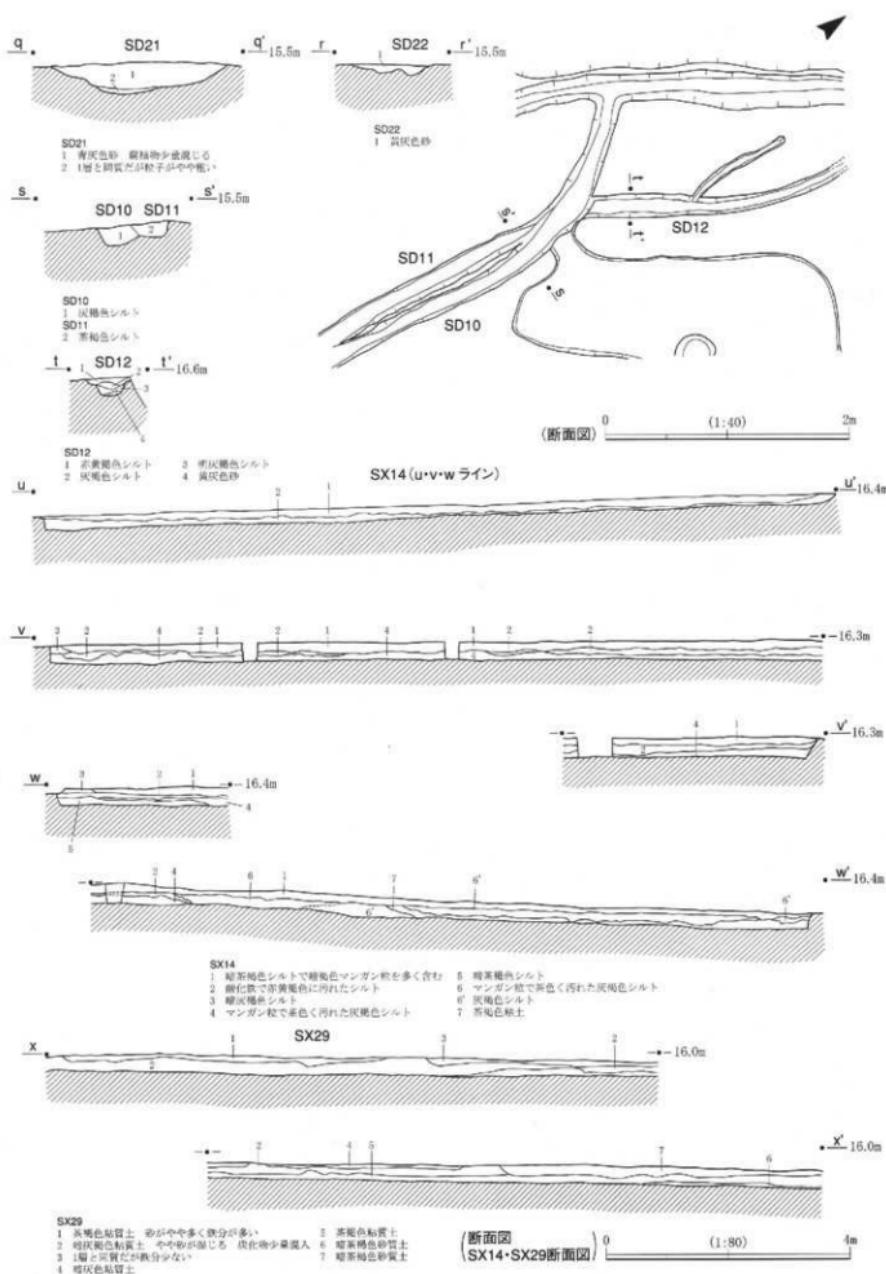
SK07

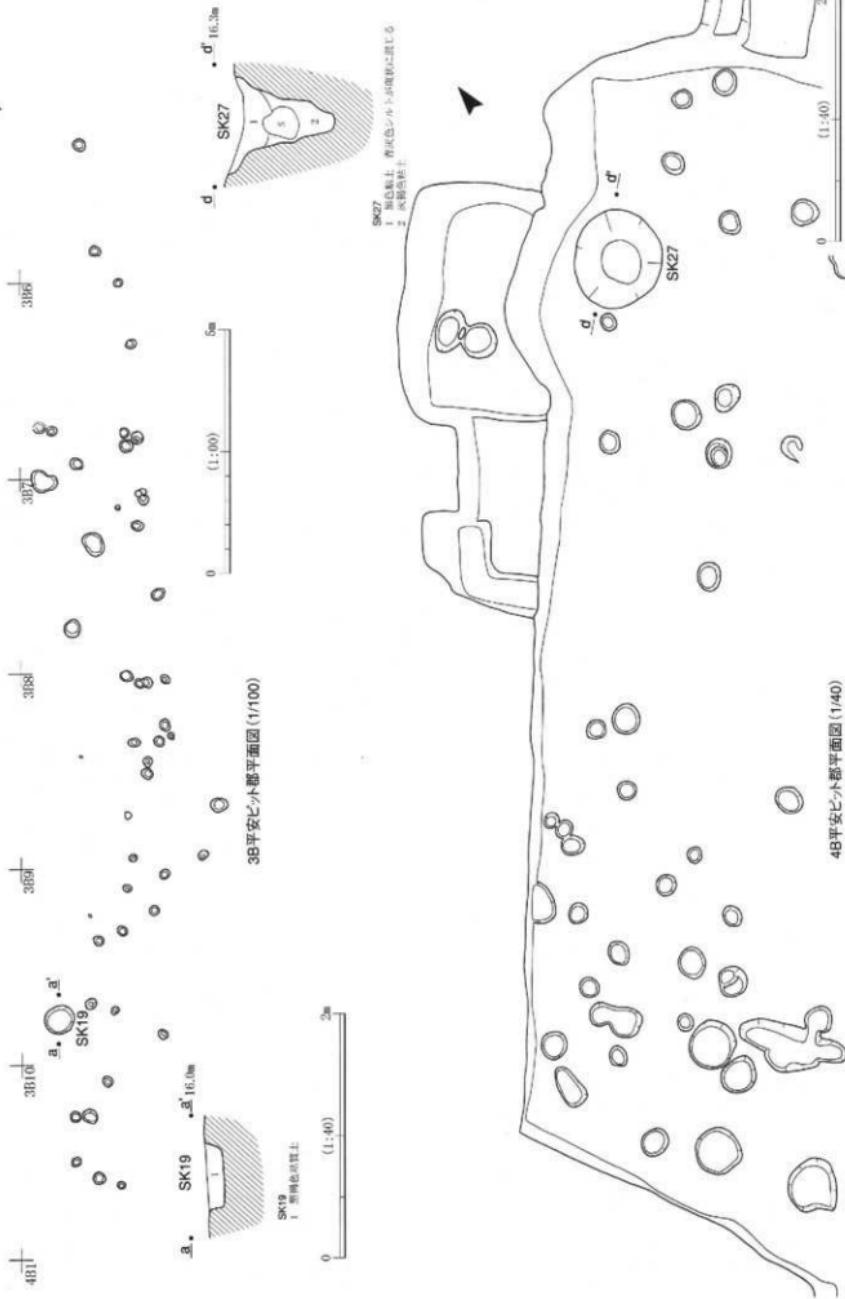
- 1 緑褐色土 粒性ややあり

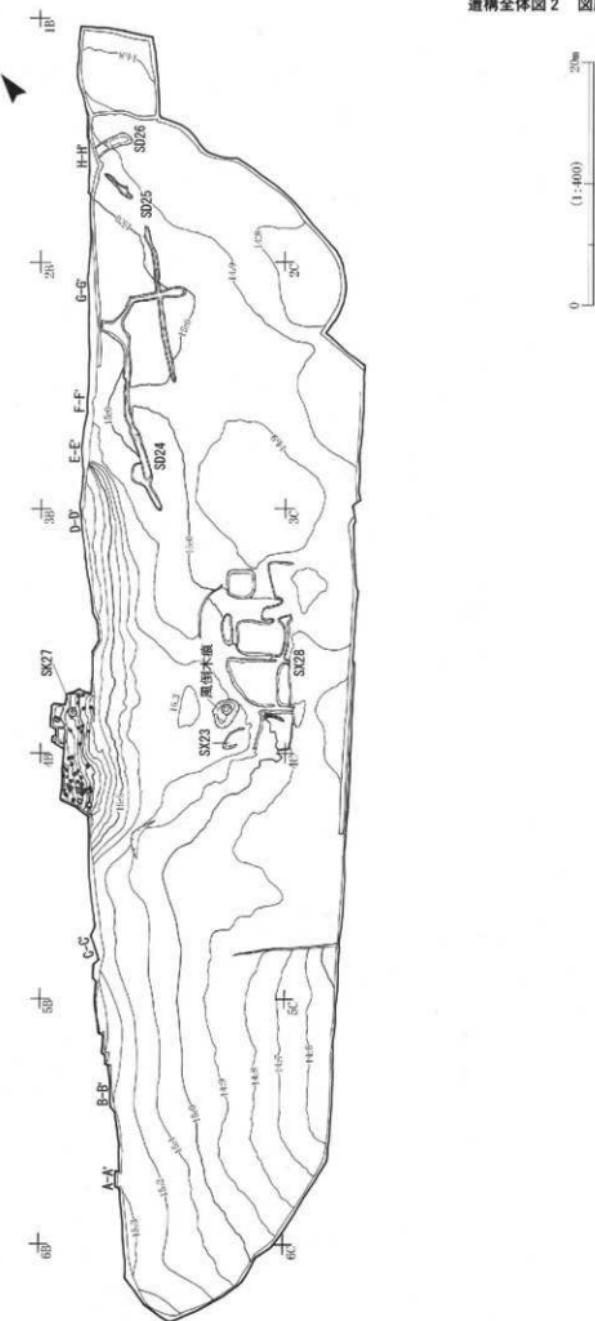
0 (1:40) 2m

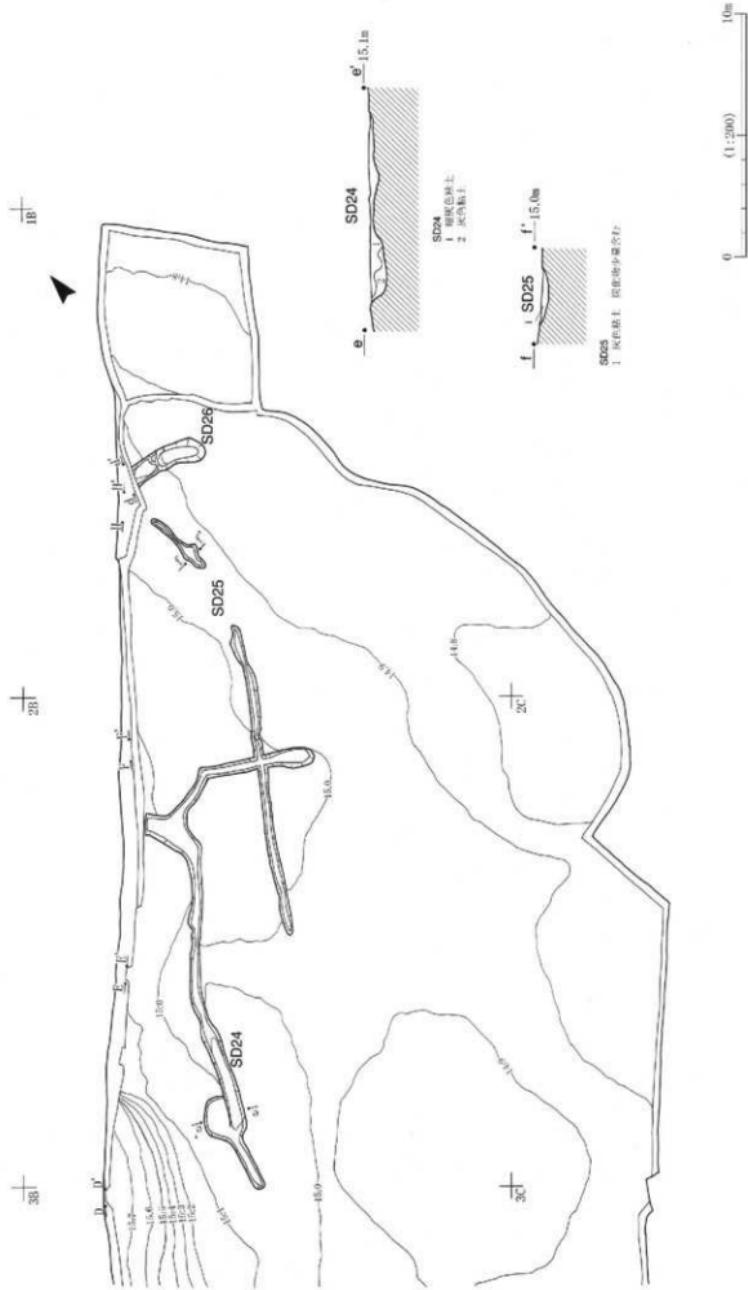


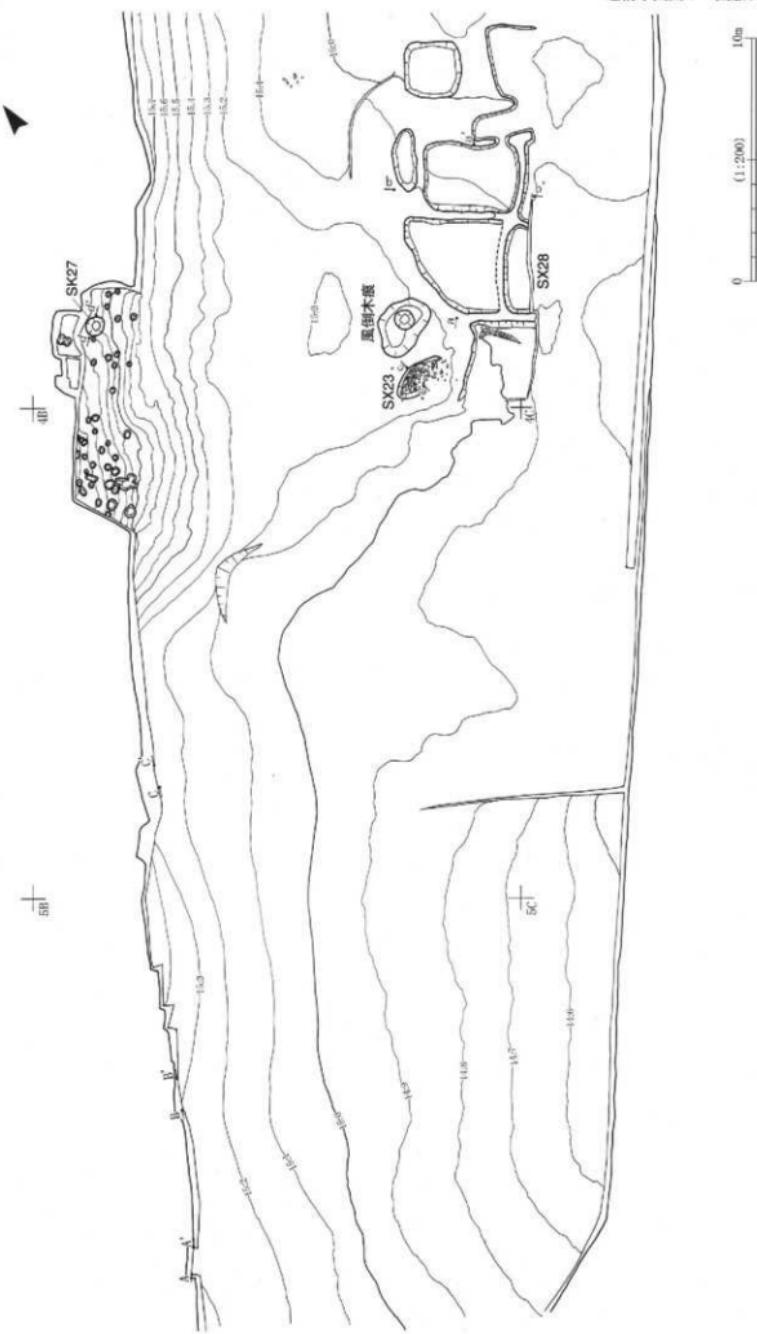


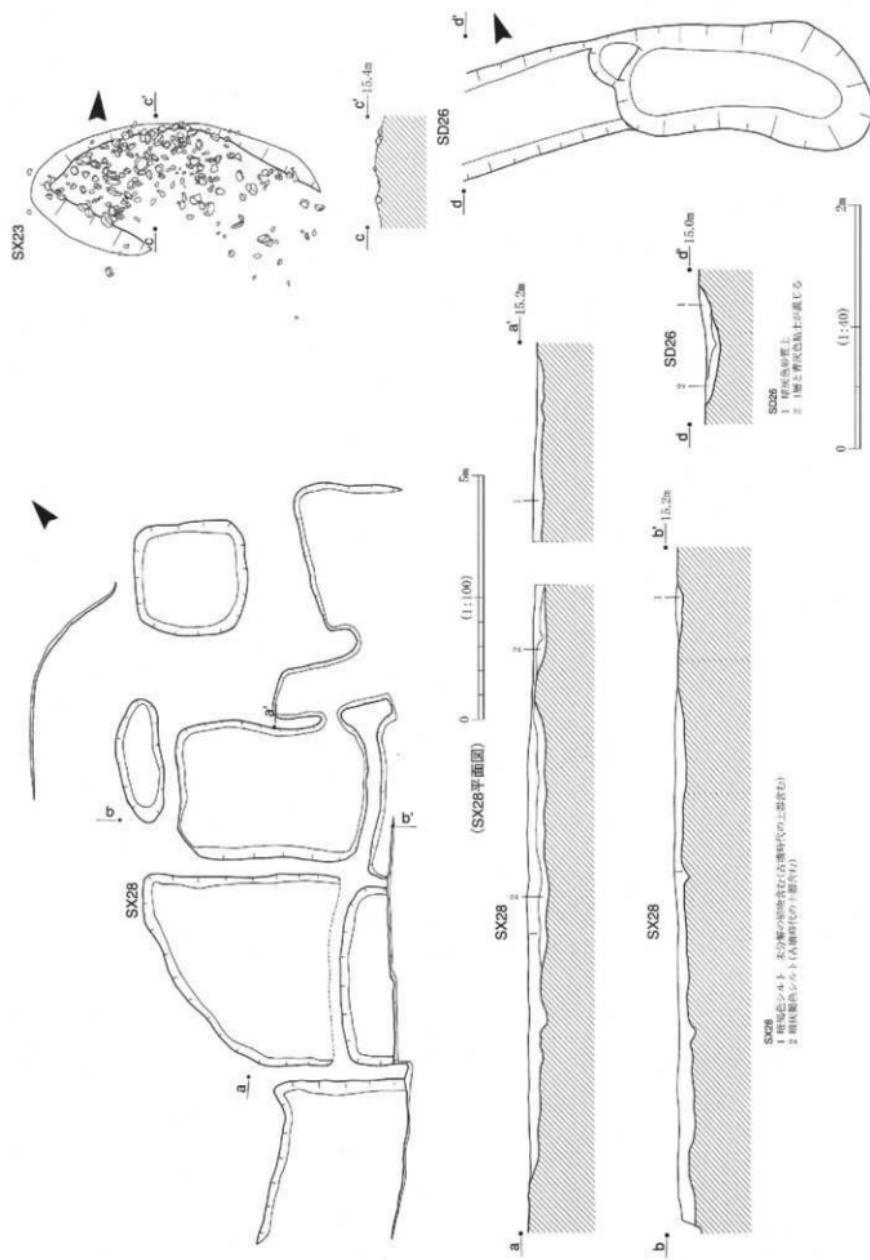


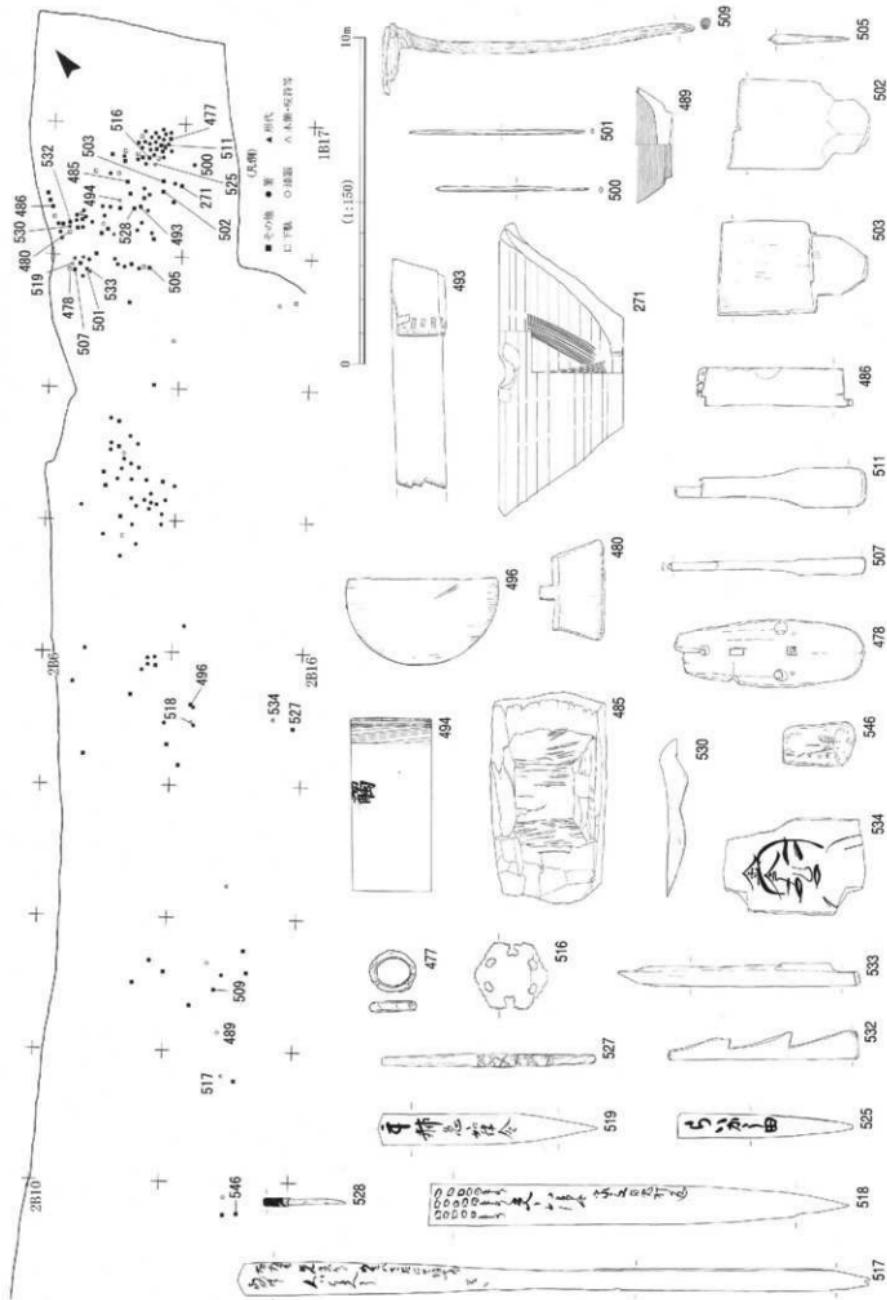


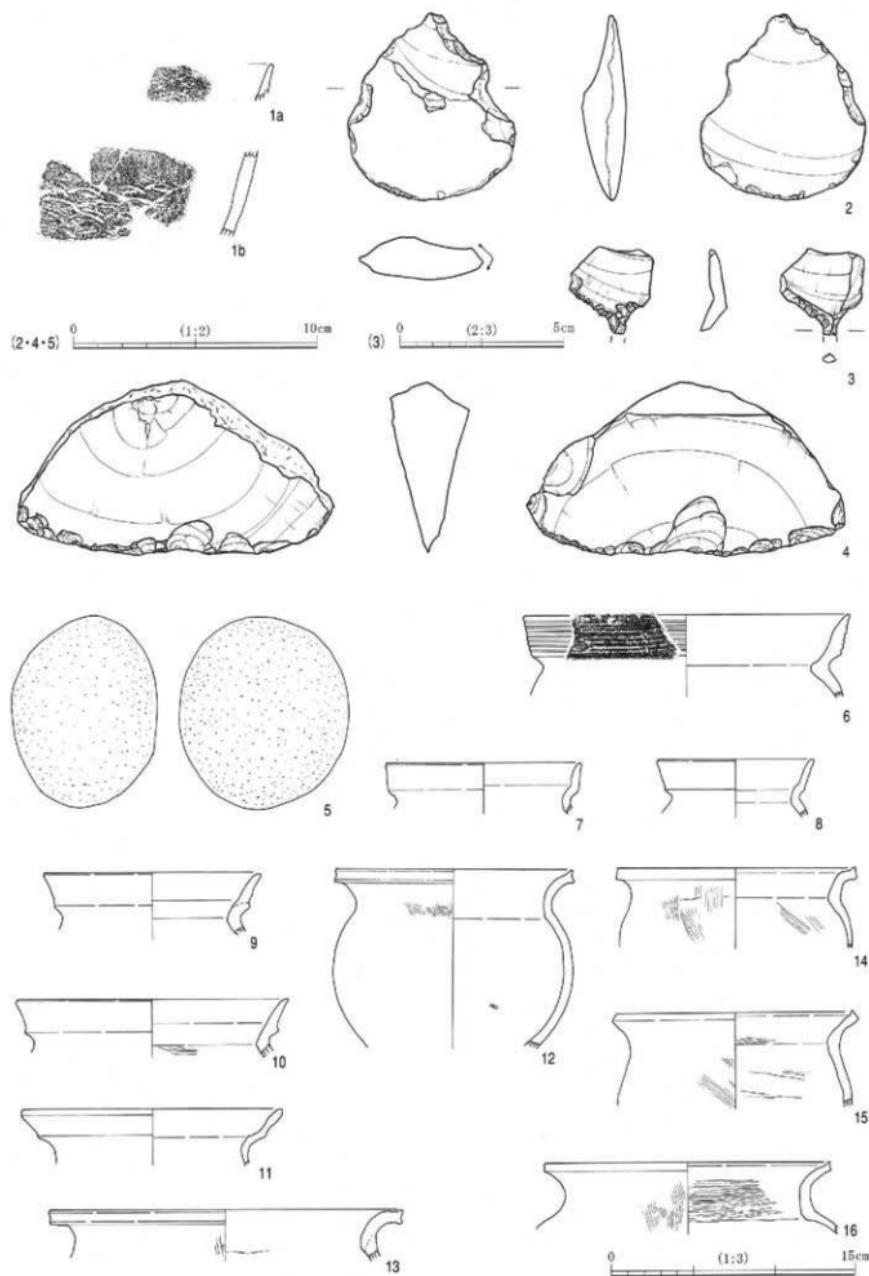


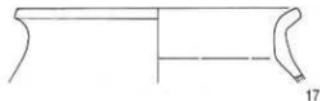








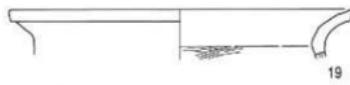




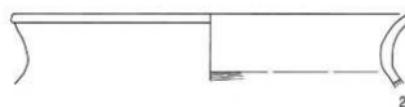
17



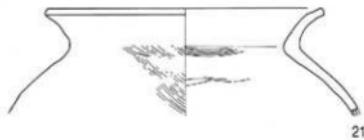
18



19



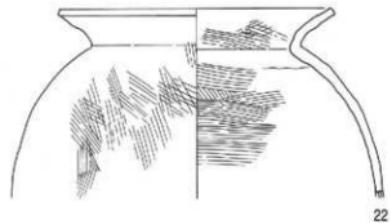
20



21



23



22



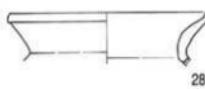
24



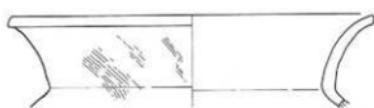
26



27



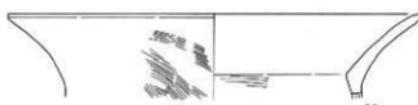
28



29



30



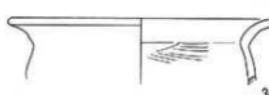
32



31



33

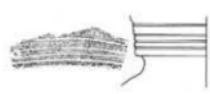


34



35

A scale bar with markings at 0, 5, 10, and 15 cm, with a ratio of 1:3 indicated below it.



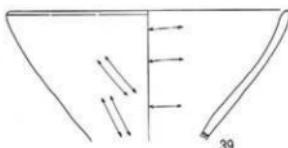
36



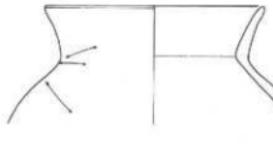
37



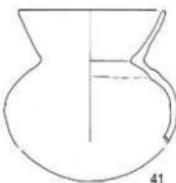
38



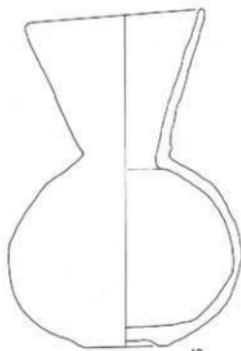
39



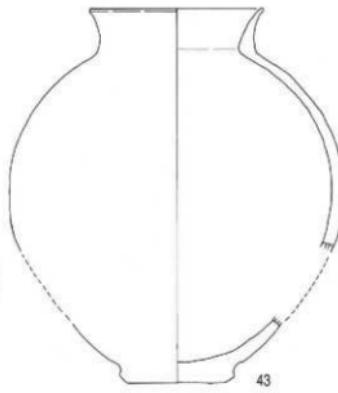
40



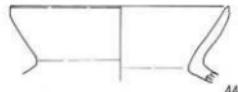
41



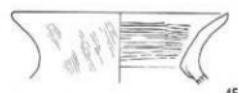
42



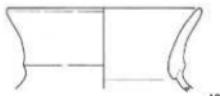
43



44



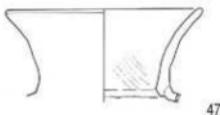
45



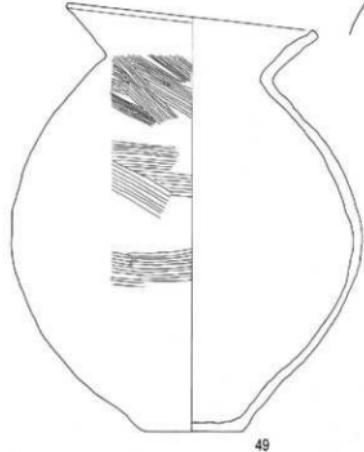
46



48

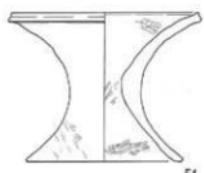


47

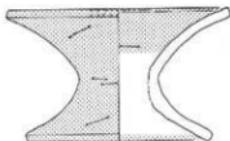


49

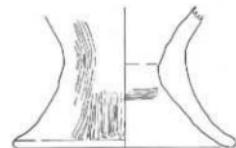
0
(1:3)
15cm



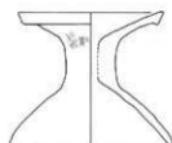
51



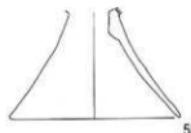
52 (赤彩)



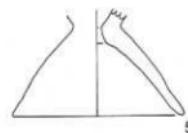
53



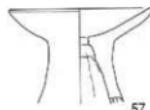
54



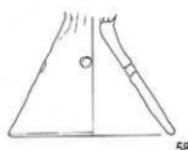
55



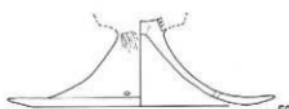
56



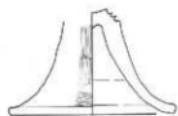
57



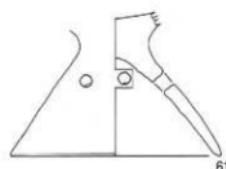
58



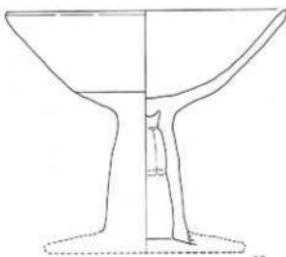
59



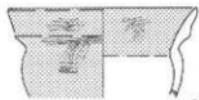
60



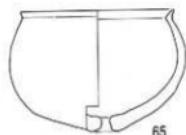
61



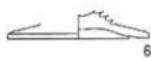
62



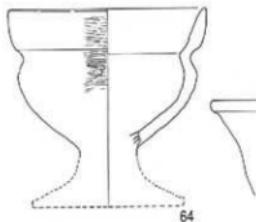
63 (赤彩)



65



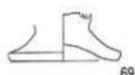
68



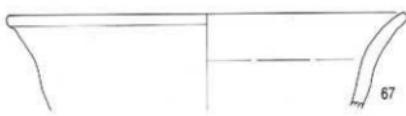
64



66



69

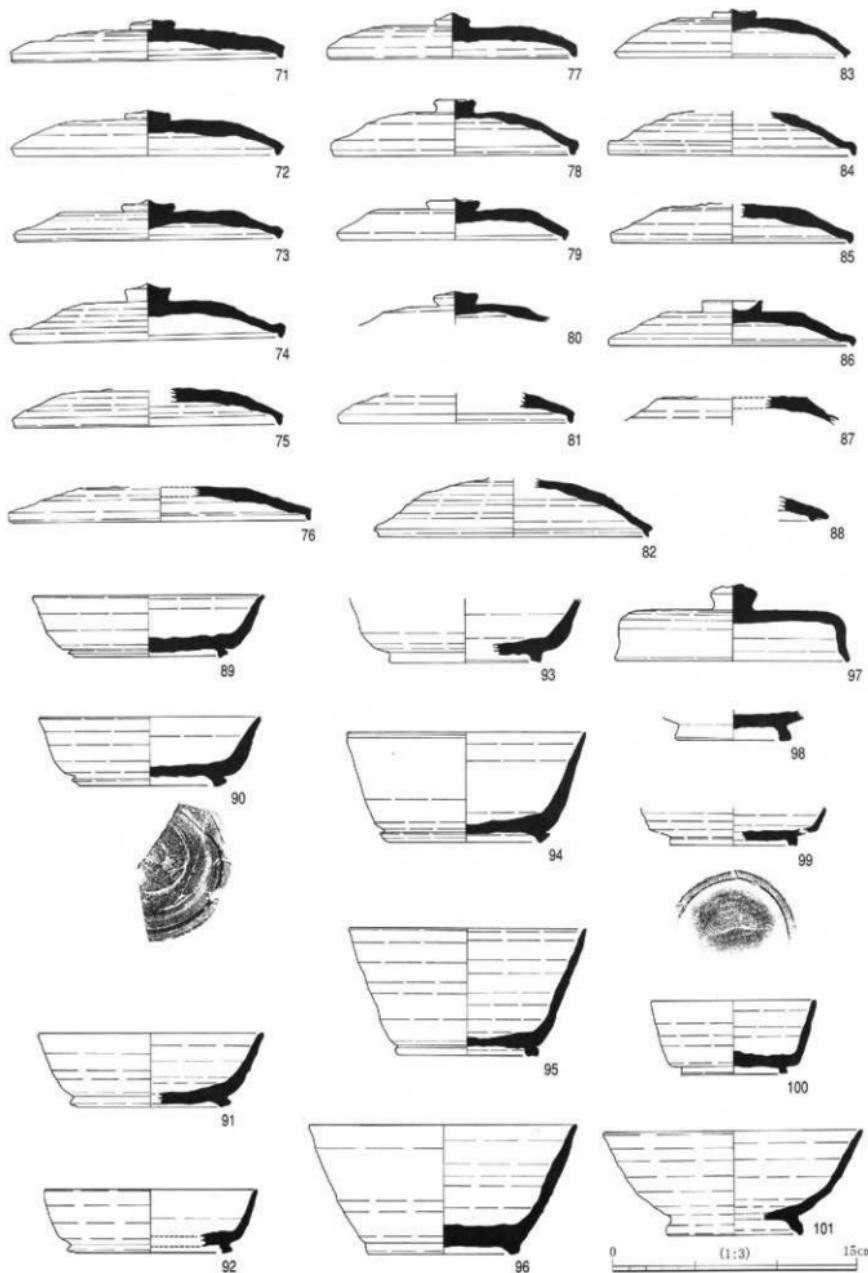


67



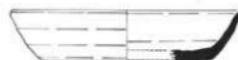
70

0 (1:3) 15cm

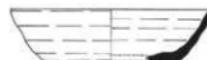




102



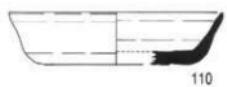
109



115



103



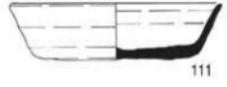
110



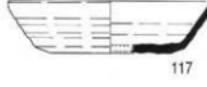
116



104



111



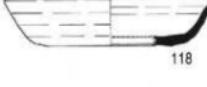
117



105



112



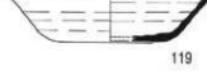
118



106



113



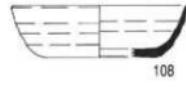
119



107



120



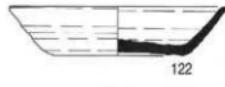
108



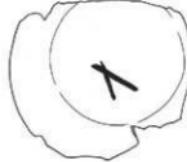
114



121



122



人



124

序



126



金



人

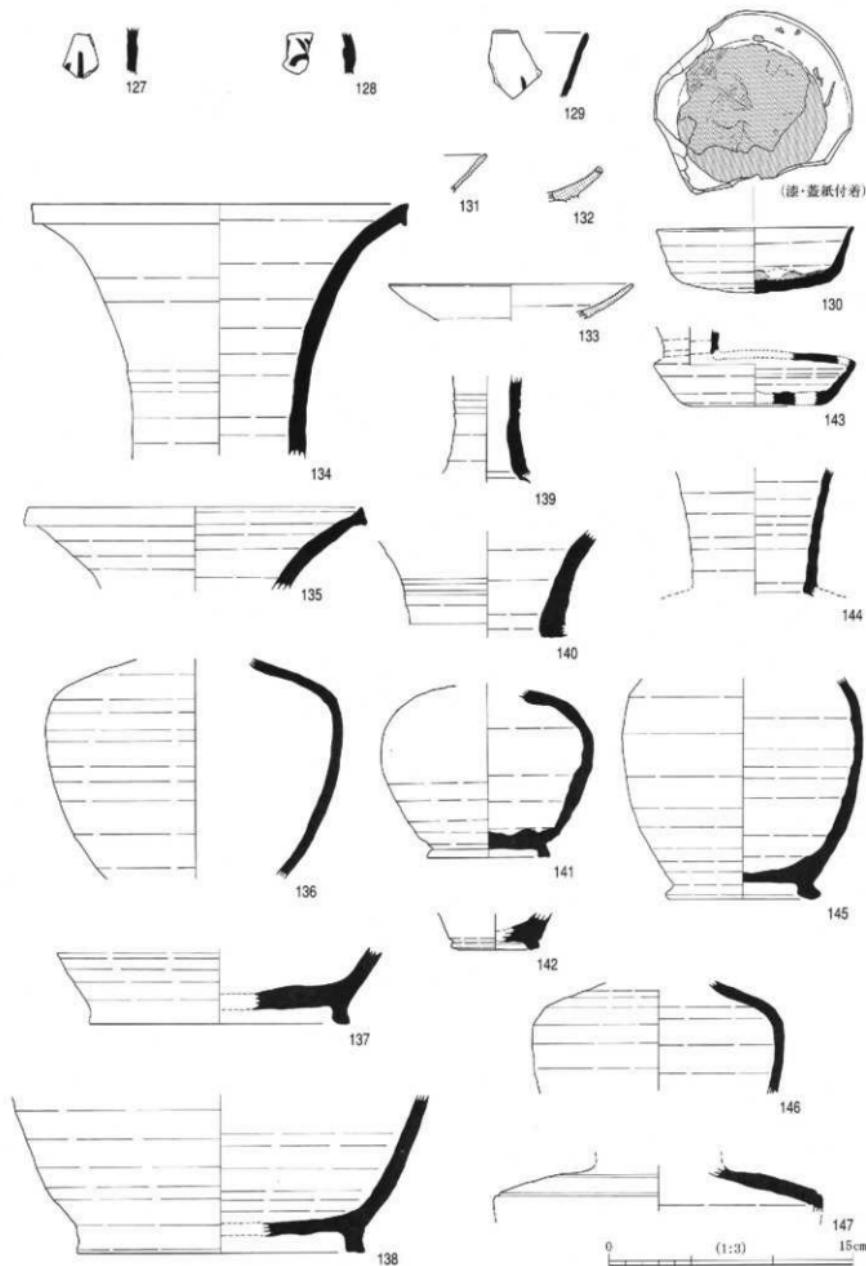


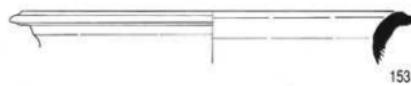
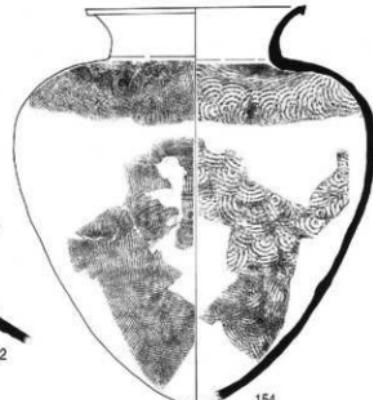
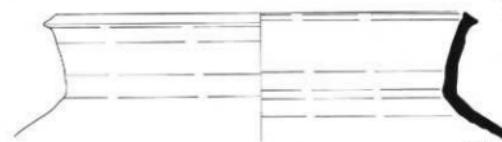
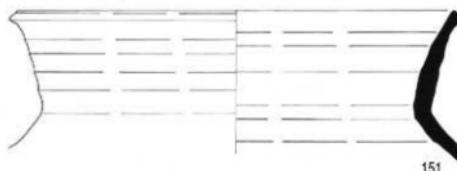
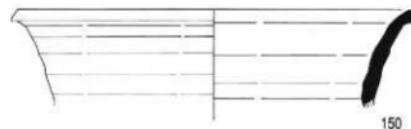
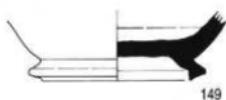
125



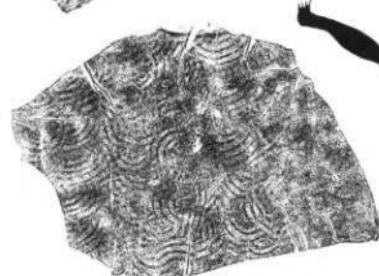
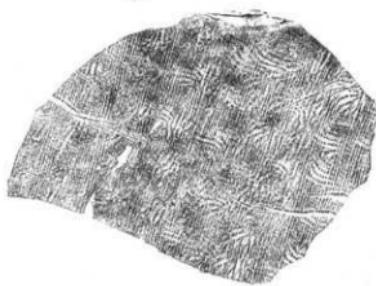
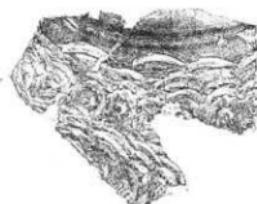
123

0 (1:3) 15cm

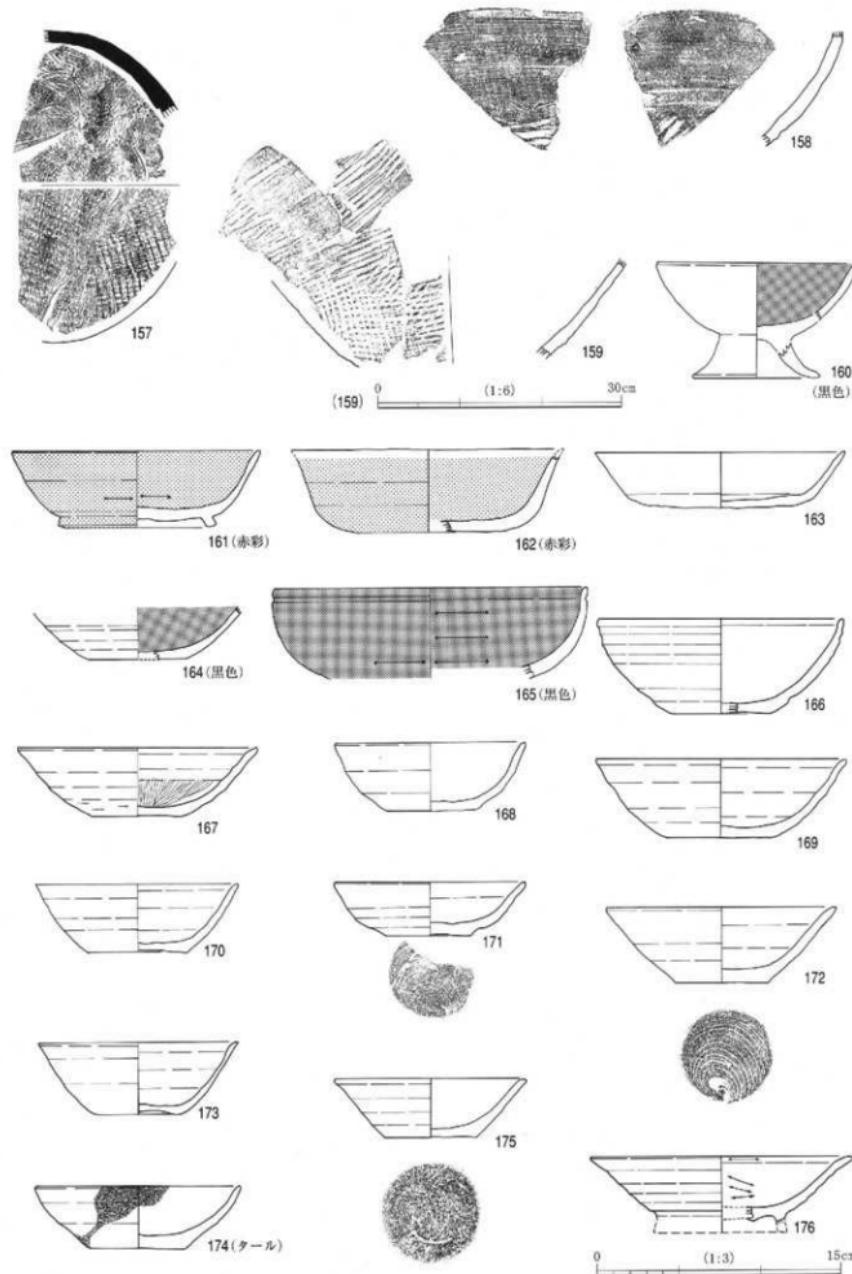


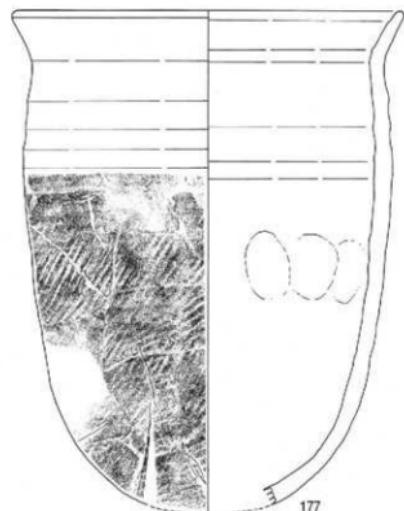


(154) 0 (1:6) 30cm

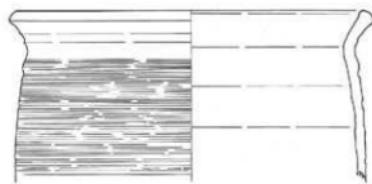


0 (1:3) 15cm

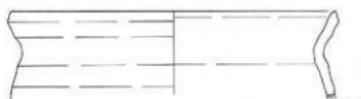




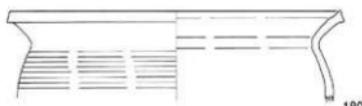
177



178



179



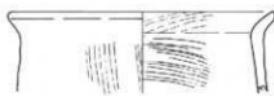
180



183



181



182



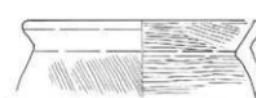
184



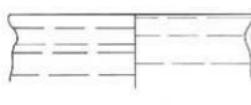
188



191



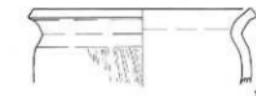
192



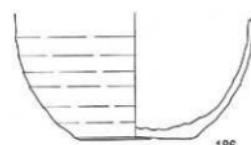
185



189



193



186



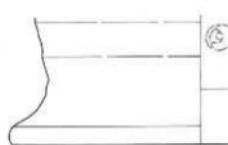
190



194

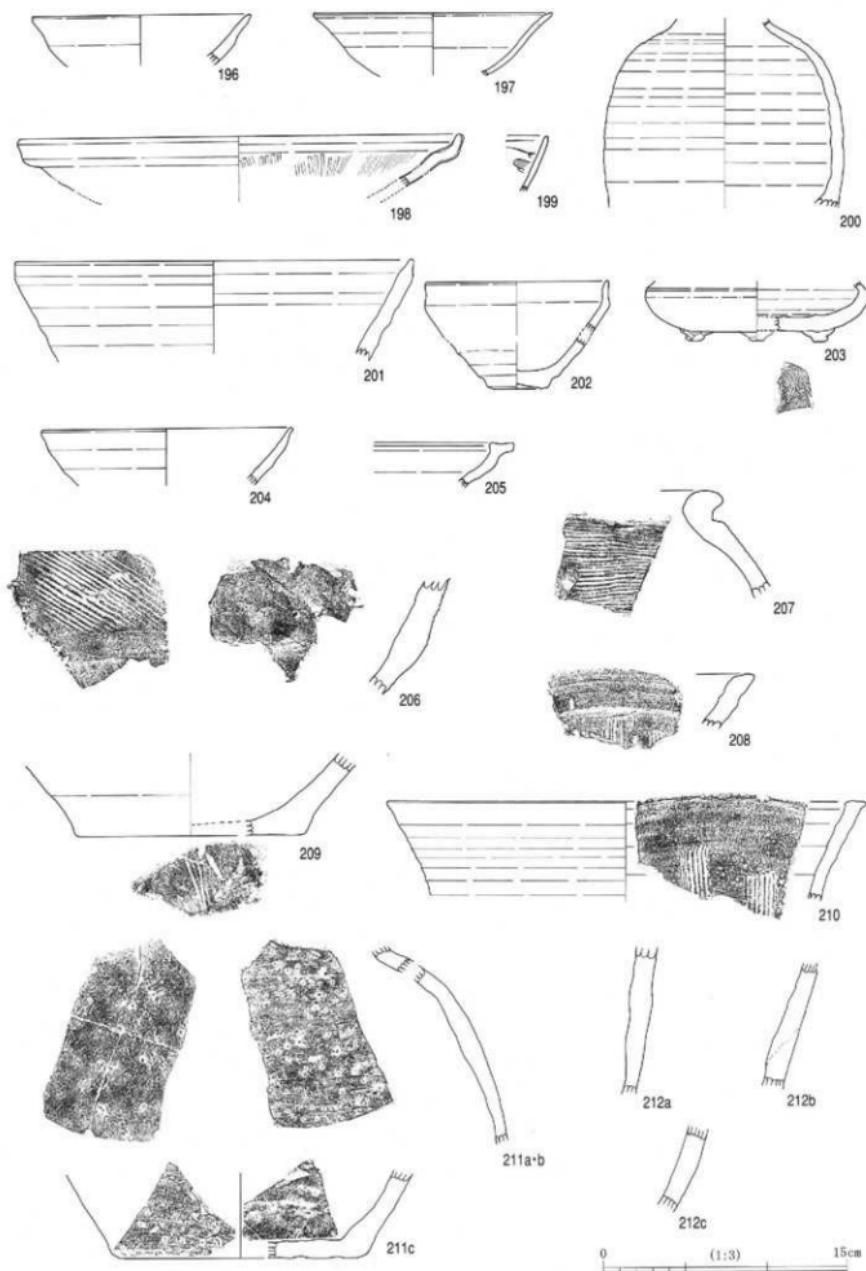


187



195

0 (1:3) 15cm

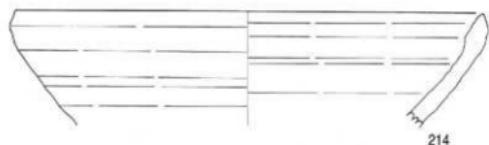




213a



213c



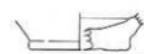
214



215



216



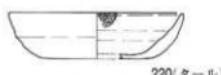
217



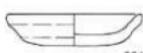
218



219



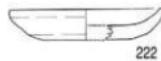
220(タール)



221



223



224



225(タール)



229



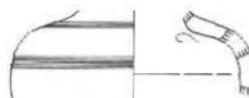
226



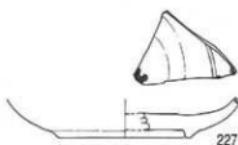
228



230



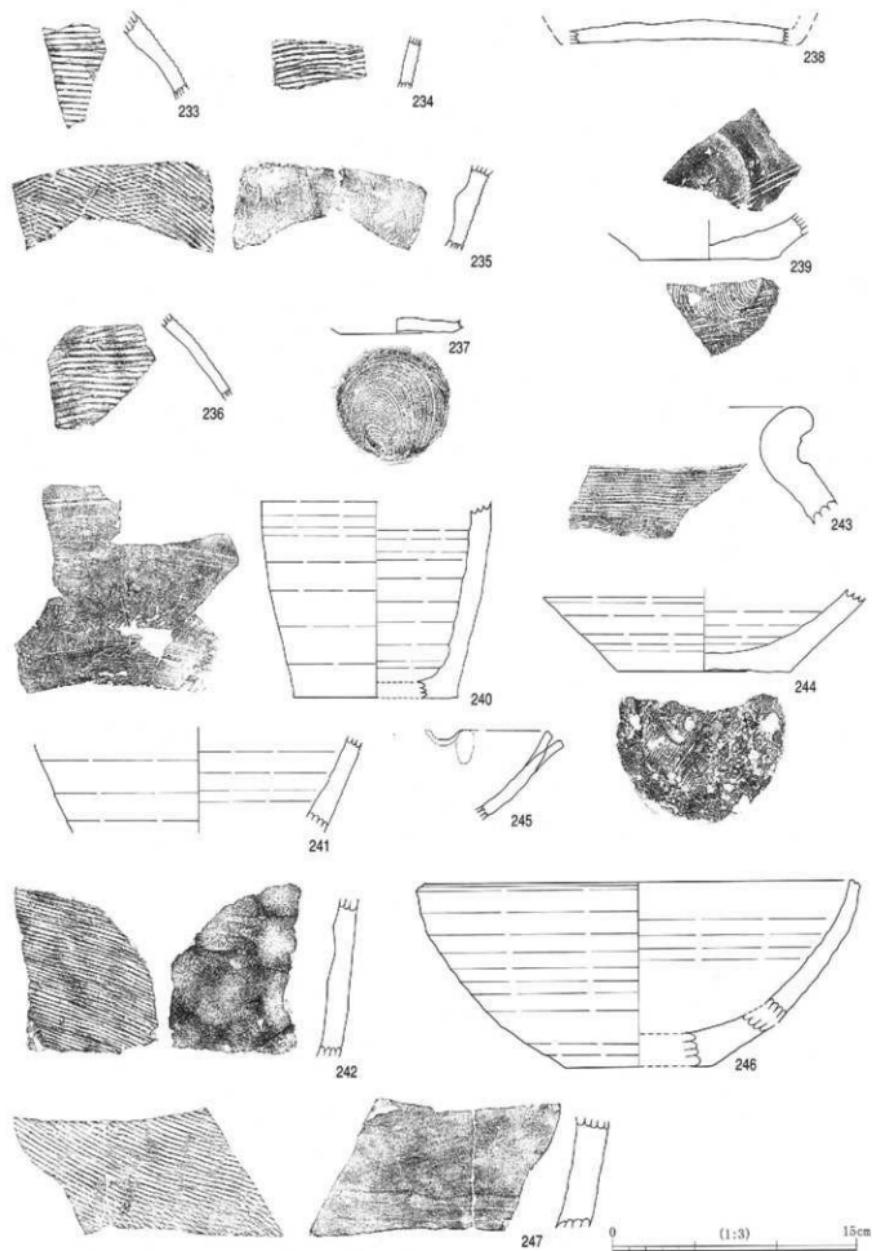
231

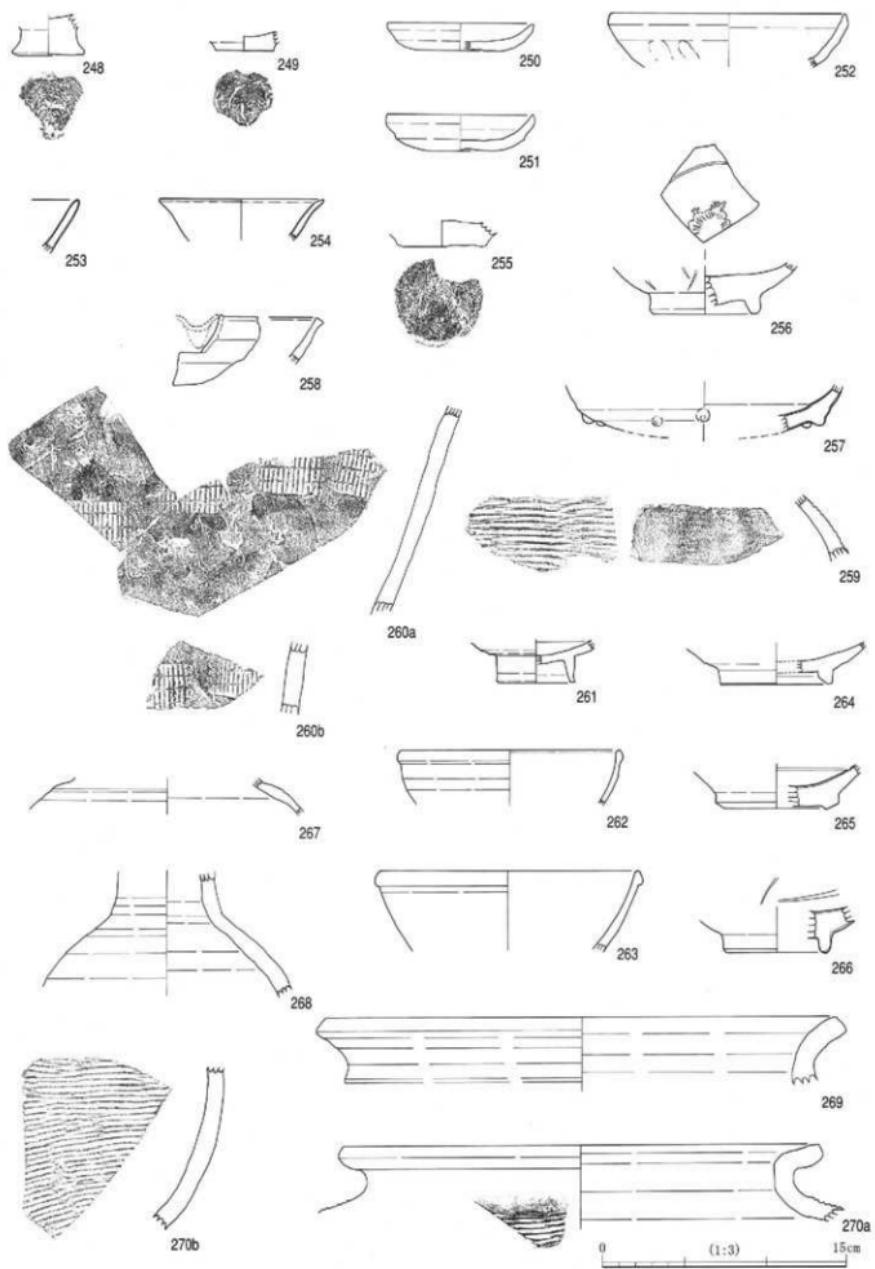


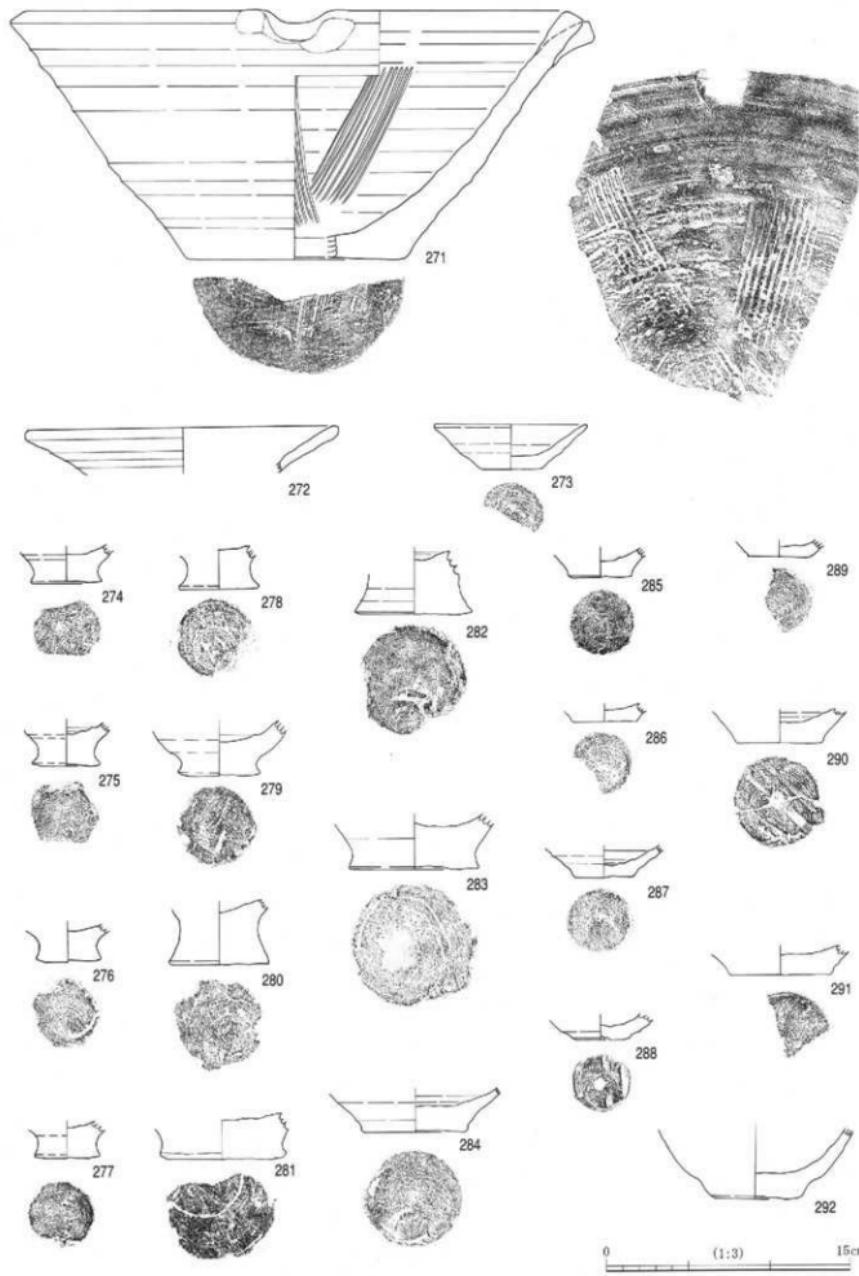
227

(228) 0 (1:2) 5cm

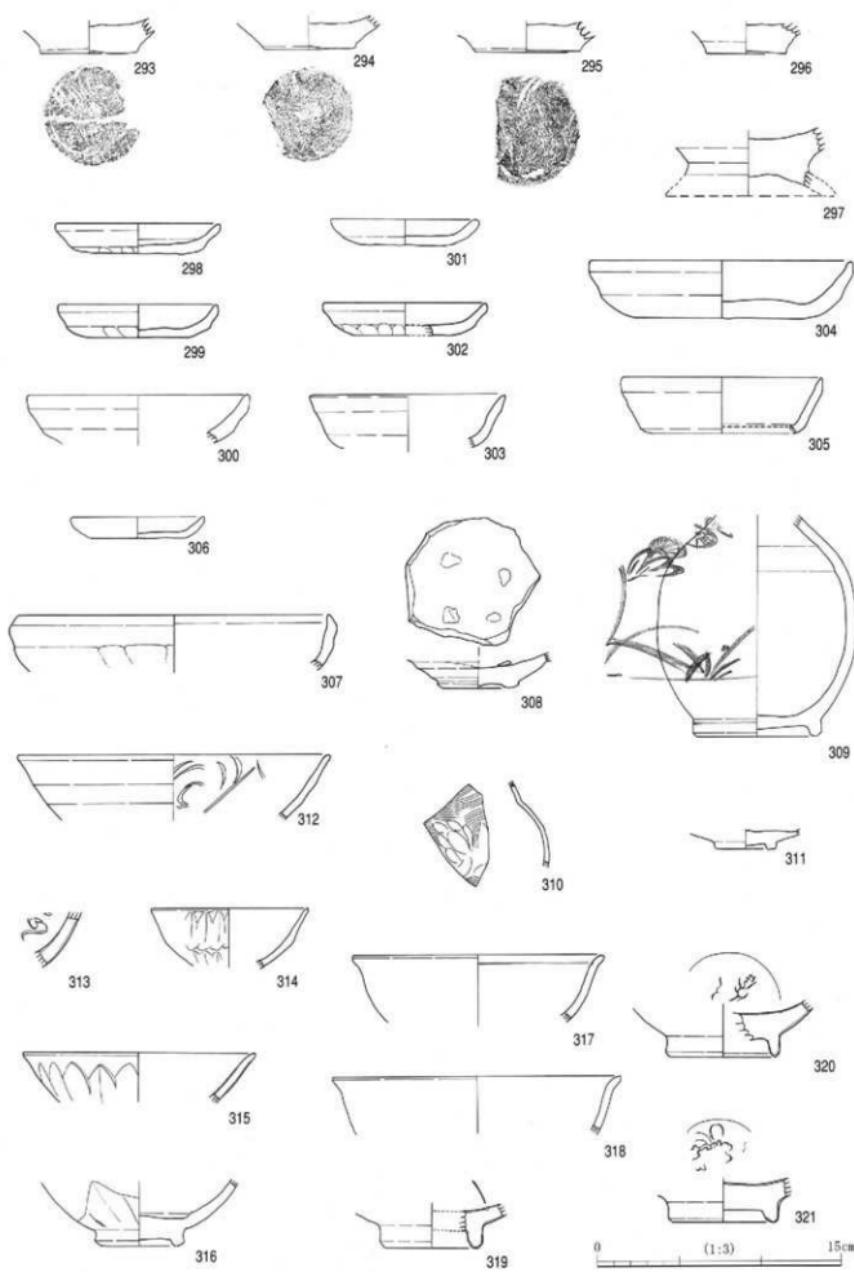
0 (1:3) 15cm

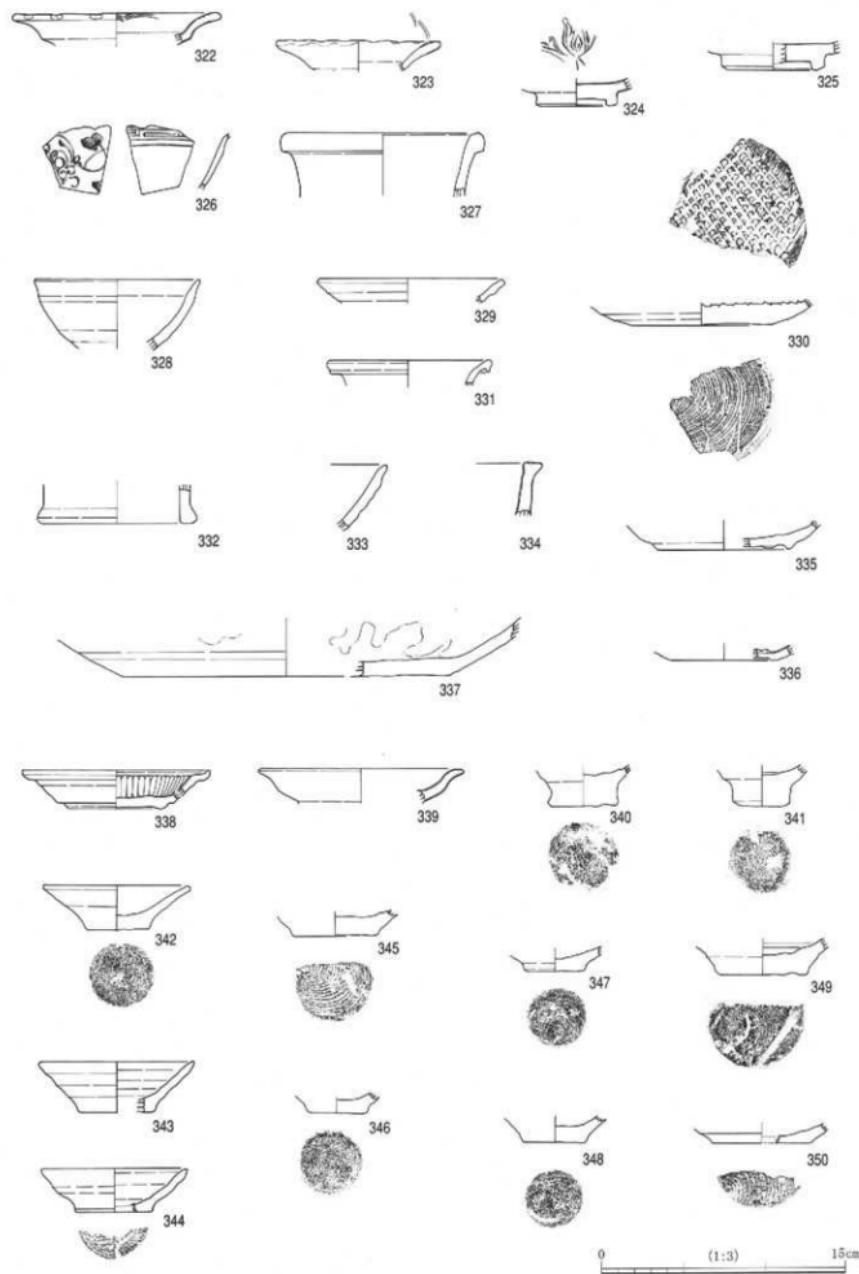




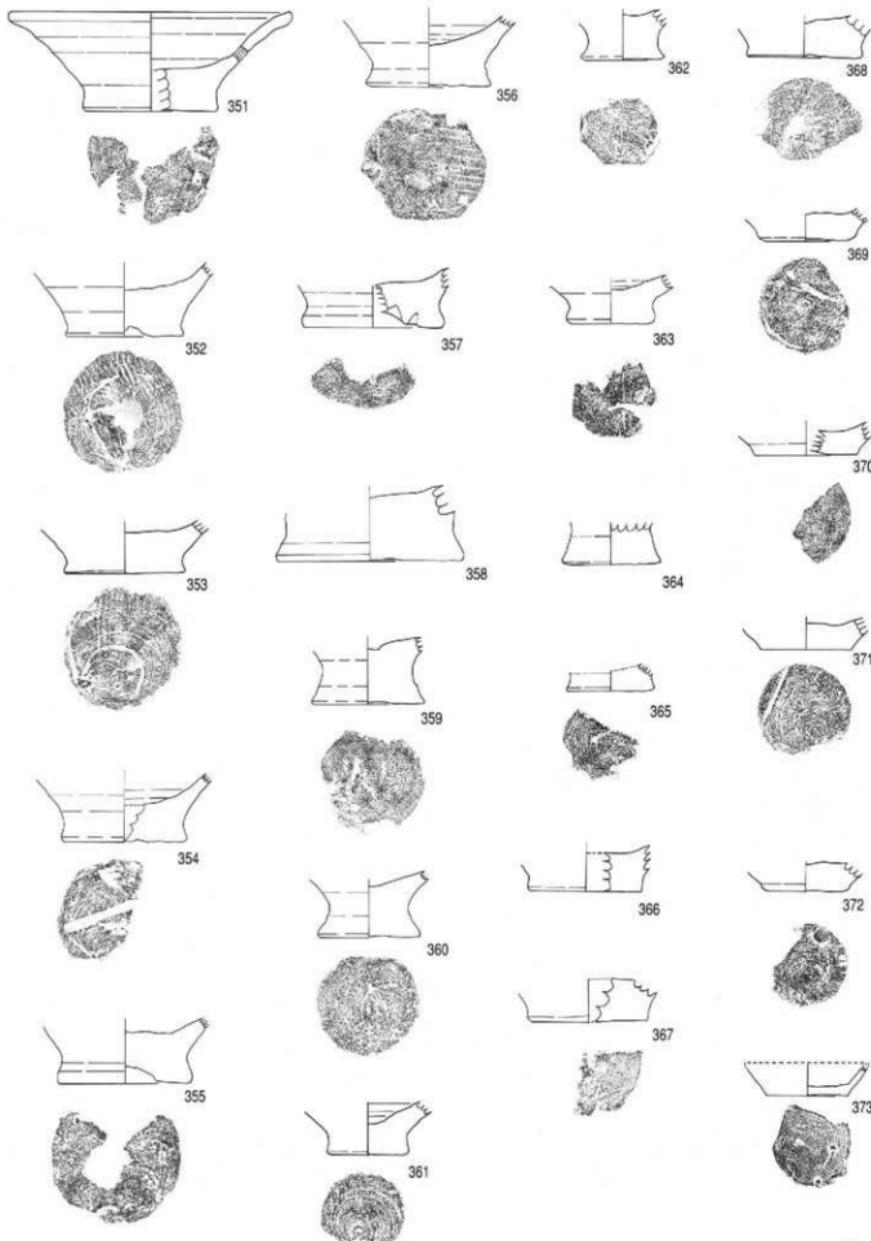


0 (1:3) 15cm

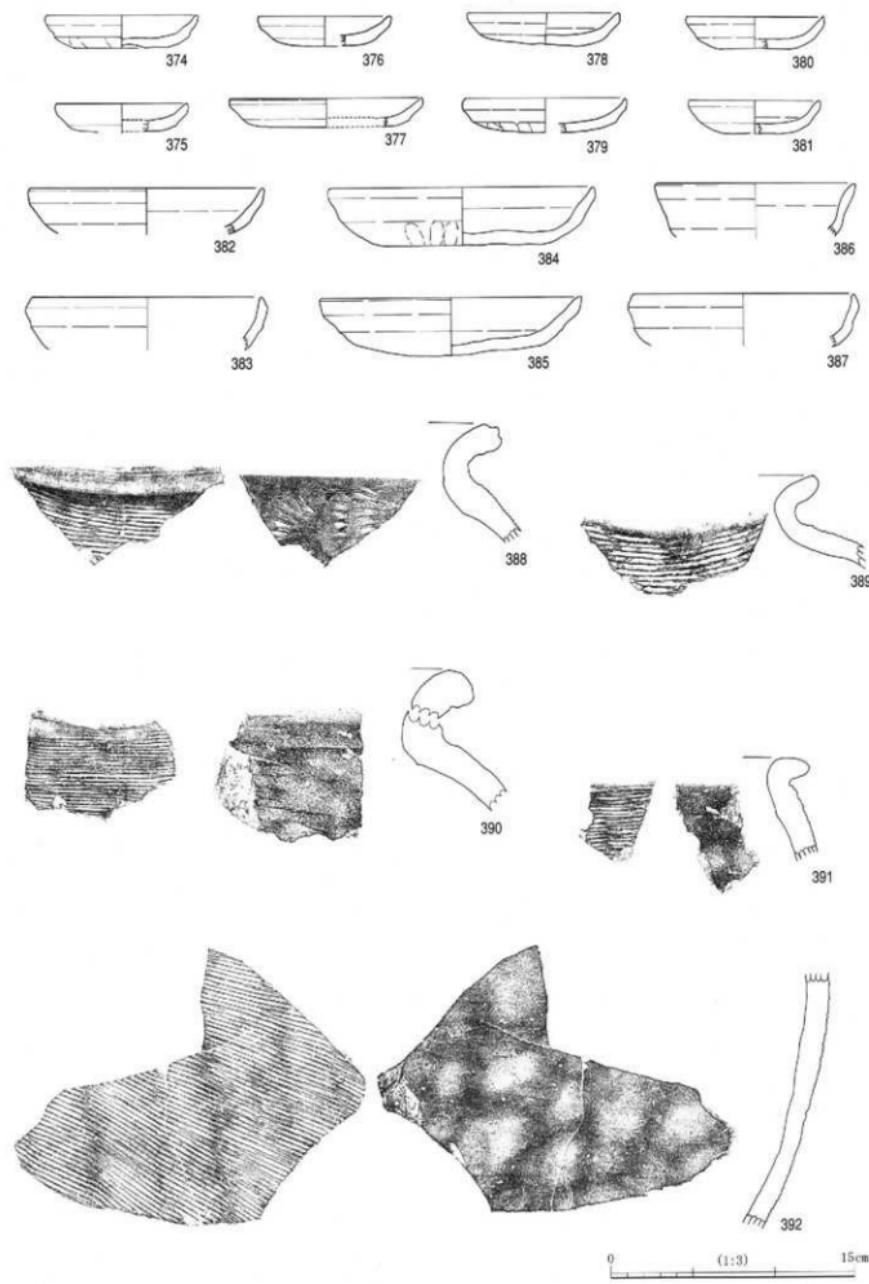


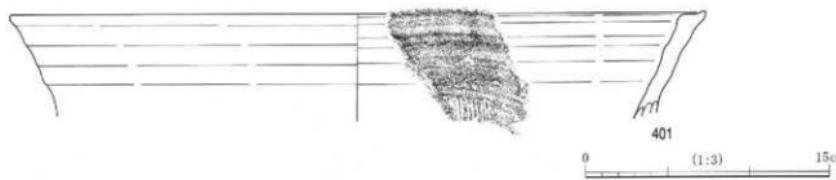
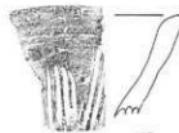
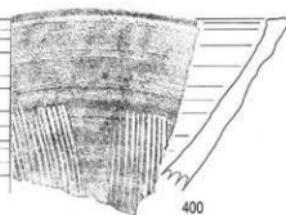
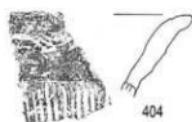
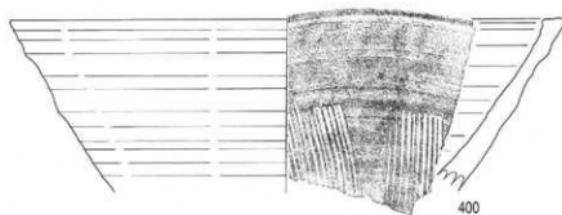
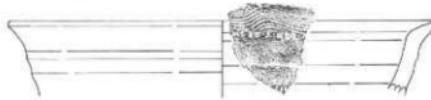
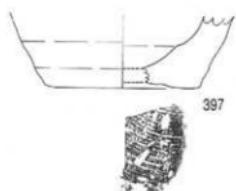
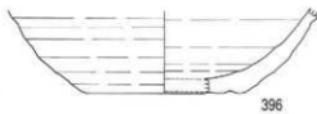
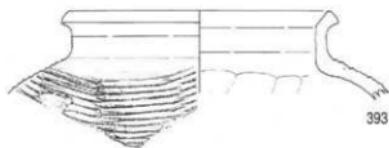


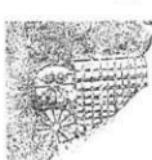
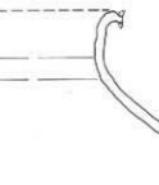
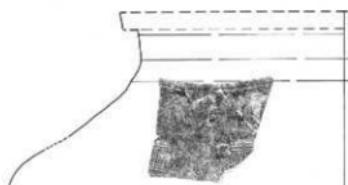
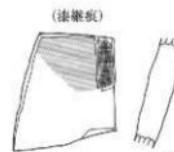
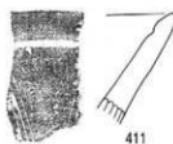
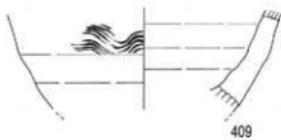
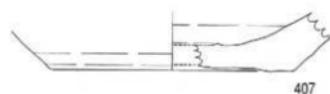
0 (1:3) 15cm

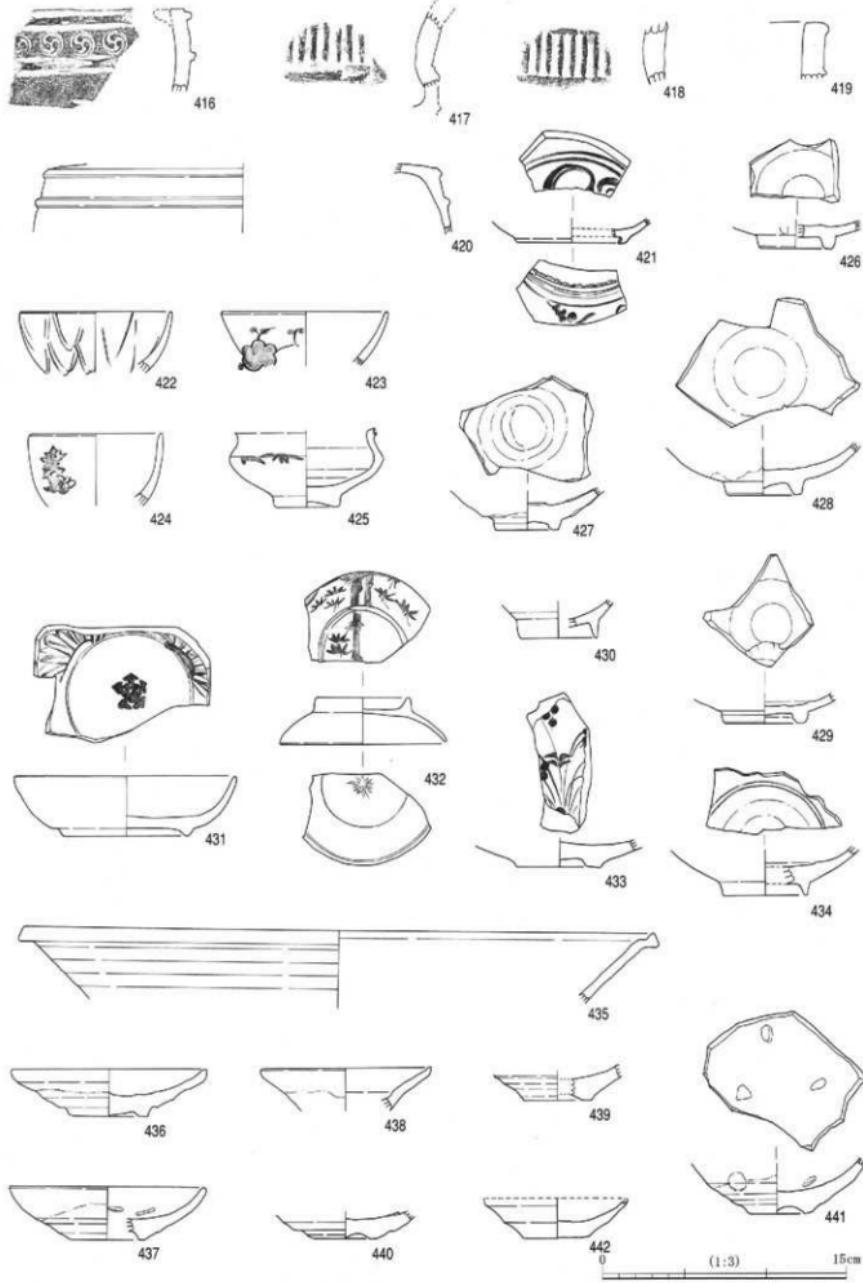


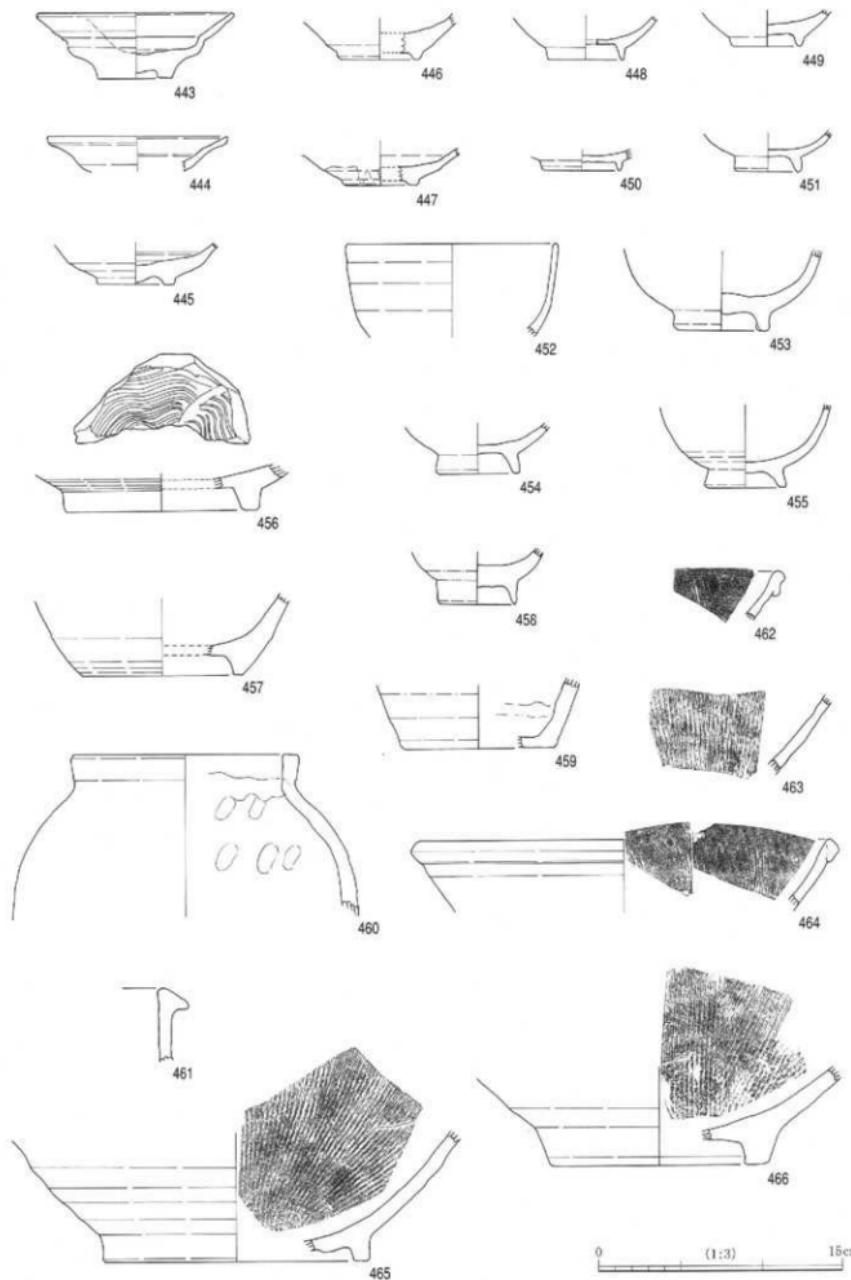
0 (1:3) 15cm



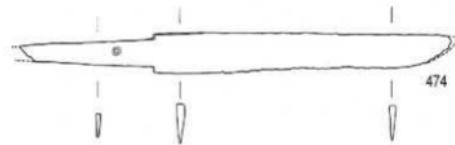
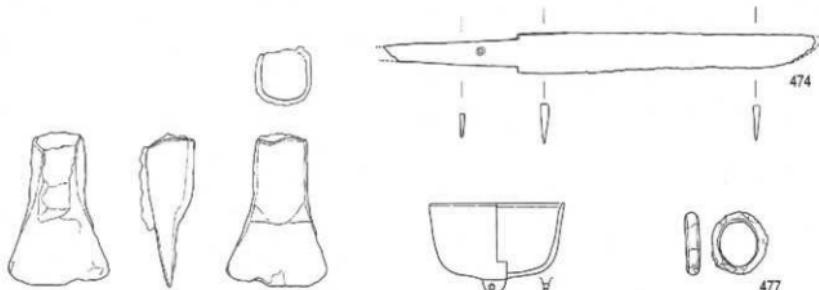
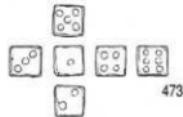
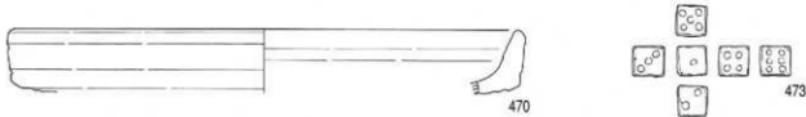
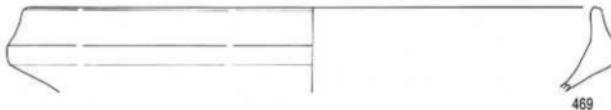
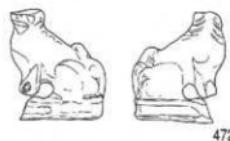
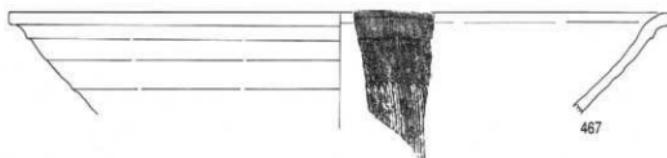






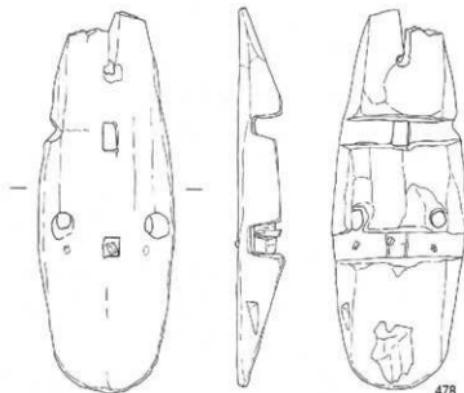


0 (1:3) 15cm

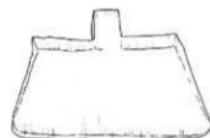


(471・472・477) 0 (1:2) 5cm

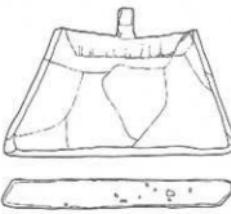
0 (1:3) 15cm



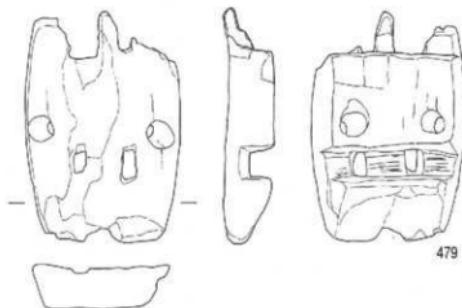
478



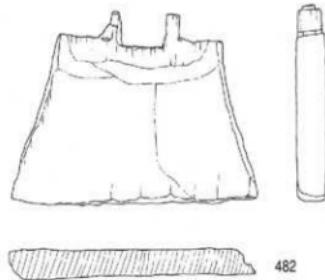
480



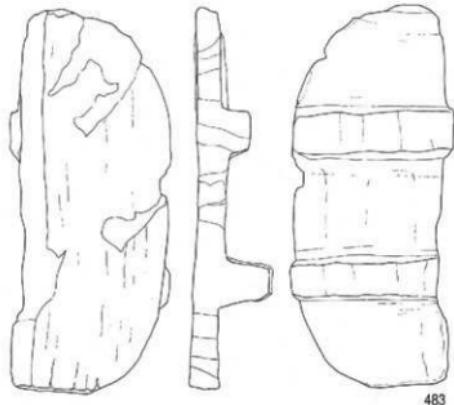
481



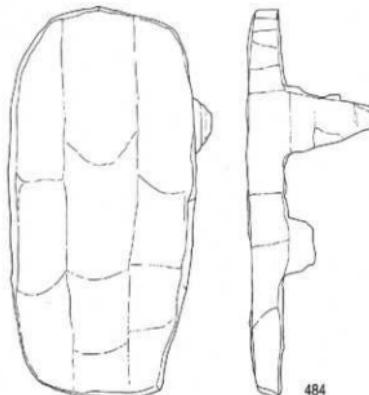
479



482

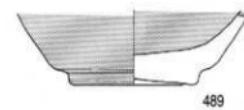
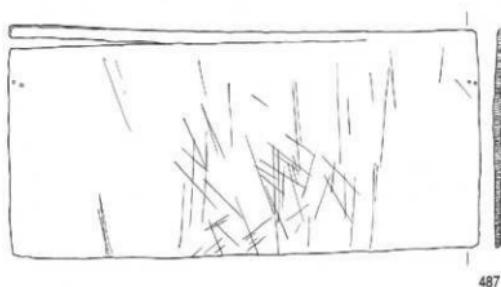
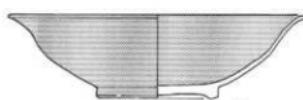
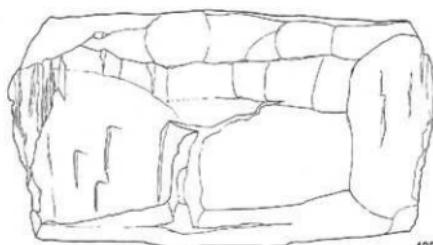
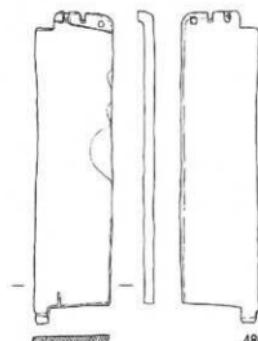
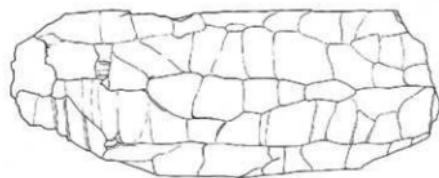
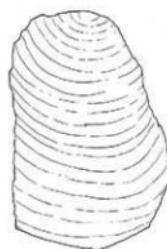
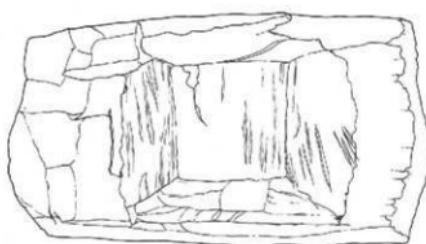


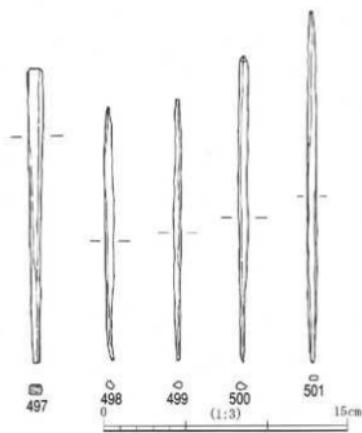
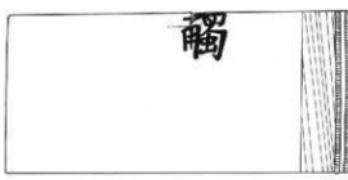
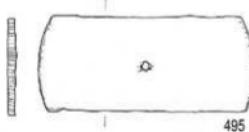
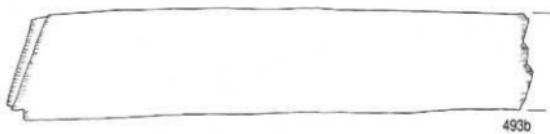
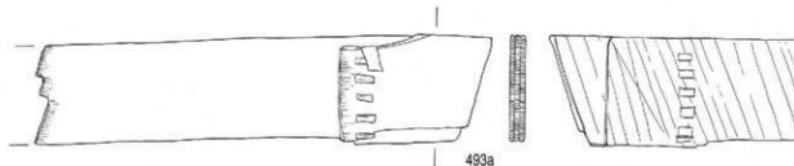
483

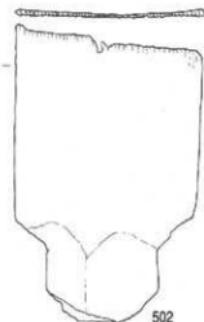


484

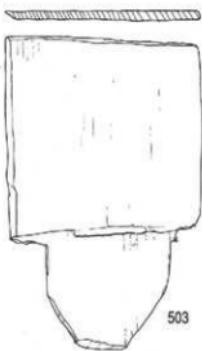
0 (1:3) 15cm







502



503



509



504



505



506



507



508



511



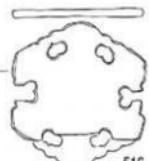
512



514



515

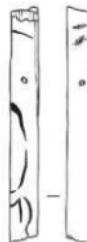


516

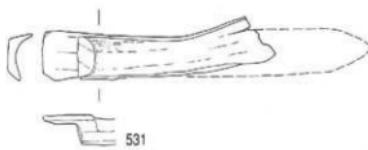
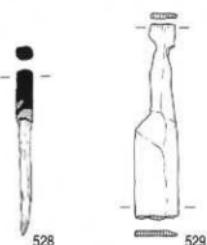
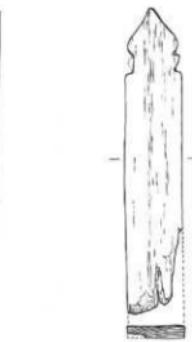
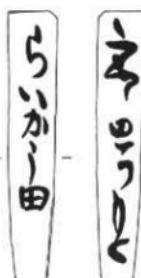
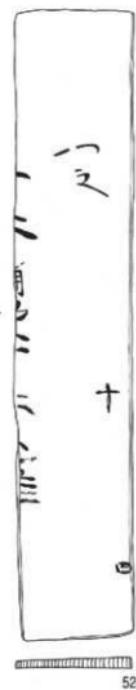
0

(1:3)

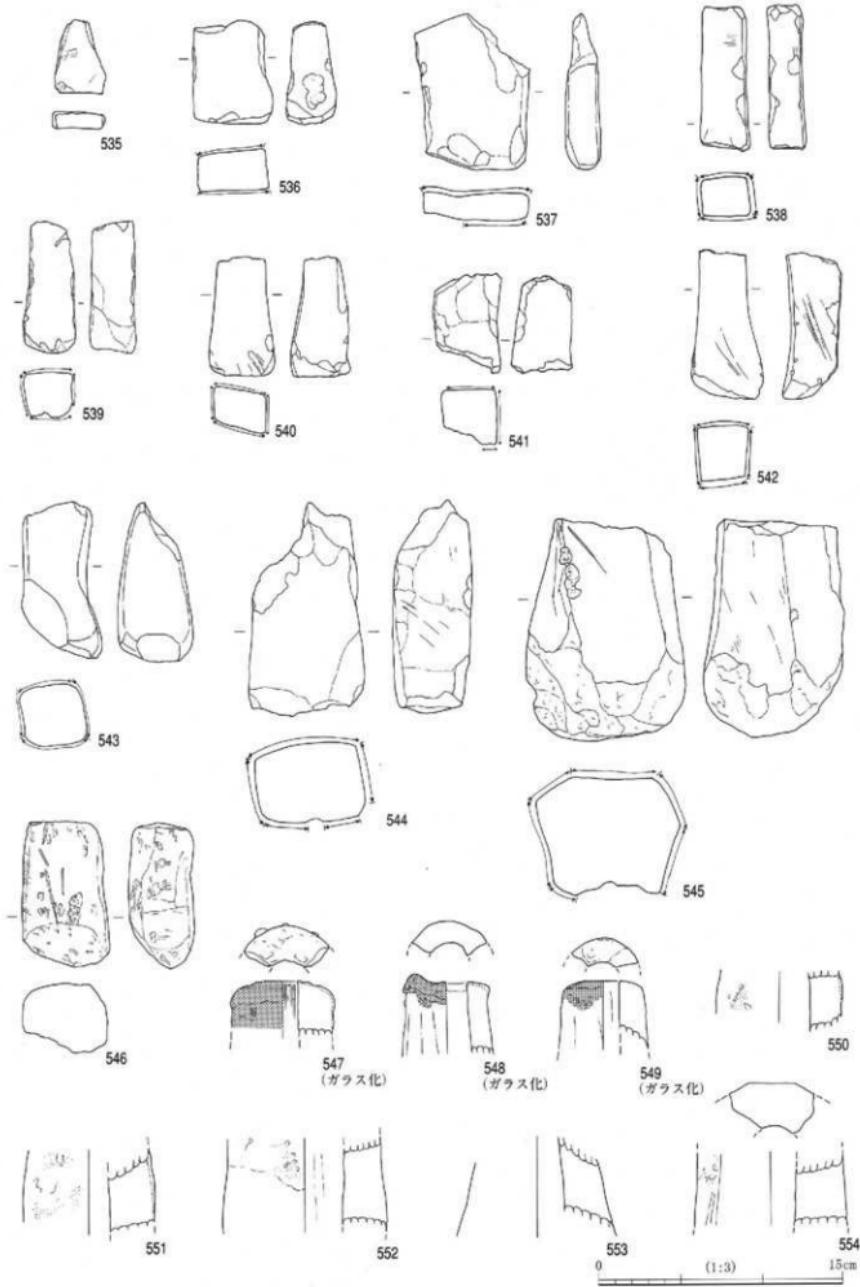
15cm



(518~523) 0 (1:2) 10cm
(517) 0 (1:3) 15cm



(524・525・534) 0 (1:2) 10cm
(526~533) 0 (1:3) 15en







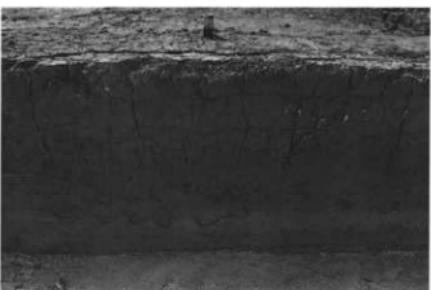
第1確認面完掘状況



第3確認面完掘状況



基本土層AA'



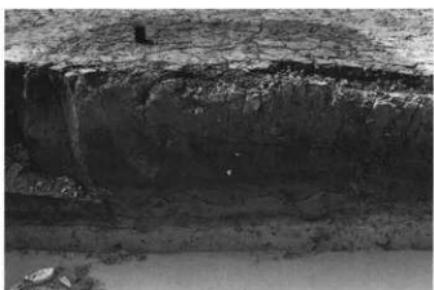
基本土層BB'



基本土層CC'



基本土層DD'



基本土層EE'



基本土層FF'



基本土層FF'



作業風景



SB02 完掘状況 北から



SB02 完掘状況 南から



SB02 東側周溝断面 (AA')



SD01との切合い状況 (AA')



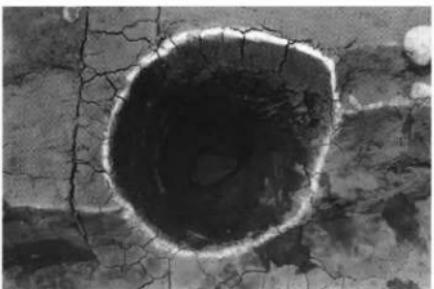
SB02 土層断面1 (BB')



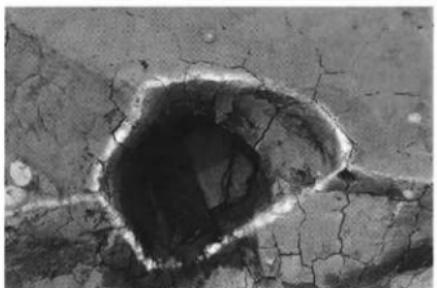
SB02 土層断面2 (BB')



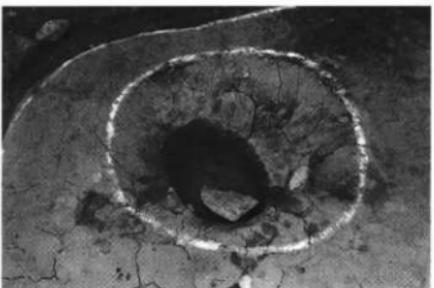
SB02 北側集石 東から



SB02 P6 東から



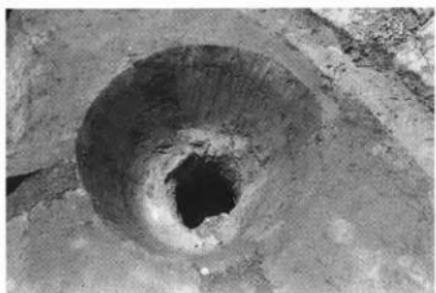
SB02 P7 東から



SB02 P9 東から



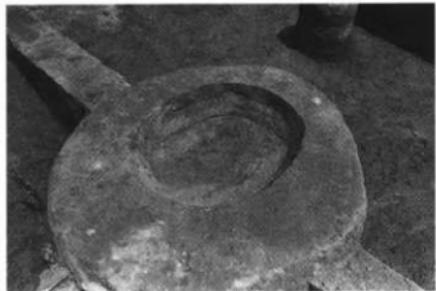
SB20 完掘状況 西から



SE08 完掘状況 東から



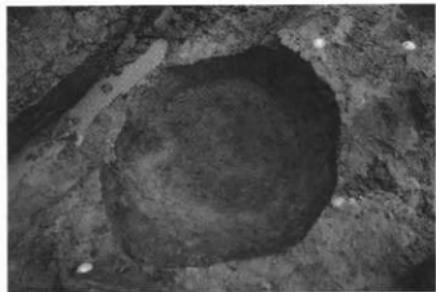
SK07 土層断面 南から



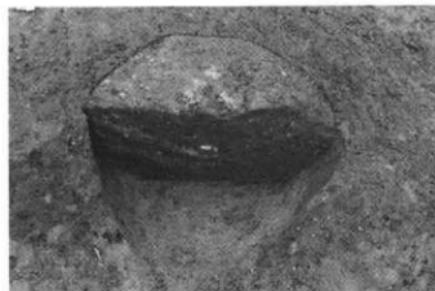
SK07 完掘状況 南から



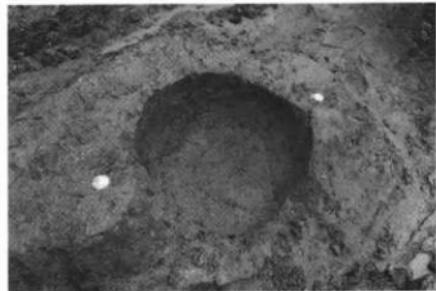
SK09 土層断面 南東から



SK09 完掘状況 南から



SK18 土層断面 南東から



SK18 完掘状況 南から



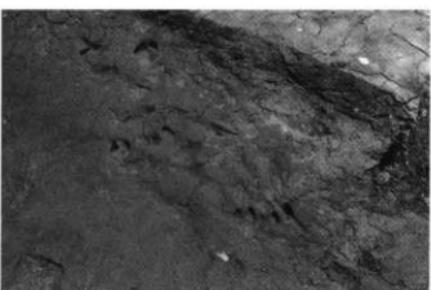
SD01 土層断面 南西から (1)



SD01 土層断面 南西から (2)



SD01・SD03 完掘状況 北東から



SD01 溝底面足跡検出状況



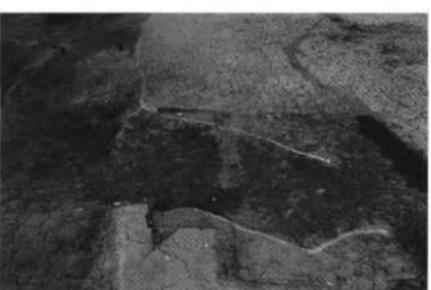
SD03 杭検出状況 南から



SD06 検出状況 東から



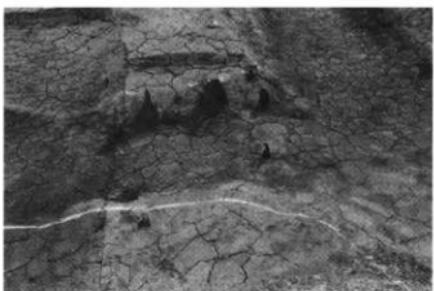
SD04 土層断面 南東から



SD04 完掘状況 西から



SD16・SD15・SD05 検出状況 南東から



SD15 分岐部分 南東から



SD05 土層断面 北西から



SD15・16 土層断面 南東から



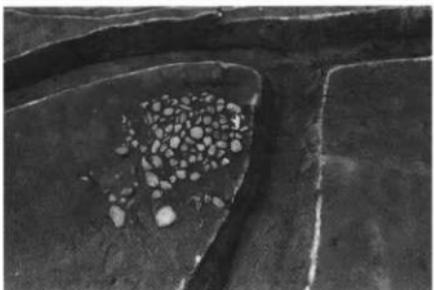
SD21・SD22 完掘状況 北西から



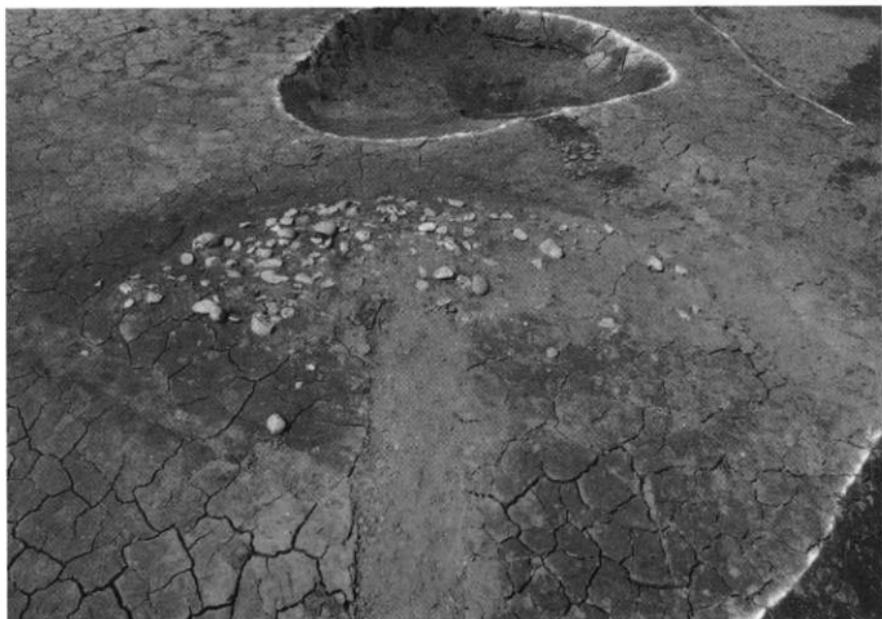
SD21・SD22 完掘状況 北東から



SD21 土層断面 南東から



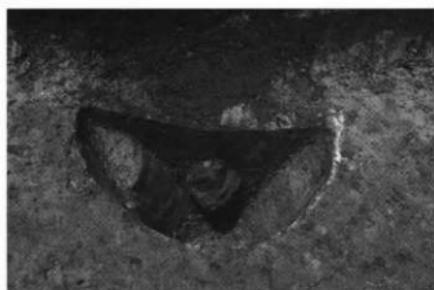
SX17 検出状況 東から



SX23 完掘状況 南から



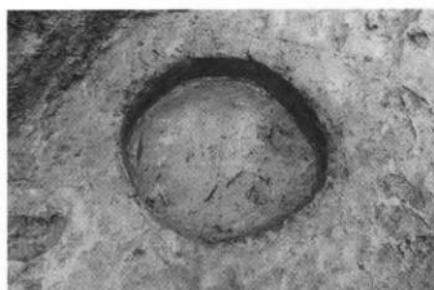
SX28 完掘状況 南から



SK27 土層断面 東から



SK27完掘状況 南東から



SK19 完掘状況 南東から



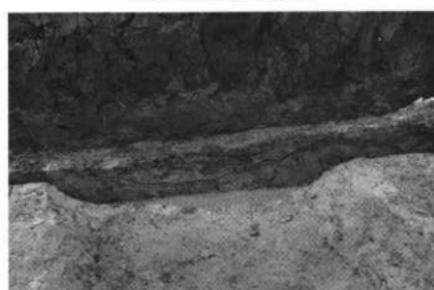
SD24・SD25 完掘状況 南東から



SD24 土層断面 北から



SD25 土層断面 南から



SD26 土層断面 東から



SD26 完掘状況 西から



SX14 土層断面 南西から



SX29 完掘状況 南西から



3Bグリッド 平安ピット群 南から



4Bグリッド 平安ピット群 東から



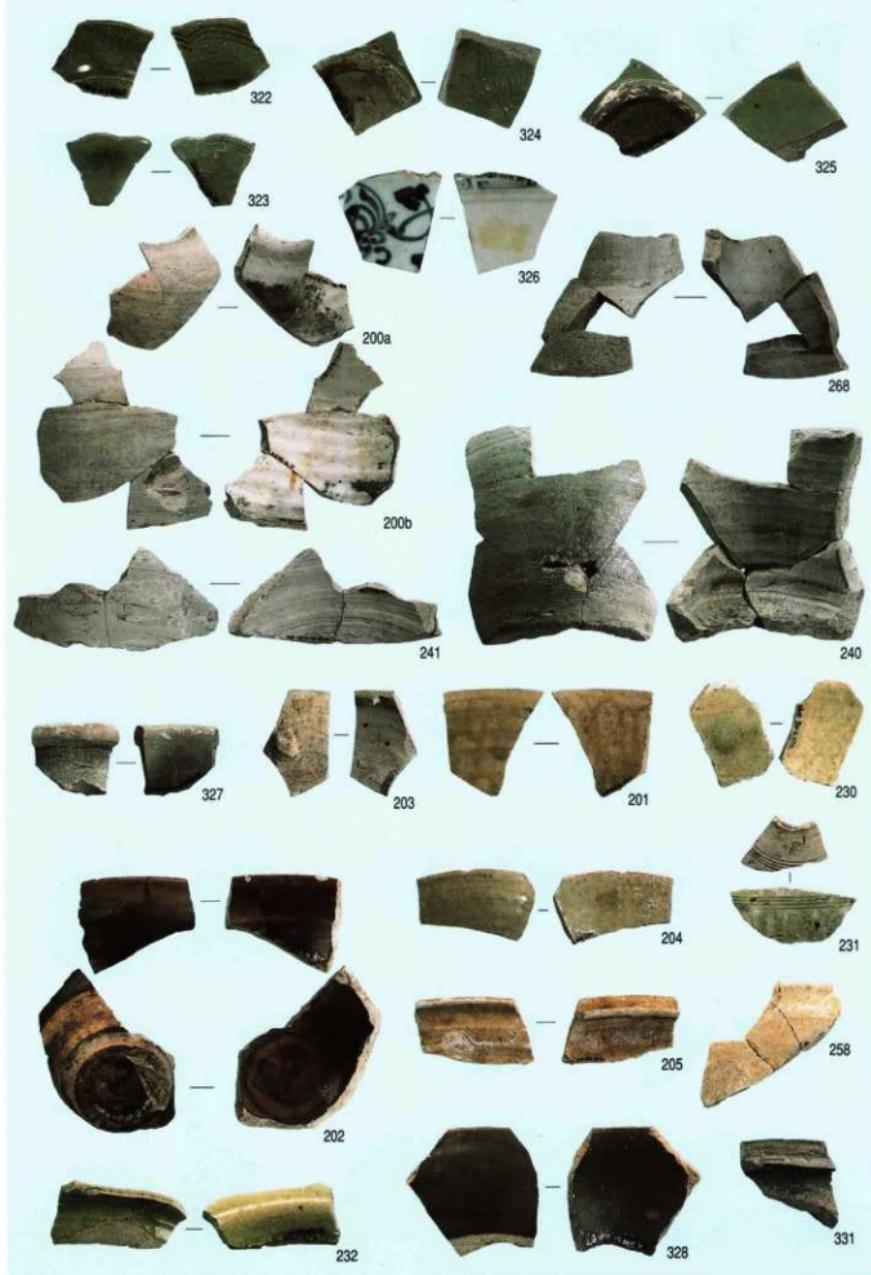
呪符(518) 出土状況



人面墨書石(534) 出土状況









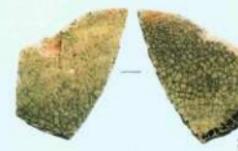
329

332

334



330



333



335



336



337



338a



338b



339



238



211a



211a



211b



211b



213c



213c



213c





441



442



443



444



445



446



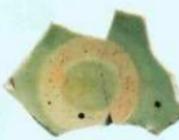
447



448



449



450



451



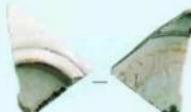
452



453



454



455



309



456



457



458



459



460



461



462



463



464



465



466



448



449



450



451



452



453



454



455



456



457



458



459



460



461



462



463



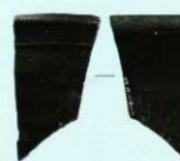
464



465



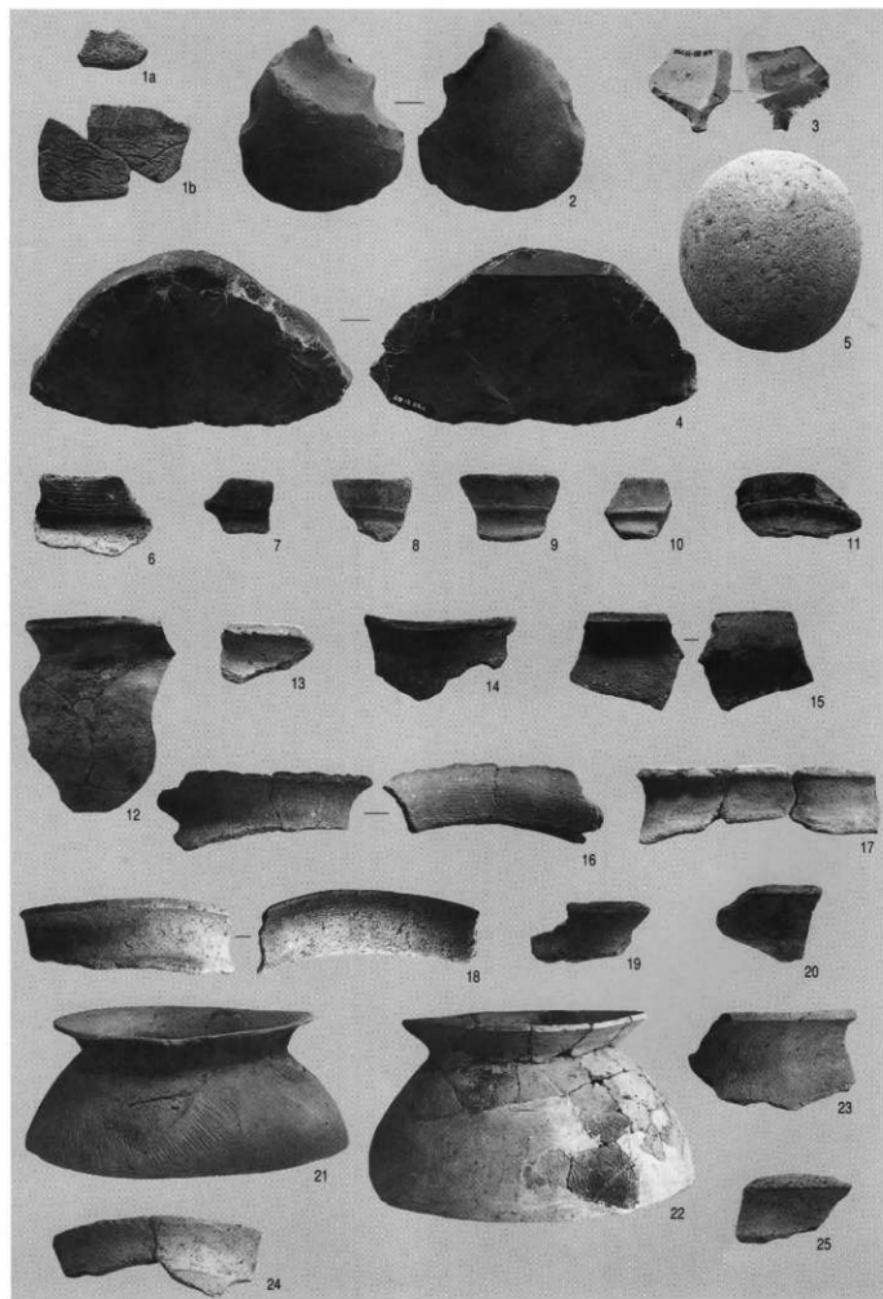
466

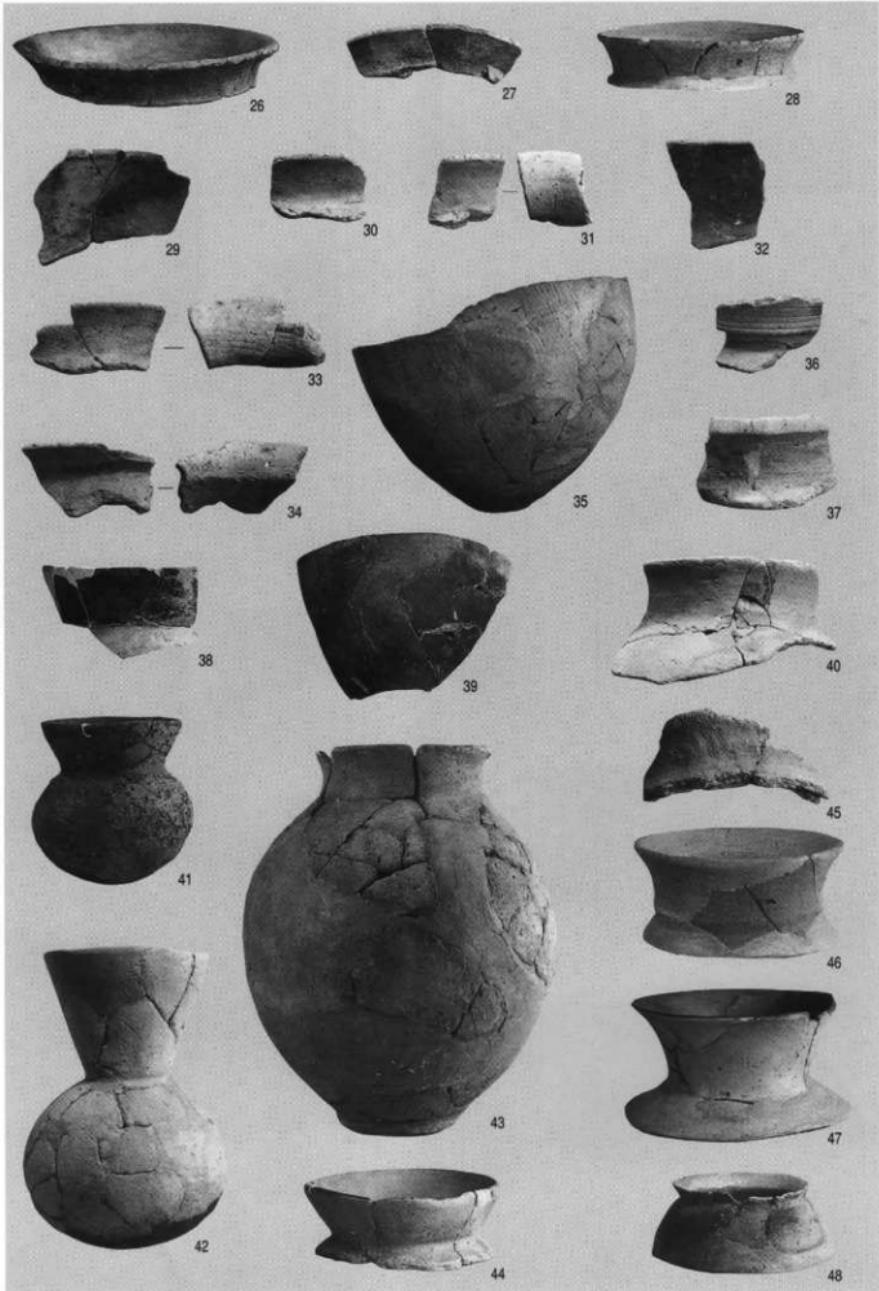


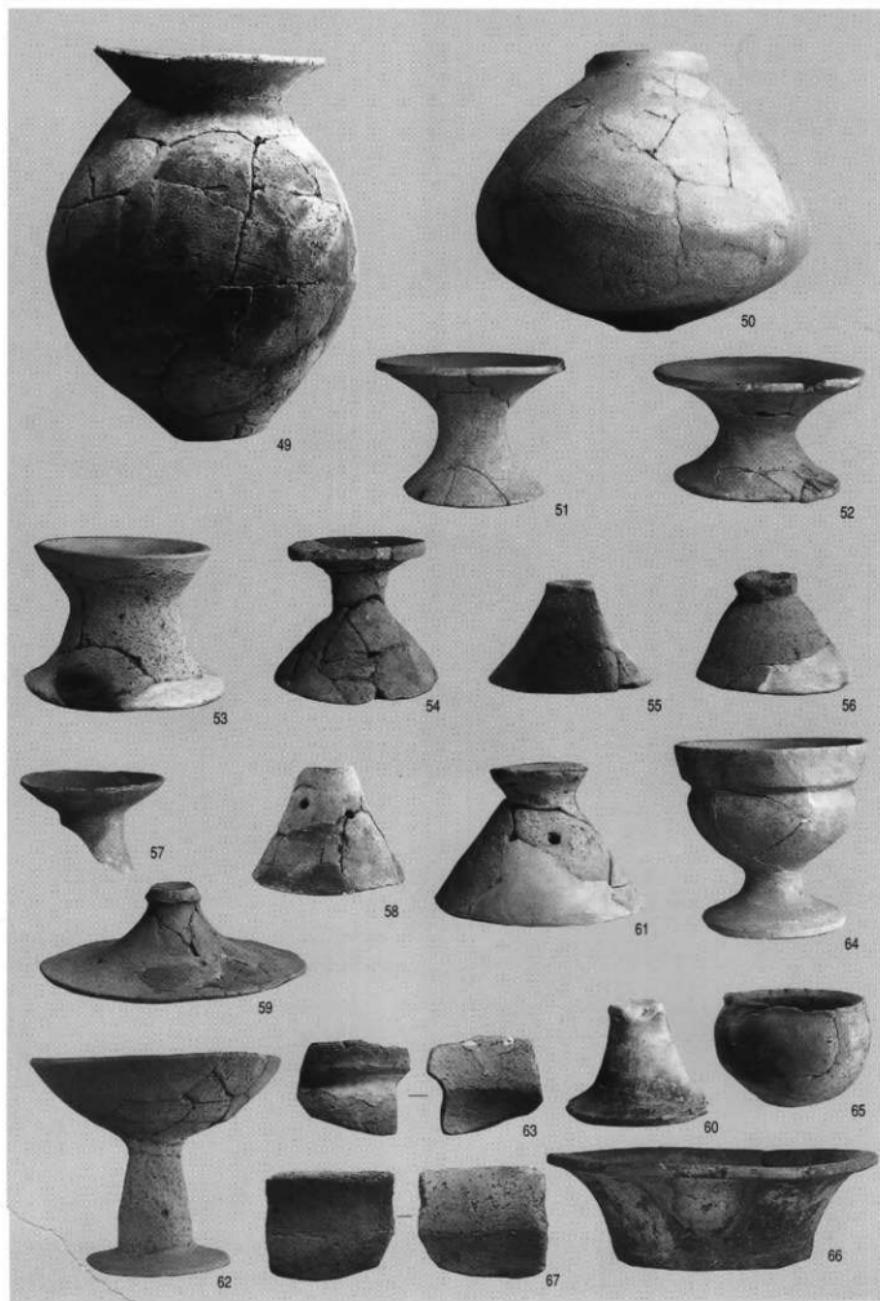
467

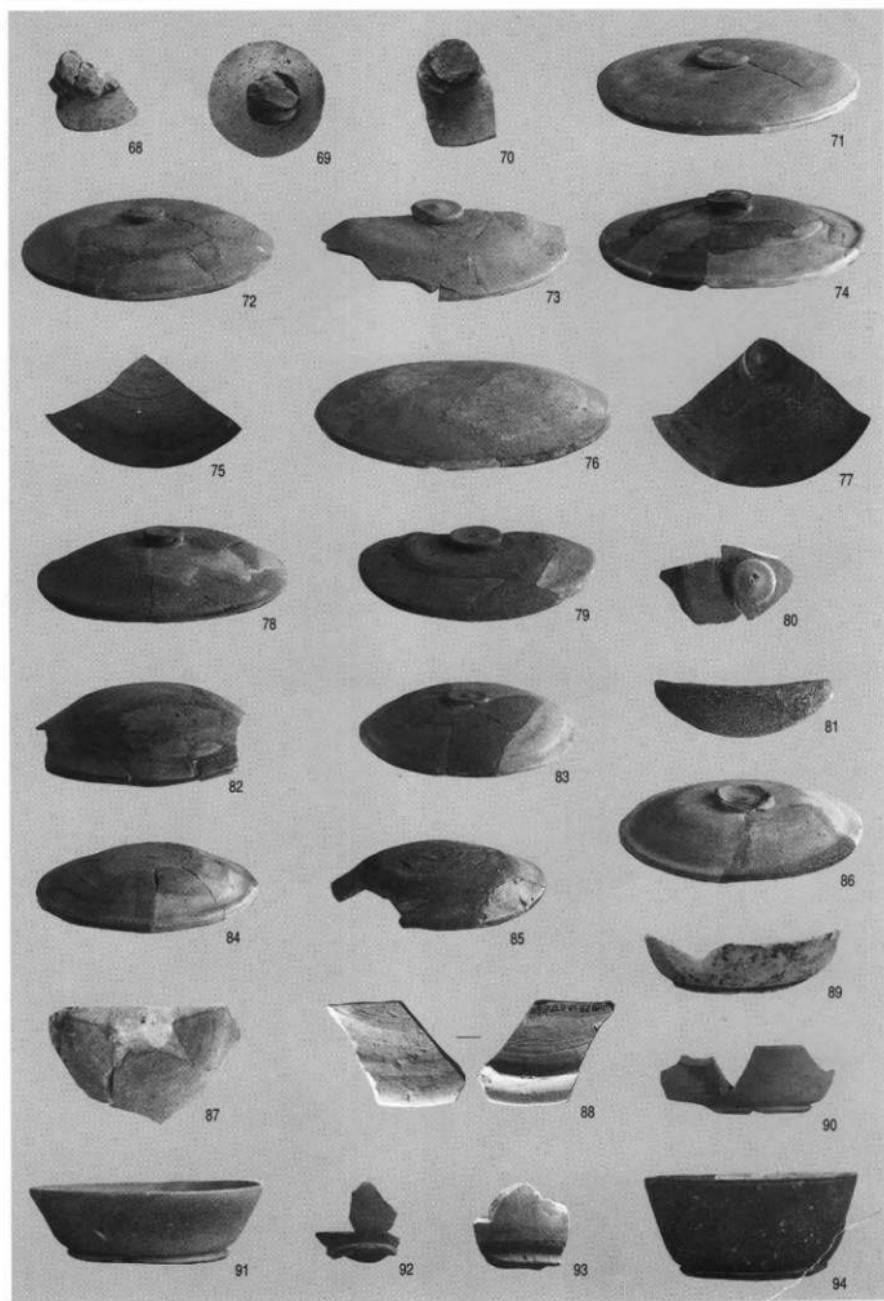


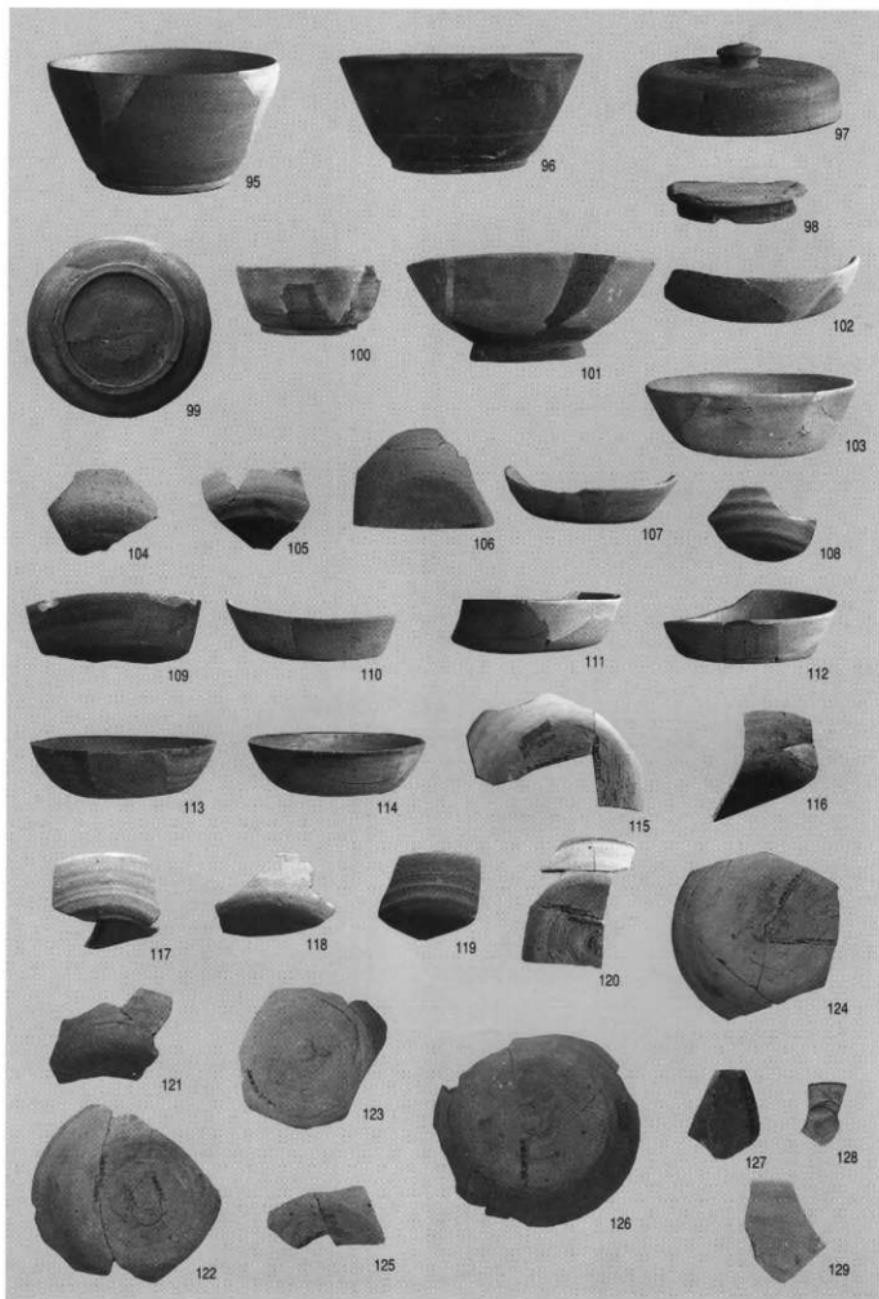
468



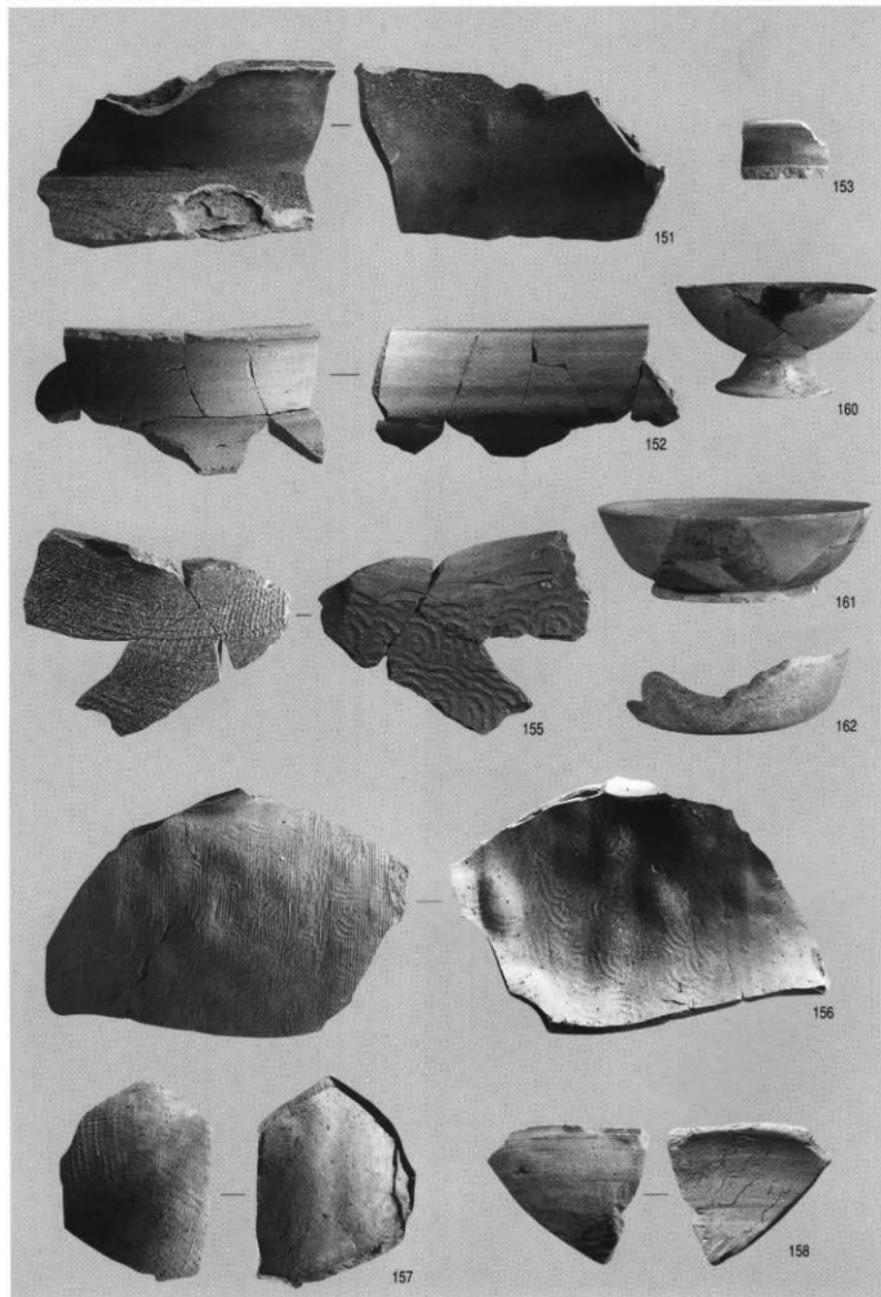


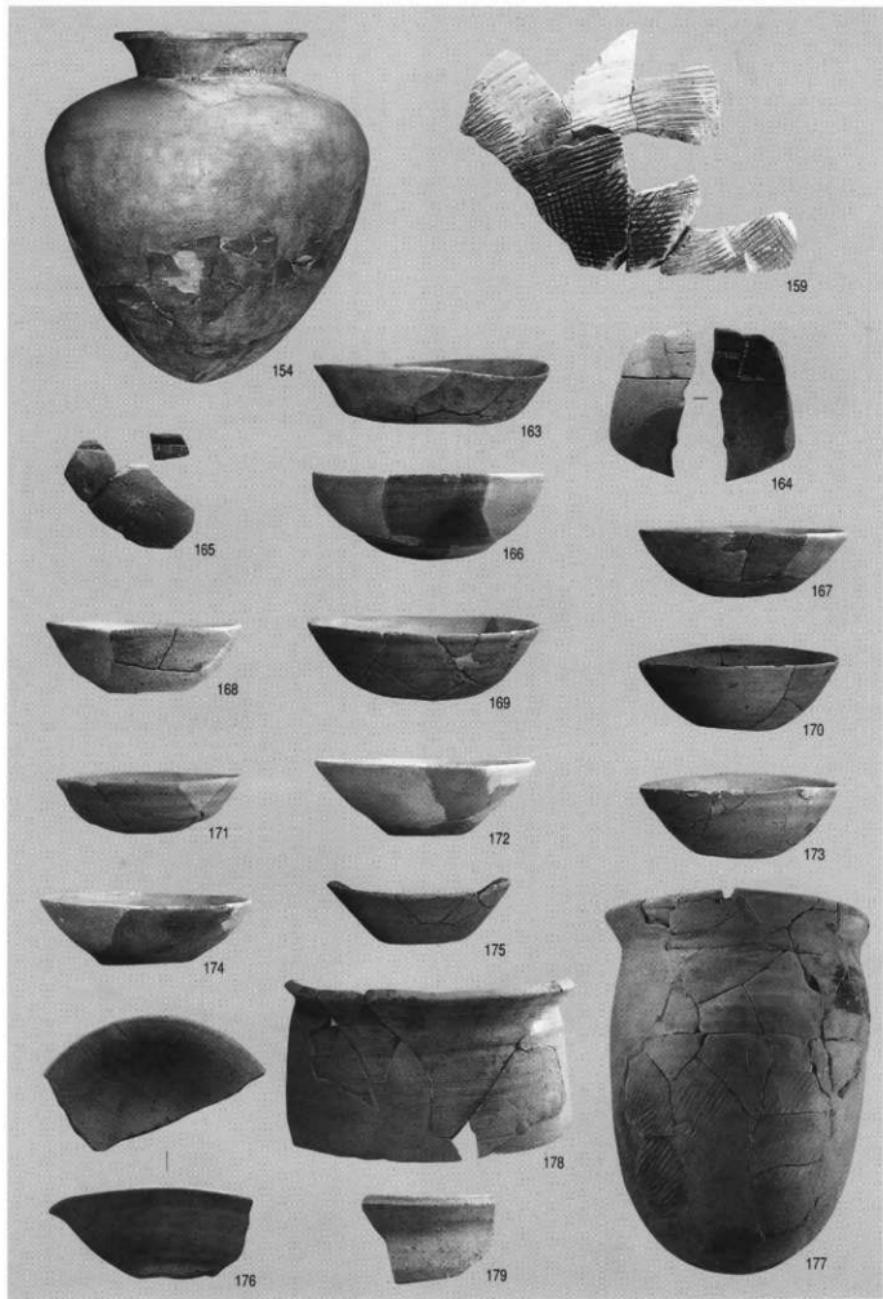


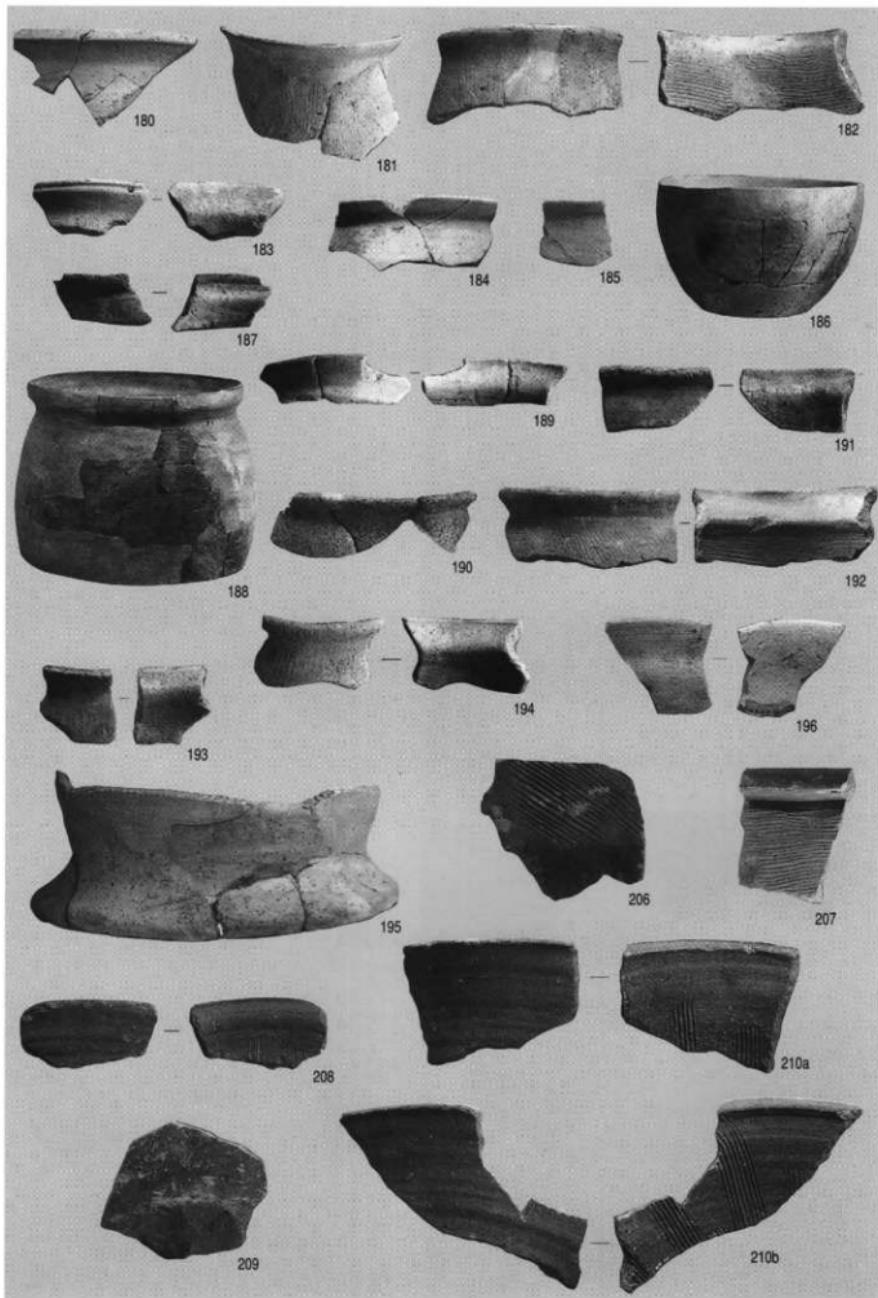


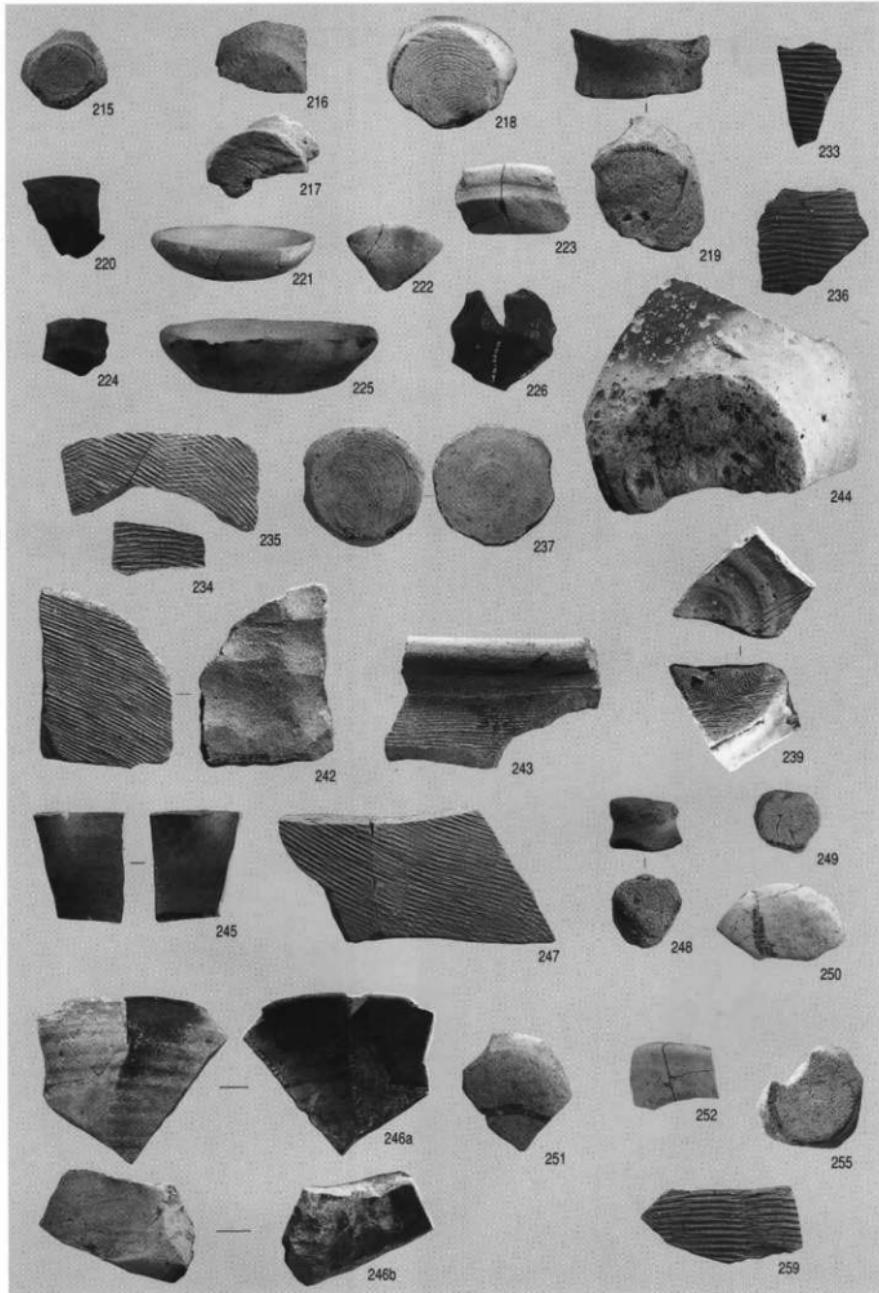


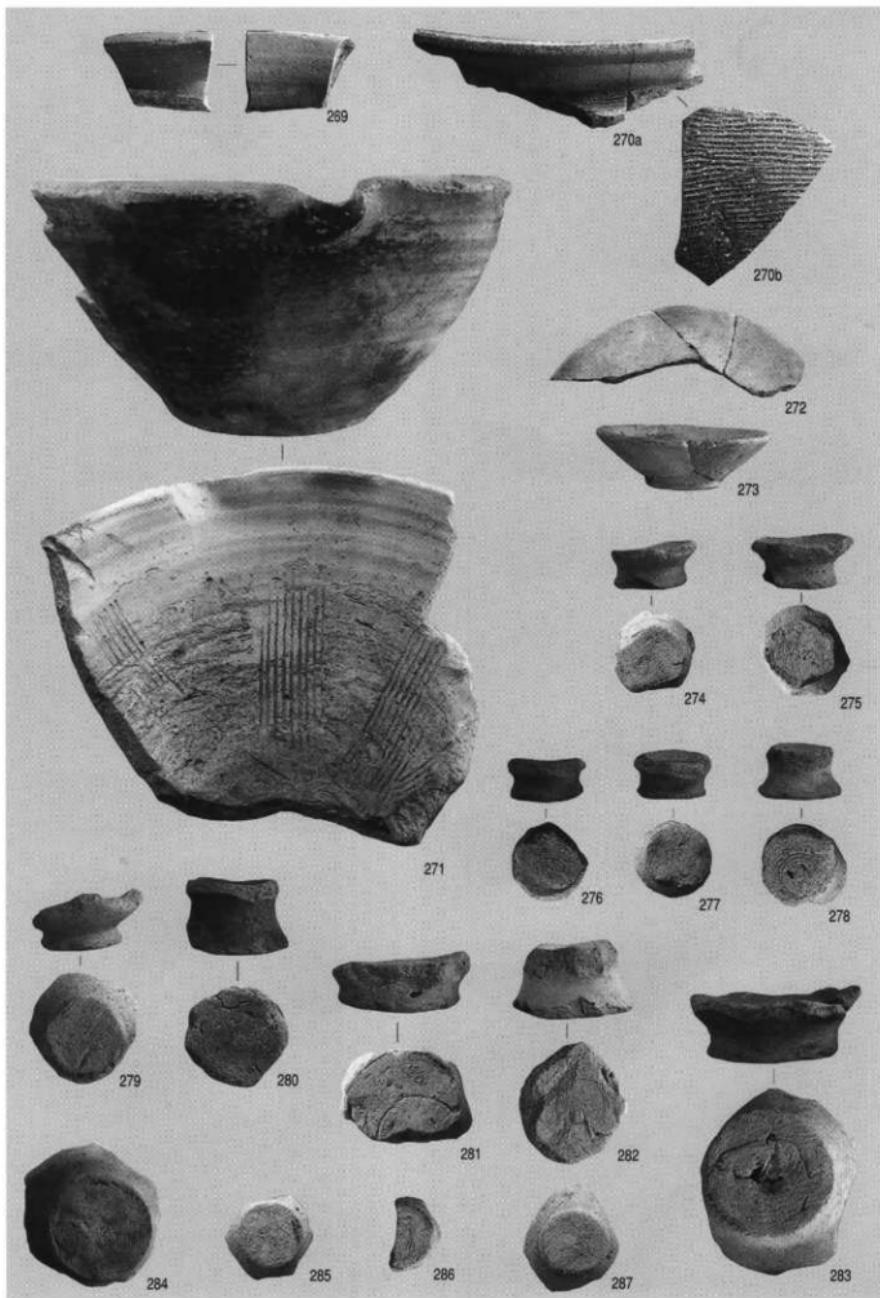


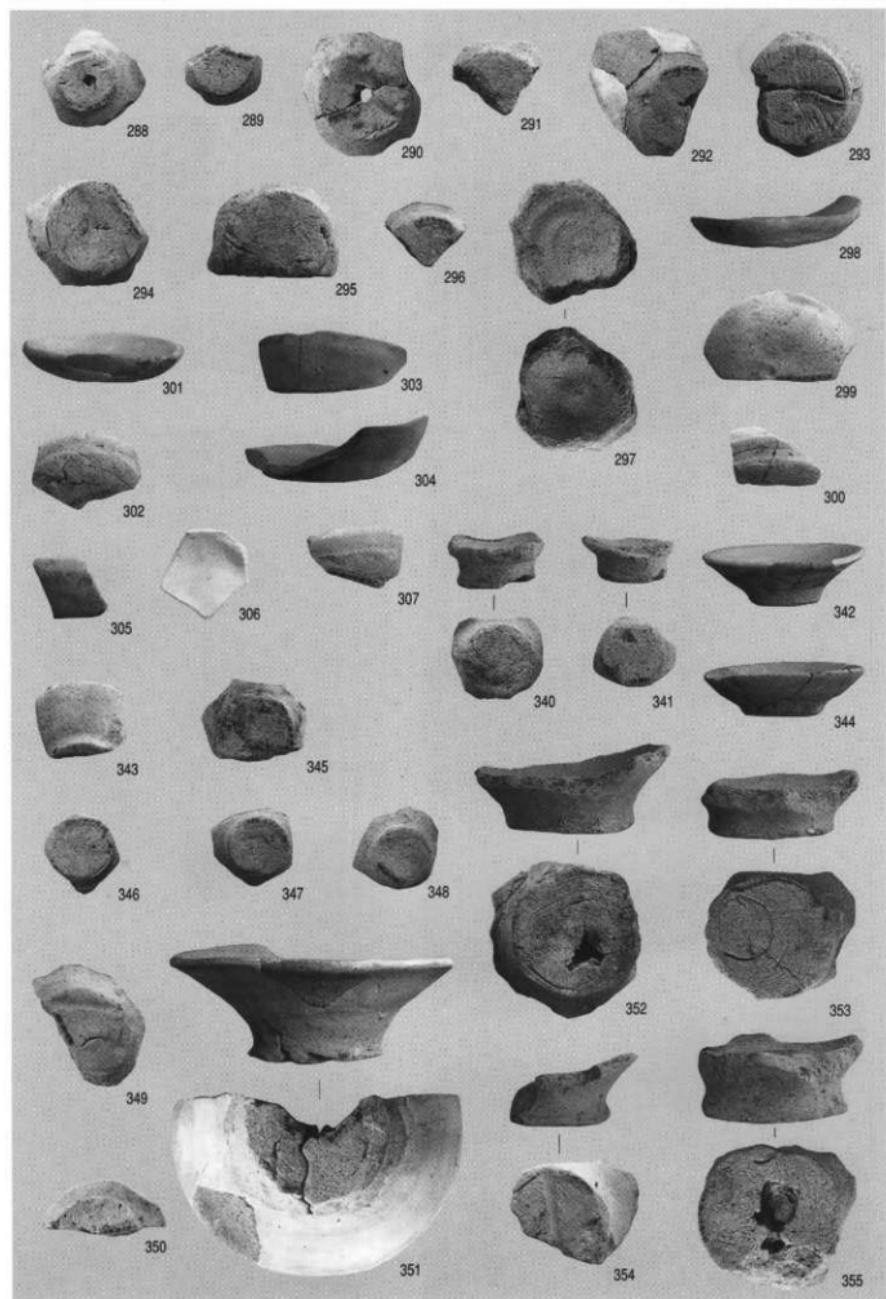


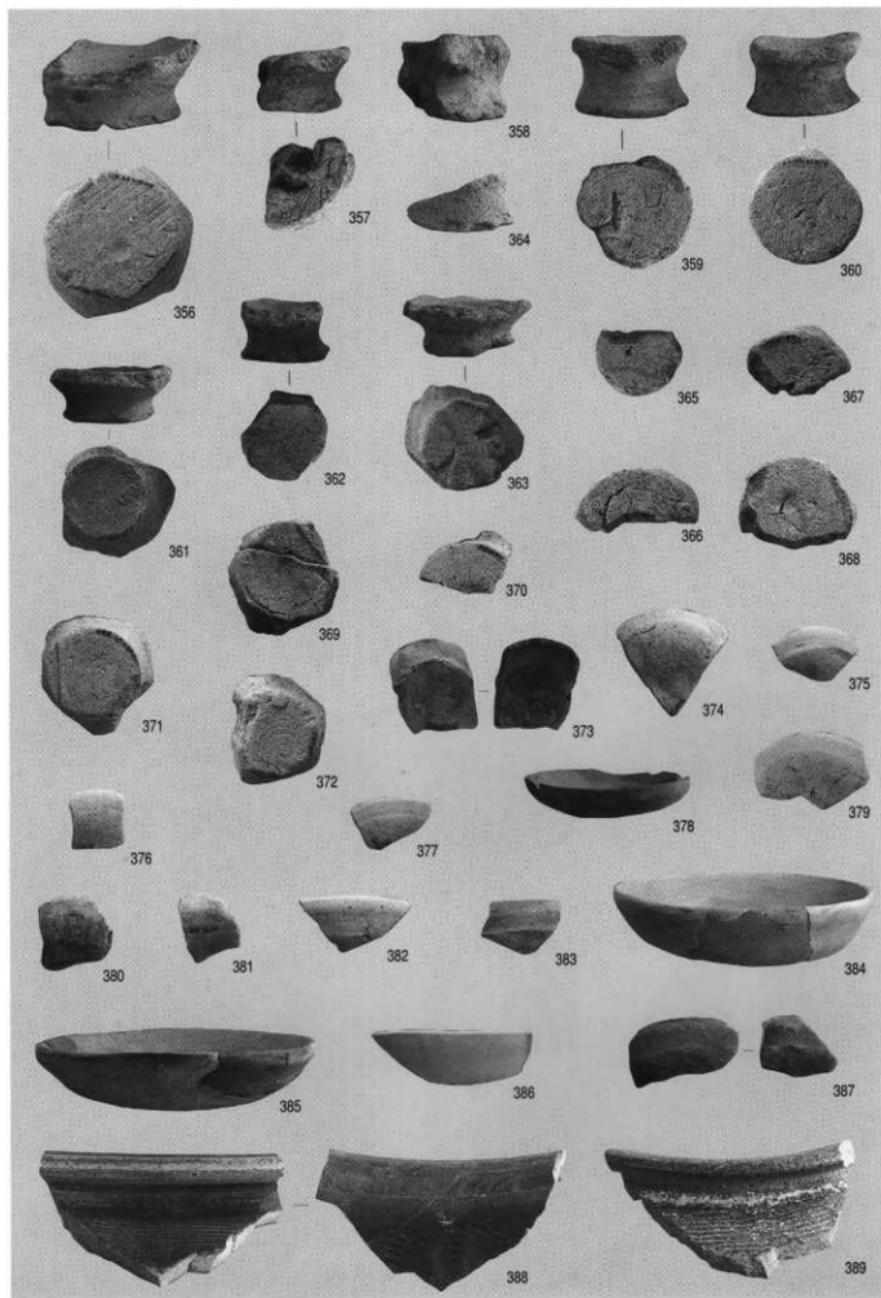


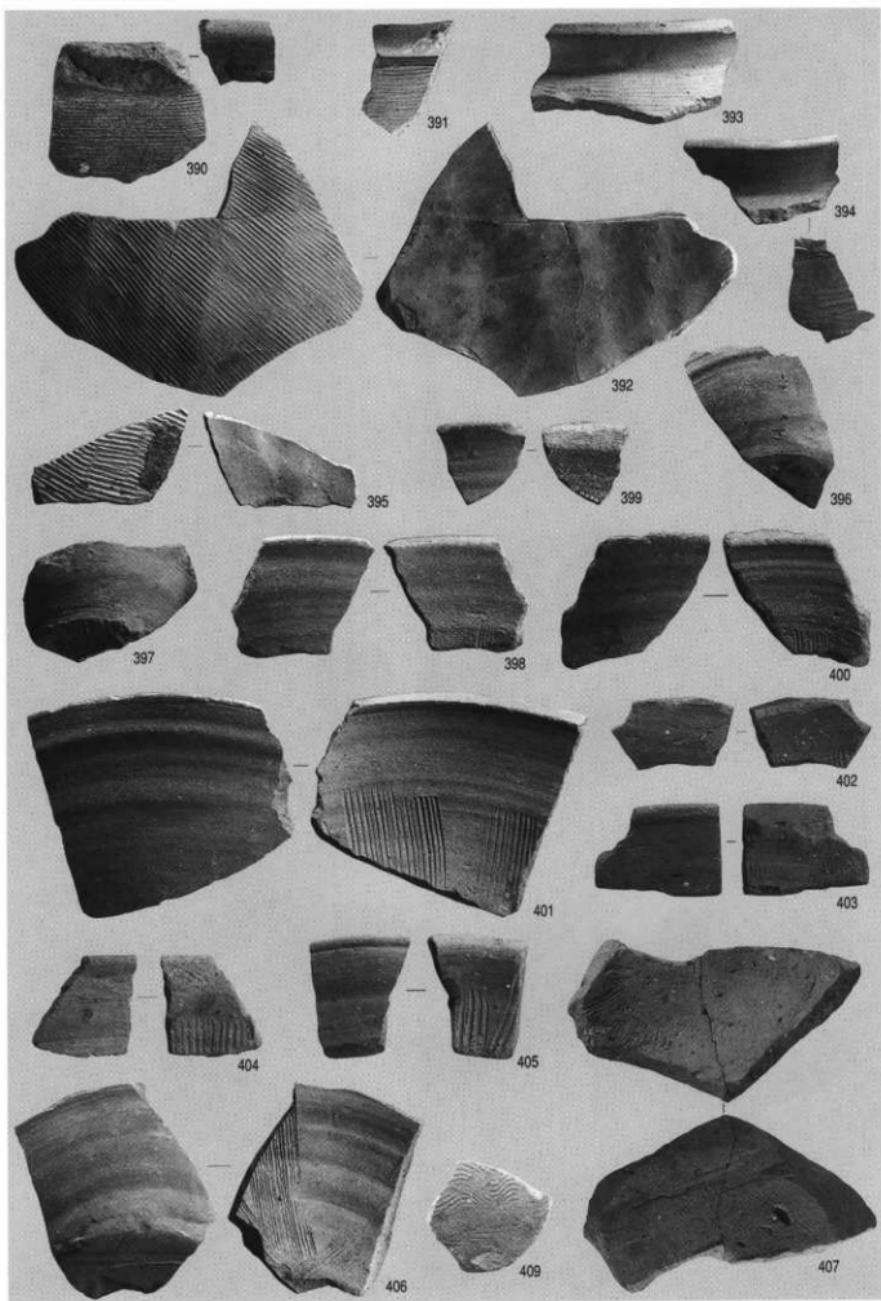


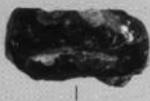
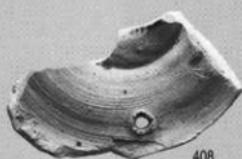












471



474



475



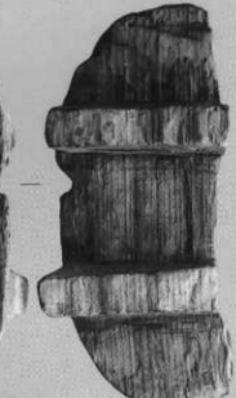
476



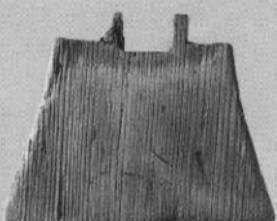
477



479



483





491



492



487



495



486



497



498



499



500



501

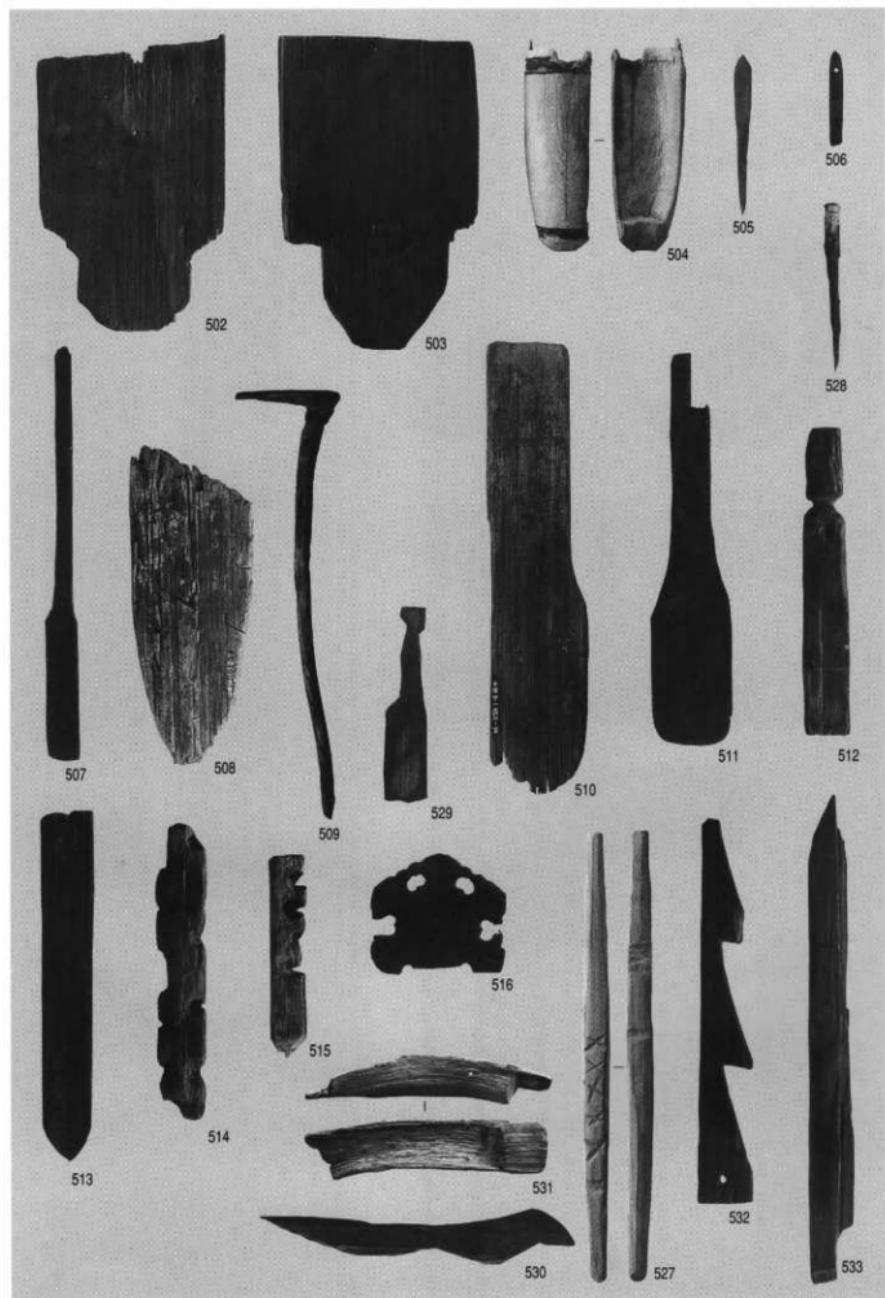


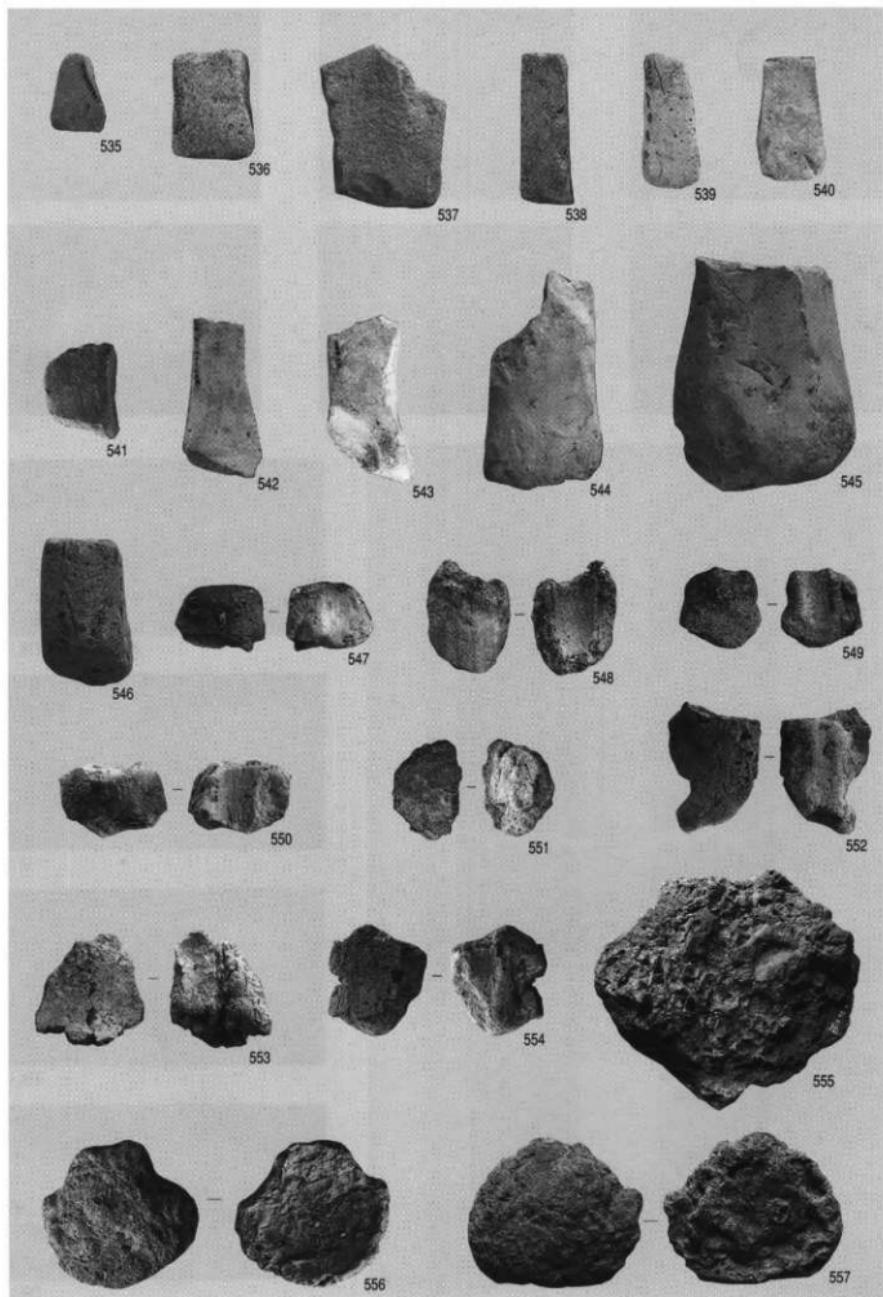
493



496

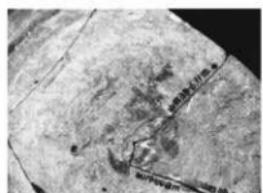




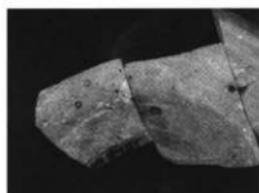




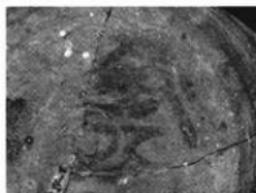
123



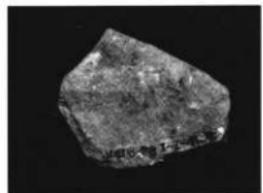
124



125



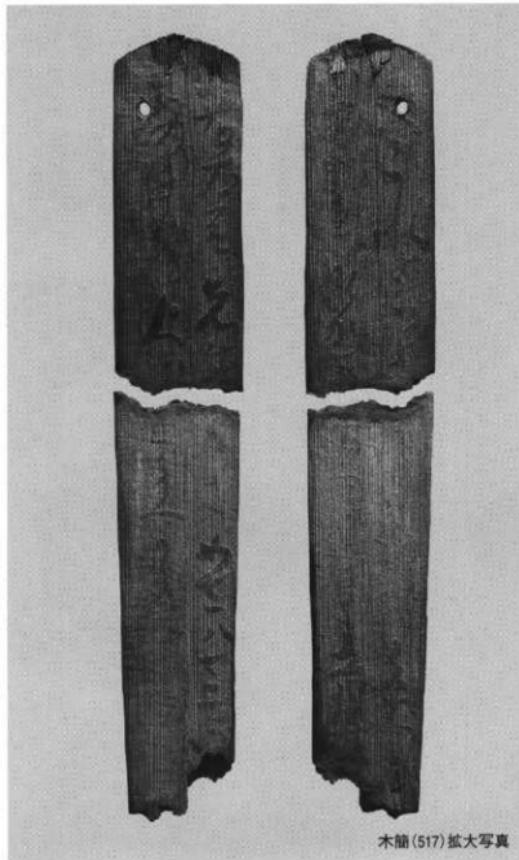
126



127



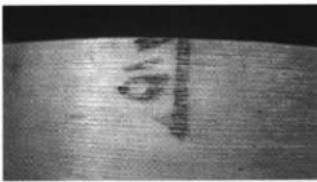
128



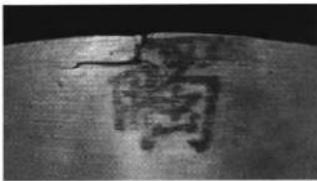
木簡(517)拡大写真



桶(494)墨書 「東」



「司」



「触」



「桶」

報告書抄録

ふりがな	やまだごうちいせき						
書名	山田郷内遺跡						
副書名	一般国道116号和島バイパス建設に伴う発掘調査報告書						
編著者名	丸山一昭 田中靖 前嶋敏 竹原弘撃 藤森健太郎 皆川義孝						
編集機関	長岡市教育委員会						
所在地	〒940-0072 新潟県長岡市柳原町2番地1 TEL 0258-32-0546						
発行年月日	平成19(2007)年3月22日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	道路番号	(世界測地系)		19900426	
やまだごうちいせき 山田郷内遺跡	新潟県長岡市島崎 字山田郷内	15021	988	37° 34° 54°	138° 45° 31°	~	2800m ² 道路建設
所収遺跡名	種別	時期	主な遺構	主な遺物		符記事項	
山田郷内遺跡	遺物包含地	縄文		縄文土器・石器			
		弥生		弥生土器			
		古墳	溝3条・墓石遺構1基	古式土器			
			土坑2基				
		古代	ピット群	土器・須恵器			
		中世	鎌治工房跡1棟 掘立柱建物1棟 水田跡 溝1-3条 墓石遺構1基	中世土器・青磁 白磁・青白磁・珠洲 越前・信楽・荒器系 漆器・箸・祝符・刀形 船形・人面墨書き 砥石・刀子・りん・環		「東司触桶」と墨書き された陶物は所属時期は 不明であるが仏教寺院 の作法に則った用具で あることが判明した。	
		近世		陶磁器・土器・泥人形			

山田郷内遺跡

—一般国道116号和島バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成19(2007)年3月22日印刷

平成19(2007)年3月22日発行

発行 長岡市教育委員会

印刷 株式会社 サンワプロセス